

我頸大成
本其他、我
がかしらに
作る
逢ひて大
全の説によ
れば相手也

づ我頸を斬るゆゑに、人をばえ切らぬなり。おのれまづ酔ひて臥しなば、人はよもめさ
じ」と申しき。劔にて斬り試みたりけるにや、いとをかしかりき。
「博奕の負きはまりて、残なくうち入れんとせんに、逢ひては打つべからず。立ち歸り
つゞけて勝つべき時のいたれるを知るべし。その時を知るをよき博奕といふなり」とあ
るもの申しき。

あらためて益なきことは、改めぬをよしとするなり。

思はずなれ
ど一意外な
れど

雅房大納言は、才かしく善き人にて、大將にもなさばやとおほしける頃、院の近習な
る人「只今あさましきことを見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、
「雅房卿、鷹に飼はんとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と
と申されけるに、うとましく、にくとおほしめして、日ごろの御氣色もたがひ、昇進もし
たまはざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足はあとな
き事なり。虚言は不便なれども、かゝることを聞かせ給ひて、にくませ給ひける君の御

犬の足は云
云一犬の足
を切りし事
は虚構也

心は、いと尊きことなり。大かた生けるものを殺し、痛め闘はしめて遊び樂まん人は、畜
生残害の類なり。よろづの鳥獸、小き蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子を
おもひ親をなつかしくし、夫婦を伴ひ、妬み怒り、慾おほく、身をあいし、命を惜める
事、偏に愚癡なるゆゑに、人よりも勝りて甚だし。かれに、苦を與へ、命を奪はんこ
と、いかでか痛ましからざらん。すべて一切の有情をみて慈悲の心なからんは、人倫に
あらず。

顔回は云々
論語公治
長篇に、顔
淵曰願無
伐善無
施勞
おとなしき
人一人

顔回は志人に勞を施さじとなり。すべて人を苦しめ物を虐ぐることを、賤しき民の志を
も奪ふべからず。又いとよなき子を賺し嚇し、言ひ辱しめて興することあり。おとなし
き人は、まことならねば事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみて恐しく、恥しく、あ
さましきおもひ、誠に切なるべし。これを惱して興すること、慈悲の心にあらず。おと
なしき人の、喜び怒り哀び樂ぶも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身を破
るよりも、心を痛ましむるは、人を害ふ事なほ甚だし。病を受くる事も、多くは心より

凌雲の類云
云一魏明帝
の時、章誕
といふ人凌
雲觀にのぼ
りて榜に題
書し忽ち白
頭となりし
事、三國史
に見ゆ

受く。外より來る病は少し。薬を飲みて汗を求むるには、驗なきことあれども、一旦恥ぢ恐るよことあれば、かならず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。物に争はず、おのれを枉けて人に従ひ、我身を後にして、人を先にするには如かず。萬のあそびにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらんためなり。おのれが藝の勝りたる事をよろこぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、また知られたり。我負けて人を歡ばしめんと思はざ、更にあそびの興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰めん事、徳に背けり。むつまじき中に戯るよも、人をはかり欺きて、おのれが智の勝りたることを興とす。これまた禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて、長き恨を結ぶ類おほし。これ皆あらしむを好む失なり。人に勝らんことを思はざ、たゞ學問して、その智を人に勝らんと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに争ふべからずといふ事を知るべきゆゑなり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、たゞ學問の力なり。

貧しきものは財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は速にやむを智といふべし。許さざらん人は人のあやまりなり。分を知らずして強ひて勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病をうく。

鳥羽殿一白河院の建てられし仙洞御所

李部王の記
一醍醐帝の御子式部卿重明親王の御著

貧しきものは財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は速にやむを智といふべし。許さざらん人は人のあやまりなり。分を知らずして強ひて勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば盗み、力衰へて分を知らざれば病をうく。鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の號にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲はなはだ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。夜のおとどは東御枕なり。大かた東を枕として、陽氣を受くべきゆゑに、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕常のことなり。白河院は北首に御寢なりけり。「北は忌むことなり。また伊勢は南なり。太神宮の御方を御跡にせさせ給ふこといかど」と人申しけり。たゞし太神宮の遙拜は辰巳に向はせたまふ、南にはあらず。高倉院の法華堂の三昧僧、何某の律師とかやいふもの、ある時鏡を取りて顔をつくづく

官名、僧綱の一、釋氏要覽に、律鈔解題云佛言善解一字名律師一字者律字也云々

これを云々
一尙書に念
レ茲在レ茲

と見て、我貌の醜くあさましきことを、あまりに心憂く覺えて、鏡さへうとまじき心地しければ、その後長く鏡をおそれて手にだに取らず、更に人に交る事なし。御堂の勤ばかりにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそ、ありがたく覺えしか。かしこけなる人も、人の上をのみ計りて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば己を知るを、物知れる人といふべし。貌醜けれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近きことをも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非をも知らねば、まして外の譏を知らず。たゞし貌は鏡に見ゆ、年は數へて知る。我身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいひまし。貌を改め、齡を若くせよとはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞしづかに身を安くせざる。行愚なりと知らば、何ぞこれを思ふことこれにあらざる。すべて人に愛樂せられずして衆に交るは恥なり。貌みにくよ心おく

不堪の藝
堪能ならざ
る藝
壯なる一曲
禮に三十
日壯、血氣
盛の者

そむること
一深きわけ
なき言、つ
まらぬ言葉
あきらめ
説き明かす

れにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能の座につらなり、雪の頭を戴きて壯なる人にならび、況や及ばざることを望み、協はぬことを憂へ、來らざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心にひかれて、自ら身を恥しむるなり。貪ることのやまざるは、命を終ふる大事今こゝに來れりと、たしかに知らざればなり。

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將に逢ひて、「わぬしの問はれんほどのこと、何事なりとも答へ申さざらんや」といはれければ、具氏「いかゞ侍らん」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はかくしき事は片端もまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそとろごとの中に、おほつかなき事をこそ問ひ奉らめ」と申されけり。「ましてこゝもとの淺きことは、何事なりともあきらめ申さん」といはれければ、近習の人々、女房なども、「興あるあらがひなり。同じくは御前にて争はるべし。負けたらん人は供御をまうけらるべし」と定めて、御前にてめし合せられた

馬のきつりやう云々―黒川眞頼翁詳しく考案を立てて雁(かり)の隠語なりといひたれど如何にか

土偏―鹽の字を塩の俗字にて答へし也

りけるに、具氏「幼くより聞きならひ侍れど、その心しらぬこと侍り。馬のきつりやうきつにのをか、なかくほれいりくれんどうと申すことは、いかなる心にか侍らん。うけたまはらん」と申されけるに、大納言入道はたとつまりて、「これはそとろごとなれば、いふにも足らず」といはれけるを、「もとより深き道は知り侍らず。そとろごを尋ね奉らんと、定め申しつ」と申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

醫師あつしけ、故法皇の御前にさぶらひて、供御の参りけるに、「今参りはべる供御のいろを、文字も功能も尋ね下されて、そらに申しはべらば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と申しける時しも、六條の故内府まり給ひて、「有房ついでに物習ひ侍らん」とて、「まづしほといふ文字は、いづれの偏にか侍らん」と問はれたりけるに、「土偏に候ふ」と申したりければ、「才のほど既にあらはれにたり。今はさばかりにて候へ、ゆかしきところなし」と申されけるに、とよみになりて罷り出でに

とよみになりて―どつと大笑になりて

浅茅が宿―あれ果てたる宿

心ぶかう！趣深く、文段抄の説に依ればこの語下之又なくあはれなりと補ふ

けり。

花は盛に、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見に罷りけるにはやく散り過ぎにければ」とも、「さはる事ありて罷らで」なども書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事は。花の散り月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし」などはいふめる。萬の事も始終こそをかしかれ。男女の情も、偏にあひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲を思ひやり、浅茅が宿に昔を忍ぶこそ、色このむとはいはめ。望月の隈なきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心ぶかう、青みたる様にて、深き山の杉の梢に見えたる木の間のかげ、うちしぐれたるむら雲かくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白樫などの、濡れたるや

色こくし
つこく
あからめ
よそ目、わ
き目

うなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしう覺ゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見る物かは。春は家を立ちさらでも、月の夜は闇のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。よき人は偏にすける様にも見えす、興ずる様もなほざりなり。片田舎の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては大なる枝心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけな。ど、萬の物、よそながら見る事なし。さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといとおそし。そのほどは棧敷不用なり」とて、奥なる屋にて酒飲み物食ひ、圍碁雙六など遊びて、棧敷には人をおきたれば「わたり候ふ」といふ時に、おのく肝つぶるよやうに争ひ走上りて、落ちぬべきまで簾張りいでて、押しあひつゝ、一事も見洩さじとまほりて、とありかよりと物事にいひて、わたり過ぎぬれば、又渡らんまでといひて降りぬ。唯物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆよしけなるは、眠りていとも見ず。若くするく

及びかこら
す―及び腰
になりて後
より人への
び掛からず

らうがはし
―亂りがは
し

こころ―多
く

なるは、宮仕にたちる、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかよらず、わりなく見んとする人もなし。何となく葵かけ渡してなまめかしきに、明け離れぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それかかれかな。ど思ひよすれば、牛飼下部など見知れるもあり。をかしくもきらくしくも、さまんに行きかふ、見るもつれぐならず。暮るゝ程には、立て竝べつる車ども、所なくなみるつる人も、いづかたへ行きつらん、程なく稀になりて、車どものらうがはしさも濟みぬれば、簾疊も取り拂ひ、目の前に淋しけになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。かの棧敷の前をこよら行きかふ人の見知れるが數多あるにて知りぬ、世の人数もさのみは多からぬにこそ。この人みな失せなん後、我身死ぬべきに定りたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。大なる器物に水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること少しと云ふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山に

まゝ子立
黒白の石を
竝べ印した
る石より敷
へて十に當
るを除く遊
戯

後の葵一祭
過ぎたる後
の葵、賀茂
の祭に葵か
くること前
にも見ゆ

も、送る數おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、ありがたき不思議なり。暫時も世をのどかに思ひなんや。まゝ子立といふものを、雙六の石にてつくりて、立て竝べたる程は、取られん事いづれの石とも知らねども、數へ當てよひとつを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、またくかぞふれば、かれこれ間抜き行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の軍にいづるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これを他所に聞くと思へるはいとはかなし。しづかなる山の奥、無常の敵きほひ來らざらんや。その死に臨めること、軍の陣に進めるにおなじ。祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色もなくおほえ侍りしを、よき人のしたまふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が、

玉だれに云
云一和泉式
部の詠、下
句、枯れて
もかよへ人
の面影
をりならぬ
云々一此贈
答千載集哀
傷部に出づ
辨の歌の上
句あやめ草
涙の玉にぬ
きかへて、

かくれどもかひなき物はもろともみすの葵の枯葉なりけり
と詠めるも、母屋の御簾に葵のかよりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。古き歌の詞書に、枯れたる葵にさしてつかはしけるとも侍り。枕草紙にも、來しかた戀しきもの、かれたる葵と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季物語にも、玉だれに後の葵はとまりけりとぞ書ける。おのれと枯るよだにこそあるを、名残なくいかど取り捨つべき。御帳にかよれる薬玉も、九月九日菊にとりかへらるよといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮かくれ給ひて後、ふるき御帳の内に、菖蒲薬玉などの枯れたるが侍りけるを見て、をりならぬをなほぞかけつると、辨の乳母のいへる返事に、あやめの草はありながらとも、江の侍従が詠みしぞかし。
家にありたき木は松櫻。松は五葉もよし、花はひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、このごろぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、近の櫻、皆ひとへにて

返歌は玉の
きしあやめ
の草はあり
ながら夜殿
は荒れん物
とやば見し

京極入道中
納言一藤原
定家

こそあれ。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありな
ん。遅櫻またすさまじ、蟲のつきたるもむづかし。梅はしろき、うす紅梅、一重なるが
疾く咲きたるも、かさなりたる紅梅の、にほひめでたきもみなをかし。「おそき梅は櫻に
咲きあひて、おほえおとりけおされて 枝に萎みつきたる、こころうし。一重なるがまづ
咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなん軒近く植
ゑられたりける。京極の屋の南むきに 今も二本はべるめり。柳またをかし。卯月ばか
りの若楓、すべて萬の花紅葉にも優りてめでたきものなり。橘、桂、いづれも木はもの
ふり、大なるよし。草は山吹、藤、杜若、撫子、池には蓮。秋の草は萩、薄、桔梗、萩、
女郎花、藤袴、紫苑、吾木香、荳蔻、龍膽、菊、黄菊も。葛、葛、朝顔、いづれもいと
高からず、さよやかなる垣に しけからぬよし。この外世にまれなるもの、唐めきたる
名の聞きにくく、花も見なれぬなど、いとなつかしからず。大かた何も珍しくありが
たきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうの物なくてありなん。

さまあし
見つともな
し

悲田院一孤
兒病者を收
容して施養
せし所
けやけく
きつぱり
と、木で鼻
をこくつた
様に
すぐよか
剛直

身死して財残ることは、智者のせざるどころなり。よからぬもの蓄へおきたるも拙く、よ
きものは、心をとめけんとはかなし。こちたく多かる、まして口をし。我こそ得めなど
いふものどもありて、あとに争ひたる、さまあし。後は誰にと志すものあらば、生けらん
中にぞ譲るべき。朝夕なくて協はざらん物こそあらめ。その外は何も持たでぞあらまほ
しき。

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來
りて物がたりすとて、「吾妻人こそいひつることは頼まれる。都の人はことうけのみよく
て、實なし」といひしを、聖「それはさこそ思すらめども、おのれは都に久しく住みて、馴
れて見侍るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情あるゆゑに、人
のいふほどの事、けやけく否びがたく、よろづ言ひはなたず、心弱くことうけしつ。偽
せんとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意通らぬこと多かるべ
し。吾妻人は我かたなれど、けには心の色なく情おくれ、偏にすぐよかなるものなれば、

聲うちゆが
み一音聲な
まりて

かたへ一傍
輩

するすみ
匹身、人
の一物も手
に持たぬを
するすみと
いふ(沙石
集)

初より否といひて止みぬ。にぎはひ豊なれば、人には頼まるとぞかし」とことわられ侍りしこそ。この聖、聲うちゆがみあらくしくて、聖教のこまやかなる理いと辨へずもやと思ひしに、この一言の後心にくよなりて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、かく和ぎたるところありて、その益もあるにこそと覺え侍りし。

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒夷の恐しけなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては物のあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらんといとおそろし。子ゆゑにこそ萬のあはれは思ひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かよるものの心に慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子持ちてこそ親の志はおもひ知るなれ。世をすてたる人のよろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづに詔ひ望ふかきを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからん親のため妻子のためには、恥をも忘れ盗もしつべきことな

かなしから
む云々一最
愛なる親や
妻子の爲め
には云々、
かなしはい
とほしかば
ゆしの義な
るべし、文
段抄に只今
飢ゑ凍ゆる
を見てかな
しく思はん
親妻子とい
へるは如何
違ふ所一生
前道に違ふ
所

り。されば盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑす寒からぬやうに、世をばおこなはまほしきなり。人恒の産なき時は恒の心なし。人窮りて盗す。世治らずして凍餒の苦あらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦しめ法を犯さしめて、それを罪なはんこと、不便のわざなり。きていかゞして人を恵むべきとならば、上のおごり費すところを止め、民を撫で農をすゝめば、下に利あらんこと疑あるべからず。衣食世の常なる上にひがごとせん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

人の終焉のありさまのいみじかりし事など、人のかたるを聞くに、たゞ静にして亂れずといはゞ心にくかるべきを、愚なる人は、あやしく異なる相を語りつけ、いひし言葉もふるまひも、おのれが好む方に響めなすこそ、その人の日ごろの本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、権化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれ違ふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。

梅尾の上人道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふをのこ、あしくといひければ、上人た

宿執開發―
前世の功德
あらはるゝ
こと

ちとまりて、「あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字々と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるは」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候ふ」と答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあなれ。うれしき結縁をもしつるかな」とて感涙を拭はれけるとぞ。

桃尻―尻浮
きて鞍にす
わらぬ也

御隨身秦の重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。よくく慎み給へ」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言、神の如しと人おもへり。さて「いかなる相ぞ」と人の問ひければ、「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」とぞいひける。

沛艾―康熙
字典に、沛
艾姿容俊偉
貌、文選註
には馬行貌、
馬の逞しく
などり上れ
るをいふ

明雲座主、相者に逢ひ給ひて、「おのれ若兵杖の難やある」と尋ね給ひければ、相人「まことにその相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害の恐おはしますまじき御身にて、假にもかくおほしよりて尋ね給ふ。これ既にそのあやぶみの兆

なり」と申しけり。はたして矢にあたりてうせ給ひにけり。

灸治あまた所になりぬれば神事に穢ありといふこと、近く人のいひ出せるなり。格式等にも見えすとぞ。

四十以後の人、身に灸を加へて三里を焼かざれば上氣のことあり、かならず灸すべし。鹿茸を鼻にあてと嗅ぐべからず、ちひさき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。

能をつかん
とする人―
藝能に志す
人

能をつかんとする人、よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ、内々よく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめと常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひ得ることなし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、譏り笑はるよにも

堅固かたほ
なる―一向
に未熟なる

恥ぢず、つれなくすきてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづます妄にせずして、年をおくれば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位にいたり、徳たけ人に許され

瑕瑾―疵銀
の義、瑾は
説文に瑾瑜

て、ならびなき名をうることなり。天下のものの上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、無下の瑕瑾もありき。されどもその人、道のおきて正しく、これを重くして

美玉也、左傳に瑋瑜璉（きんぎょ）緞（じゆ）などありてもと疵（きず）の義（ぎ）にあらず美玉の義（ぎ）なるを早くより斯く誤用し來れり

おぼつかないからずして—文段抄、おぼつかなくは無きにして止むべしと也、大體に通じたる所にて止めよの義

放埒（ほうりやう）せざれば、世の博士（はかせ）にて、萬人（ばんにん）の師（し）となること、諸道（しよたう）かはるべからず。ある人のいはく、年五十（ごじゆう）になるまで上手（じやうず）に至らざらん藝（ぎ）をば捨つべきなり。勵（りき）み習（しゆ）ふべき行末（ゆくすゑ）もなし。老人（らうじん）の事をば人もえ笑（わら）はず、衆（しゆ）に交りたるもあいなく見ぐるし。大かたよろづのしわざは止めて、暇（いとま）あるこそめやすくあらまほしけれ。世俗（せきじゆ）の事にたづさはりて、生涯（しやうがいの）を暮（くら）すは下愚（かぐ）の人なり。ゆかしく覺（たほ）えんことは學（まな）び聞（き）くとも、その趣（おもむき）を知りなば、おぼつかないからずして止むべし。もとより望（のぞ）むことなくしてやまは、第一（だいいち）のことなり。

西大寺（さいだいじ）靜然上人（じやうぜんじゆんじゆん）、腰（こし）かどまり眉（まゆ）白（しろ）く、まことに徳（とく）たけたるありさまにて、内裏（ないり）へ參（まゐ）られたりけるを、西園寺（さいえんじ）内大臣（ないだいじん）殿（の）、「あなたふとのけしきや」とて信仰（しんかう）の氣色（きしき）ありければ、資朝（すけとも）卿（きやう）これを見て、「年のよりたるに候（まう）ふ」と申（まを）されけり。後日（ごじつ）に、むく犬（いぬ）のあさましく老（おい）いさらほひて毛（け）はけたるをひかせて、「この氣色（きしき）たふとく見（み）えて候（まう）ふ」とて内府（ないふ）へ參（まゐ）らせられたりけるとぞ。

まもり—見守り

機嫌—文段抄に、向へる人の喜ぶ

爲兼大納言（たのかねのだいなごん）入道（にふだう）めしとられて、武士（ぶし）ども打圍（うちかこ）みて、六波羅（むつばら）へ牽（ひ）て行きければ、資朝（すけとも）卿（きやう）一條（いちじょう）わたりにてこれを見て、「あな羨（うらやま）し。世（よ）にあらんおもひで、かくこそ有（あ）りまほしけれ」とぞいはれける。

この人、東寺（とうじ）の門（かど）に雨宿（あまやどり）せられたりけるに、かたはものども集（あ）り居（ゐ）たるが、手も足もねぢゆがみうちかへりて、いづくも不具（ふぐ）に異様（いさやう）なるを見て、とりぐに類（たぐひ）なきくせものなり、尤も愛するに足れりと思ひて、まもり給（たま）ひけるほどに、やがてその興（きやう）つきて、見にくよいぶせく覺（たほ）えければ、たどすなほに珍（めづ）しからぬものには如（ごと）かずと思ひて、かへりて後、この間植木（あひだうき）を好（この）みて、異様（いさやう）に曲折（まげまげ）あるを求めて目を喜（よろこ）ばしめつるは、かのかたはものを愛するなりけりと、興（きやう）なく覺（たほ）えければ、鉢（はち）に栽（う）えられける木ども、みなほり棄（す）てられにけり。さもありぬべきことなり。

世にしたがはん人は、まづ機嫌（きげん）を知るべし。ついであしきことは、人の耳（みみ）にも逆（さか）ひ、心にも違（たが）ひて、その事成（じ）成（じやう）らず。さやうの折節（せつせつ）を心得（こころえ）べきなり。たどし病（やまひ）をうけ、子（こ）うみ、死（し）

氣色怒れる
きざしを見
てそれと大
方知るを機
嫌を知ると
はいへり

つばる一芽
ぐむ、きざ
す

大臣の大變
一任大臣披
露の宴

ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついであしとて止むことなし。生住異滅の移り變るまことの大事は、たけき河の漲り流るゝが如し。しばしも滯らず、直に行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、かならず果し遂げんと思はんことは、機嫌をいふべからず。とかくの用意なく、足を踏みとどむまじきなり。春暮れて後夏になり、夏はてよ秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり梅も苔みぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣下に設けたる故に、待ちとるついで甚早し。生老病死のうつり來ること、またこれに過ぎたり。四季はなほ定れる序あり、死期は序を待たず。死は前よりしも來らず、かねて後に迫れり。人みな死あることを知りて、待つ事しかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙なれども、磯より潮の滿つるが如し。

大臣の大變は、さるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。宇治左大臣殿は、東三條

させる事の
よせ一文段
抄に、さし
て御一門な
どいふ事の
よせもあら
れども也、
諸抄大成の
一説に、よ
せは子細な
り何とぞ極
りたる流例
はなけれど
も也

殿にて行はる。内裏にてありけるを申されけるによりて、よそへ行幸ありけり。させる事によせなければども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。

筆をとればものかよれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ。盃をとれば酒をおもひ、賽をとれば攤うたんことを思ふ。心はかならず事に觸れて來る。假にも不善のたはぶれをなすべからず。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むることもあり。假に今この文をひろげざらましかば、このことを知らんや。これすなはち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて珠數を取り經を取らば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、おほえずして禪定なるべし。事理もとより二つならず、外相もしそむかざれば、内證かならず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

「盃の底を捨つる」とはいかど心得たる」とある人の尋ねさせたまひしに、「擬當と申し侍るは、底に凝りたるを捨つるにや候ふらん」と申し侍りしかば、「さにはあらず、魚道

みなむすび
—公家の袴
僧の袈裟等
の飾に縁に
て結びさぐ
るもの

二品禪門—
藤原行忠

承仕法師—
寺中の雑役
かなす者

なり。流を流して口のつきたる所をすゝぐなり」とぞ仰せられし。

「みなむすびといふは、絲をむすび重ねたるが、蟪といふ貝に似たればいふ」と或やんごとなき人仰せられき。になといふは誤なり。

「門に額かくるを、うつといふはよからぬにや。勘解由小路二品禪門は、額かくるとのたまひき。見物の棧敷うづもよからぬにや。平張うつなどは常の事なり。棧敷構ふるなどいふべし。護摩たくといふもわろし。修する、護摩するなどいふなり。行法も法の字をすみていふわろし。濁りていふ」と清閑寺僧正仰せられき。常にいふ事にかよることのみ多し。

花の盛は、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日。おほやう違はず

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろ飼ひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸ひとつをあけたれば、數も知らず入りこもりける後、おのれも入りて、立て籠めて捕へつゝ殺しけ

使廳—檢非
違使廳

太衝—九月
の異名

吉平—安倍
晴明の子

顯密—顯は
天台宗、密
は眞言宗

るよそほひ、おどろくしく聞えけるを、草刈る童聞きて人に告げければ、村の男ども、おこりて入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺すところの鳥を頸にかけさせて、禁獄せられけり。基俊大納言別當の時になん侍りける。

太衝の太の字、點うつうたずといふこと、陰陽のともがら相論のことありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり」と申しき。

世の人相逢ふ時、しばらくも黙止することなし。かならず言葉あり。そのことを聞くに、おほくは無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために失多く得少し。これをかたる時、たがひの心に、無益のことなりといふことを知らず。東の人の、都の人にまじはり、みやこの人の、東に行きて身をたて、また本寺本山をはなれぬる顯密の僧、すべてわが俗にあらずして、人にまじはれる、見ぐるし。

人間の營みあへるわざを見るに、春の日に雪佛をつくりて、そのために金銀珠玉の飾を
いとなみ、堂塔を建てんとするに似たり。その構を待ちてよく安置してんや。人の命あ
りと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、いとなみ待つこと甚お
ほし。

あらぬ道—
自分の専門
外の道
品—位、家
柄などをい
ふ
を—馬鹿
者
いひけたれ

一道にたづさはる人、あらぬ道の席にのぞみて、「あはれ我道ならましかば、かくよそに
見侍らじものを」といひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。知
らぬ道の羨しく覺えば、「あなうらやまし、などか習はざりけん」と言ひてありなん。我
智を取り出でて人に争ふは、角あるものゝ角をかたづけ、牙あるものゝ牙をかみいだす
類なり。人としては善にほこらず、物と争はざるを徳とす。他に勝ることのあるは大な
る失なり。品のたかさにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされ
りと思へる人は、たとひ詞に出でてこそいはねども、内心に若干の科あり。謹みてこれ
を忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一

—いひ消さ
れる、けな
される

老の方人—
老功の人

おとなしく
云々—大人
しくして彼
是と非難を
加へ難き人
の意、おと
なしくは磐
抄には老人

道にもまことに長じぬる人は、みづから明にその非を知るゆゑに、志常に満たすし
て、つひに物に誇ることなし。

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には誰にか問はん」などい
はるゝは、老の方人にて生けるも徒ならず。さはあれど、それもすたれたる所のなき
は、一生この事にて暮れにけりと拙く見ゆ。「今は忘れにけり」といひてありなん。大方
は知りたりとも、すどろにいひ散らすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづ
から誤もありぬべし。「さだかにも辨へ知らず」などいひたるは、なほまことに道のあ
るじとも覺えぬべし。まして知らぬこと、したりがほに、おとなしくもどきぬべくもあ
らぬ人のいひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞き居たる、いとわびし。
「何事の式といふことは、後嵯峨の御代まではいはざりけるを、近き程よりいふ詞なり」と
人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、また内住したることを
いふに、世の式も變りたる事はなきにもと書きたり。

の義と見え
たれど年た
け身分高き
人の義に解
すべし

阮籍一竹林
七賢の隨一、
好まぬ人を
ば白眼を以
て見、心に
かなへる友
には青眼を
以て接す

ひじりめ一
聖目(セイ

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば疾く歸るべし。久しく居たる、いとむつかし。人と對ひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心もしづかならず、萬の事さはりて時をうつす、互のため益なし。厭はしけにいはんもわろし、心づきなき事あらんをりは、なか／＼その由をいひてん。おなじ心に向はまほしく思はん人の、つれ／＼にて、「いましばし、今日は心しづかに」などいはんは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も「久しく聞えさせねば」などばかり言ひおこせたる、いと嬉し。貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見わたして、人の袖のかけ、膝の下まで目をくばるまに、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかり掩ふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石を立てよはじくに、むかひなる石をまもりて弾くはあたらす、わが手もとをよく見て、こよ

モク)とて
碁盤面の上
下左右中央
四隅凡て九
個の黒星

清獻公一宋
の趙抃

風にあたり
云々一本草
序に、眞誥
曰常不_二能
慎_レ事_レ上者
自致_二百病
之本_一而怨_二
咎於神靈_一
乎當_レ風臥
濕反責_二他
人於失覆_一
皆癡人也

なるひじりめをすぐに弾けば、立てたる石必ずあたる。萬のこと外にむきて求むべからず、たゞこよもとを正しくすべし。清獻公がことばに、好事を行じて前程を問ふことなかれといへり。世を保たん道もかくや侍らん。内を慎まず、軽くほしきまよにしてみだりなれば、遠國必ずそむく時、始めて謀をもとむ。「風にあたり濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚なる人なり」と醫書にいへるが如し。目の前なる人の愁をやめ、惠をほどこし道を正しくせば、その化遠く流れんことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師をかへして徳を布くには如かざりき。

若き時は血氣内にあまり、心物に動きて、情欲おほし。身をあやぶめて碎け易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを捨てよ苦の袂にやつれ、勇める心盛にして物と争ひ、心に恥ぢ羨み、好む所日々に定らず、色にふけり情にめで、行を潔くして百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくして、身の全く久しからんことをば思はず、すけるかたに心ひきて、ながき世がたりとよなる。身をあやまつことは、

若き時のしわざなり。老いぬる人は精神おとろへ、淡くおろそかにして、感じ動くところなし。心おのづから静なれば、無益のわざをなさず、身をたすけて愁なく、人の煩なからんことを思ふ。老いて智の若き時にまされること、若くして貌の老いたるにまされるが如し。

高野大師
弘法大師

小鷹大鷹
小鷹には
鳴、鵜等を
捕り、大鷹
には雉子を
捕る

小野小町がこと、極めてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ文に見えたり。この文清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町が盛なること、その後のことにや、なほおほつかなし。小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大に就き小を捨つる理まことにしかなり。人事おほかる中に、道を樂むより氣味深きはなし。これまことの大事故なり。一たび道を聞きて、これに志さん人、いづれの業かすたれざらん、何事かを營まん。愚なる人といふとも、賢き犬の心にとらんや。世にはこよろえぬ事の多きなり。ともあるごとには、まづ酒をすよめ、強ひ飲ませたる

によび呻
吟して

これらにな
き人事―我
國に無き他
國の事
まばゆから
ず―はづか
しき様子も
なく

を興とすること、いかなる故とも心得ず。飲む人の、顔いと堪べがたけに眉をひそめ、人目をはかりて捨てんとし、遁げんとするを捕へて、引きとどめて、すどろに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりて、をこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れふす。祝ふべき日などとはあさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、物食はずによびふし、生を隔てたるやうにして、昨日のこと覺えず、公、私の大事を缺きて、煩となる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かく辛き目にあひたらん人、ねたく口をしと思はざらんや。他の國にかゝる習ありなりと、これらになき人事にて傳へ聞きたらんは、あやしく不思議に覺えぬべし。人の上にて見たるたに心うし。思ひ入れたるさまに心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのふしり、詞おほく、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝけて、用意なきけしき、日ごろの人とも覺えず。女は額髪はれらかに搔きやり、まばゆからず、顔うちさゝけてうち笑ひ、盃もてる手に取りつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、み

すぢりたる
一曲奏し
たる
のりあひひ
罵り合ひ
えもいはぬ
何ともい
はれぬ、嘔
吐など也

酒をとりて
云々梵綱

づからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出しておの／＼謠ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒く穢き身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへうとましく憎し。あるはまた我身いみじき事ども、かたはら痛くいひ聞かせ、あるは酔泣し、下さまの人はのりあひ諍ひて、あさましく恐しく、はぢがましく心憂きことのみありて、はては許さぬ物どもおし取りて、縁より墮ち、馬車より落ちてあやまちしつ。物にも乗らぬ際は、大路をよろほひ行きて、築地、門の下などに向きて、えもいはぬ事ども爲ちらし、年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつよよろめきたる、いとかはゆし。かゝる事をして、この世も後の世も、益あるべきわざならば如何はせん。この世にては過おほく、財を失ひ、病をまうく。百薬の長とはいへど、萬の病は酒よりこそ起れ。憂を忘るといへど、酔ひたる人ぞ、過にし憂さをも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智慧を失ひ、善根を焼くこと火の如くして悪を増し、よろづの戒を破りて地獄におつべし。酒をとりて人に飲ませたる人、五百生が間手なきも

經に、自身
手遇酒器
與人飲酒
者五百世
無手何況
自飲云々

上すくなし
参考に、
盃の上少し
と也
かいどり姿
かいどり
即ち鞋(ウ
チカケ)を
著たるが如
き姿、文段
抄に、下著
ばかりにて
帯をもせぬ

のに生るところ、佛は説きたまふなれ。かくうとましと思ふものなれど、おのづから捨て難き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して盃いだしたる、萬の興を添ふるわざなり。つれづれなる日、おもひの外に友の入りきて、執り行ひたるも心慰む。なれ／＼しからぬあたりの御簾の中より、御菓子御酒など、よきやうなるけはひしてさし出されたる、いとよし。冬せばき所にて、火にて物いりなどして、隔なきどちさし向ひて多く飲みたる、いとをかし。旅のかりや、野山などにて、「御肴何」などいひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、強ひられて少し飲みたるもいとよし。よき人のとりわきて、「今ひとつ、上すくなし」など、のたまはせたるも嬉し。近づかまほしき人の上戸にて、ひし／＼と馴れぬる、また嬉し。さはいへど、上戸はをかしく罪許さるよものなり。酔ひくたびれて朝寝したる所を、あるじの引きあけたるに、まどひて、ほれたる顔ながら、細き髻さしいだし、物も著あへず抱きもち、ひきしろひて逃ぐるかひどり姿のうしろ手、毛おひたる細脛のほど、をかしくつ

也

小松の御門
— 光孝天皇

鎌倉の中書
王— 一品中
務卿宗尊親
王

吉田中納言
— 藤原藤房

きづきし。
黒戸は、小松の御門位につかせ給ひて、昔たゞ人におはしましよ時、まさな事せさせ給ひしを忘れたまはで、常にいとなませ給ひける間なり。御薪にすよけたれば黒戸といふとぞ。

鎌倉の中書王にて御鞠ありけるに、雨ふりて後いまだ庭のかわかざりければ、いかどせんと沙汰ありけるに、佐々木隠岐入道、鋸の屑を車に積みておほく奉りたりければ、一庭に敷かれて、泥土のわづらひなかりけり。「とりためけん用意ありがたし」と人感じあへりけり。この事ある者のかたりいでたりしに、吉田中納言の、「乾砂子の用意やはなかりける」とのたまひたりしかば、恥しかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しく異様のことなり。庭の儀を奉行する人、乾砂子をまうくるは、故實なりとぞ。

ある所の侍ども、内侍所の御神樂を見て人にかたるとて、寶劍をばその人ぞ持ち給へるな。どいふを聞きて、うちなる女房の中に、「別殿の行幸には、晝御座の御劍にてこそ

入宋— 宋に
渡る事

江帥— 大江
匡房

さぎちやう
— 三毬打、
左義長、正
月十五日清
涼殿の庭上
にて爆竹を
なす儀式

あれ」と忍びやかにいひたりし、心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、焼野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。その聖の申されしは、「那蘭陀寺は大門口北むきなりと、江帥の説とていひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えす、更に所見なし。江帥はいかなる才覺にてか申されけん、おほつかなし。唐土の西明寺は北向勿論なり」と申しき。

さぎちやうは、正月にうちたるさぎちやうを、眞言院より神泉苑へ出して焼きあぐるなり。法成就の池にこそとはやすは、神泉苑の池をいふなり。

「ふれくこのゆき、たんばのこのゆきといふ事、米搗きふるひたるに似たれば粉雪といふ。たまれこのゆきといふべきを、誤りてたんばのとは言ふなり。垣や木のまたにとうたふべし」と或ものしり申しき。昔よりいひけることにや。鳥羽院をさなくおはしまして、雪の降

讚岐典侍一
堀河院の女
官

るにかく仰せられけるよし。讚岐典侍が日記に書きたり。
四條大納言隆親卿、からざけといふものを供御にまゐらせられたりけるを、「かく怪しき
もの参るやうあらじ」と人の申しけるを聞きて、大納言「鮭といふ魚まるらぬことにて
あらんにこそあれ。鮭の素干なでふことかあらん。鮎の素干はまるらぬかは」と申され
けり。

人つく牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りてそのしるしとす。しるしをつけずして
人をやぶらせぬるは、主の科なり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。これみな科あり、律
の禁なり。

守をいれ申
す一相模守
を我亭に招
き入るゝ
けいめい
經營、接待

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝことありけるに、すよけ
たるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ張られけれ
ば、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「たまはりて、なにがし男に張
らせ候はん。さやうの事に心得たるものに候ふ」と申されければ、「その男尼が細工によ

の用意をな
す係なりし
なり

城陸奥守一
秋田城介に
して陸奥守
を兼ねし也

もまさり侍らじ」とてなほ一間づつ張られけるを、義景「皆を張りかへ候はんは、遙に
たやすく候ふべし。斑に候ふも見苦しくや」と重ねて申されければ、「尼も後はさわく
と張りかへんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ば
かりを修理して用ゐることぞと、若き人に見ならはせて、心づけんためなり」と申され
ける、いと有難かりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心に通へ
り。天下をたもつほどの人を子にて持たれける、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。
城陸奥守泰盛は雙なき馬乗なりけり。馬を引き出でさせけるに、足をそろへて鬮をゆら
りと超ゆるを見ては、「これはいさめる馬なり」とて鞍を置きかへさせけり。また足を延
べて鬮に蹴あてぬれば、「これは鈍くして過あるべし」とて乗らざりけり。道を知らざ
らん人、かばかり恐れなんや。
吉田と申す馬乗の申し侍りしは、「馬毎にこはきものなり。人の力争ふべからずと知るべ
し。乗るべき馬をばまづよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に轡鞍の具に危きこと

非家—その道の家柄ならぬ人

やあると見て、心にかゝる事あらば、その馬を馳すべからず。この用意をわすれざるを馬乗とは申すなり。これ秘藏のことなり」と申しき。

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさることは、たゆみなく慎みて軽々しくせぬと、偏に自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方のふるまひ心づかひも、愚にして謹めるは得の本なり、巧にしてほしきまよなるは失の本なり。

あるもの子を法師になして、「學問して因果の理をもしり、説經などして世わたるたづきともせよ」といひければ、教のまよに説經師にならんために、まづ馬に乗りならひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬など迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後酒など勸むることあらんに、法師のむけに能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことをならひけり。二つのわざやうく境に入りければ、いよくよくしたくおほえて嗜みけるほどに、説經ならふ

すさまじく—不興

早歌—小歌
端歌の類に

や、又はハヤウタにて所謂しりとりなどの類か
あられます事—豫期する事
むれと云々—主として希望する事

べき暇なくて年よりにけり。この法師のみにあらず、世間の人なべてこの事あり。若きほどは諸事につけて、身をたて、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末ひさしくあられます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて月日をおくれば、ことごとくになす事なくして身は老いぬ。終にものの上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、悔ゆれどもとり返さるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へゆく。されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれか勝ると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてゝ、一事を勵むべし。一日の中一時のうちにも、數多のこのこと來らん中に、すこしも益のまさらんことを營みて、その外をばうち捨てゝ、大事をいそぐべきなり。いづかたをも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすて大につくが如し。それにとりて、三つの石をすてゝ、十の石につくことは易し。十をすてゝ十一につくことは

日をささぐぬ
—いついつ
と日を極め
たる譯でも
無き

ますほ云々
—十寸穂の
薄、眞麻穂
の薄、一は
穂の一尺計
なるをい
ひ、一は穂

かたし。一つなりとも勝らんかたへこそつくべきを、十までなりぬれば惜しくおほえて、多くまさらぬ石にはかへにくし。これをも捨てず、かれをもとらんと思ふころに、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。京にすむ人、急ぎて東山ひがしやまに用ありて既すでに行きつきたりとも、西山にしやまに行きてその益ゆきまさるべき事を思ひえたらば、門かどよりかへりて西山へゆくべきなり。こゝまで来著きつきぬれば、この事をばまづいひてん。日をささぐることなれば、西山にしやまの事はかへりてまたこそ思ひたよめと思ふゆゑに、一時ひとじの懈怠けだいすなはち一生しやうの懈怠けだいとなる。これをおそるべし。一事を必ず成さんとおもはど、他の事の破るよをも痛むべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事ばんじにかへずしては一ひとの大事成るべからず。人のあまたありける中なかにて、あるもの「ますほの薄すすきこそほの薄すすきなり」といふことあり。渡邊わたのべのひじりこの事を傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師とうれんぼうしその座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「簀笠すしかさやある、貸したまへ。かの薄すすきのことならひに、渡邊わたのべの聖せいのがり尋ねまからん」といひけるを、「あまりに物さわがし。雨やみてこそ」と人のいひ

の糸の亂れ
たるが如き
をいふとぞ
敏きときは
云々—論語
陽貨篇

ければ、「無下むげの事をも仰せらるよものかな。人の命いのちは雨のはれまを待つものかは。我も死ひじりに聖せいもうせなば、尋ね聞きてんや」とて、はしり出でて行きつゝ習なひ侍りにけりと申し傳へたるこそ、ゆよしくありがたう覺たゆれ。敏びきときはすなはち功ありとぞ、論語ろんごといふふみにも侍るなる。この薄すすきをいぶかしく思ひけるやうに、一大事だいじの因縁いんげんをぞ思ふべかりける。

今日けふはその事をなさんと思へど、あらぬいそぎまづ出でて来てまぎれ暮くらし、待つ人はさはりありて、たのめぬ人はきたり、頼たのみたる方のことはたがひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。煩わづらはしかりつる事はことなくて、安かるべき事はいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年いちねんのこともかくのごとし。一生しやうの間あひだもまたしかり。かねてのあらまし皆違みなたがひゆくかと思ふに、おのづから違たがはぬ事もあれば、いよくものは定めがたし。不定ふぢやうと心得ぬるのみ誠まことにて違たがはず。

妻めといふものこそ、男おのこのもつまじきものなれ。いつも獨住ひとりぢやうにてな、ど聞くこそ心にくけ

男をぞ一男
こそ誤な
るべき由古
來の定説也

半空一おろ
そかに、疎
略に

はえ一物の
つや
およすげた
る一大様に
大人めける

れ。たれがしが壻になりぬとも、またいかなる女をとりすゑて相住むな。ときよつれば、
無下に心おとりせらるゝわざなり。ことなることなき女を、よしと思ひ定めてこそそひ
居たらめと、賤しくもおしはかられ、よき女ならば、この男をぞらうたくして、あが佛
とまもりたるらめ。たとへば、さばかりにこそと覺えぬべし。まして家の内を行ひをさ
めたる女、いとくちをし。子など出でてかしづき愛したる、心うし。男なくなりて
後、尼になりて年よりたるありさま、亡きあとまであさまし。いかなる女なりとも、明
暮そひみんには、いと心づきなくにくかりなん。女のためも半空にこそならめ。よそな
がら時々通ひすまんこそ、年月へても絶えぬなからひとならめ。あからさまに來て泊
り居などせんは、めづらしかりぬべし。
夜に入りてものはえなしといふ人、いとくちをし。萬の物のきら、かざり、色ふしも、
夜のみこそめでたけれ。晝はことそぎおよすけたる姿にてもありなん。夜はきらよかに
花やかなる装束いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、物いひたる聲も、暗

けはれなく
し襲と晴と
なく
ゆする一沐
浴髪あらひ
などするを
いふ
くらき人
闇愚の人
文字の法
師、諳證の
禪師一は
教相を習ひ
て座禪を知
らぬ者、一
は座禪に專
にして教相
に暗き者

くて聞きたる、用意ある、心にくし。匂も物の音も、たゞ夜ぞひとときはめでたき。さし
てことなることなき夜、うち更けて參れる人の、清けなる様したるいとよし。若きどち
心とどめて見る人は、時をもわかぬものなれば、殊にうちとけぬべき折節ぞ、けはれな
く引きつろはまほしき。よき男の、日くれてゆするし、女も夜ふくるほどにすべりつ
つ、鏡とりて顔などつろひ出づるこそをかしけれ。
神佛にも、人の詣でぬ日、夜まゐりたるよし。
くらき人の、人をはかりて、その智を知れりとおもはん、更にあたるべからず。拙き人
の、碁うつことばかりに敏くたくみなるは、賢き人の、この藝におろかなるを見て、お
のれが智に及ばずとさだめて、よろづの道のたくみ、わが道を人の知らざるを見て、お
のれ勝れたりと思はんこと、大なるあやまりなるべし。文字の法師、諳證の禪師、互に
はかりて、おのれに如かずと思へる、共にあたらす。おのれが境界にあらざるものをば、
争ふべからず。是非すべからず。

達人一賢達
の人、買誼
驕鳥賦通人
大觀分物無
レ不可、注
に通一作
レ達

つやく
一向

欺かず一あ
ざけり笑は
すの義なら
ん

達人の人を見る眼は、すこしも誤る處あるべからず。たとへば、ある人の世に虚言を構へいだして、人をはかる事あらんに、正直にまことと思ひて、いふまよにはからるゝ人あり。あまりに深く信をおこして、なほわづらはしく虚言を心えそふる人あり。また何としも思はで、心をつけぬ人あり。又いさよかおほつかなく覺えて、たのむにもあらずたのますもあらで、案じ居たる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふことなれば、さもあらんとて止みぬる人もあり。又さまざまに推し心えたるよしして、かしこけに打ちうなづき、ほゝゑみて居たれど、つやく知らぬ人あり。また推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほ誤もこそあれと怪しむ人あり。又異なるやうもなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。また心えたれども、知れりともいはず、おほつかなからぬは、とかくの事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。またこの虚言の本意をはじめより心えて、すこしも欺かず、構へいだしたる人とおなじ心になりて、力をあはする人あり。愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、このさまざまの得た

久我内大臣
殿一通基
この殿一通
基を指す
土御門相國
一実實
西宮一西宮
記、西宮左
大臣高明の
作

る所、詞にても顔にても、かくれなく知られぬべし。ましてあきらかならん人の、惑へるわれらを見んこと、掌の上のものを見んがごとし。たどしかやうの推量にて、佛法までをなすらへ言ふべきにはあらず。ある人、久我殿を通りけるに、小袖に大口きたる人、木造の地藏を田の中の水におしひたして、ねんごろに洗ひけり。心えがたく見るほどに、狩衣の男ふたりみたり出で来て、「こゝにおはしましけり」とてこの人を具して往にけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。尋常におはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。東大寺の神興、東寺の若宮より歸座のとき、源氏の公卿まるられけるに、この殿大將にて先をおはれけるを、土御門相國「社頭にて警蹕いかゞはべるべからん」と申されければ、「隨身のふるまひは、兵杖の家が知ること候ふ」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、西宮の説をこそ知られざりけれ。眷屬の悪鬼惡神を恐るゝゆゑに、神社にて殊に先をおふべき理あり」とぞ仰せられける。

定額―一定の人数

揚名介―源氏夕顔に見え源氏三秘事の―也

退凡下乗―西域記九に出づ

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと、延喜式に見えたり。すべて数さだまりたる公人の通號にこそ。

揚名介にかぎらず、揚名目といふものあり。政事要略にあり。

横川の行宣法印が申しはべりしは、「唐土は呂の國なり、律の音なし。和國は單律の國にて、呂の音なし」と申しき。

吳竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし。御溝にちかきは河竹、仁壽殿の方によりて植ゑられ

たるは吳竹なり。

退凡下乗の卒都婆、外なるは下乗、内なるは退凡なり。

十月をかみなづきといひて、神事にはどかるべきよしは、記したるものなし。本文も見えず。たゞし當月諸社の祭なきゆゑに、この名あるか。この月萬の神たち、太神宮へ集り給ふなどいふ説あれども、その本説なし。さることならば、伊勢には殊に祭月とすべきに、その例もなし。十月諸社の行幸、その例もおほし。たゞしおほくは不吉の例な

鞞―矢籠にて平胡籬（ヒラヤナグヒ）の類、音に清濁兩説あり
看督長―檢非違使廳に附屬せる官
法曹―明法家

り。

勅勘の所に鞞かくる作法、今は絶えて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中のさわがしき時は、五條の天神に鞞をかけらる。鞍馬にゆぎの明神といふも、鞞かけられたりける神なり。看督長の負ひたる鞞を、その家につけられぬれば、人いで入らず。この事絶えて後、今の世には封をつくることになりけり。

犯人を笞にて打つときは、拷器によせてゆひつくるなり。拷器のやうも、よする作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。

比叡山に、大師勸請の起請といふことは、慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり。起請文といふこと、法曹にはその沙汰なし。いにしへの聖代、すべて起請文につきて行はるゝ政はなきを、近代このこと流布したるなり。また法令には、水火にけがれをたてず、入物にはけがれあるべし。

徳大寺右大臣殿、檢非違使の別當のとき、中門にて使廳の評定おこなはれけるほどに、

にれ云々
反芻動物の
呑みし食を
更に口に戻
し嚼む事

怪を見て云
云一千金方
黄帝雜忌咒
に出づ

さうなく
左右なく、
やたらに

官人章兼が牛はなれて、廳のうちへ入りて、大理の座のはまゆかの上のほりて、にれうち噛みて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへ遣すべきよし、おのおの申しけるを、父の相國きよたまひて、「牛に分別なし。足あらばいづくへかのほらざらん。庭弱の官人、たましく出仕の微牛をとらるべきやうなし」とて、牛をば主にかへして、臥したりける疊をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。怪を見てあやしまざる時は、怪かへりてやぶるといへり。

龜山殿たてられんとて、地をひかれけるに、大なる蛇數もしらす凝り集りたる塚ありけり。この所の神なりといひて、事のよし申しければ、いかどあるべきと勅問ありけるに、「ふるくよりこの地を占めたるものならば、さうなく掘り捨てられがたし」とみな人申されけるに、この大臣一人「王土に居らん蟲、皇居を建てられんに、何のたよりをかなすべき。鬼神は邪なし。咎むべからず。たゞ皆ほりすつべし」と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大井川に流してけり。更にたよりなかりけり。

喚子鳥一
千鳥、稻お
ほせ鳥と共
に古今三鳥
と稱し所謂
古今傳授の
秘傳とせる
もの也
萬葉集云々
一第一幸ニ

經文な^んどの紐をゆふに、上下より襷にちがへて、二すぢの中より、わなのかしらを横ざまにひき出すことは、常のことなり。さやうにしたるをば、華嚴院の弘舜僧正解きてなほさせけり。「これはこの頃やうのことなり。いと見にくし。うるはしくは、たゞくるくると巻きて、上より下へ、わなの先をさしはさむべし」と申されけり。ふるき人にて、かやうのこと知れる人になん侍りける。

人の田を論ずるもの、訟にまけてねたさに、その田を刈りてとれとて、人をつかはしけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、「これは論じ給ふ所にあらず。いかにかくは」といひければ、刈るものども「その所とても刈るべき理なけれども、僻事せんとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらん」とぞいひける。ことわりいとをかしかりけり。

喚子鳥は春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかに記せるものなし。ある眞言書の中に、喚子鳥なくとき招魂の法をば行ふ次第あり。これは鶴なり。萬葉集の長

讃岐國安益郡之時軍王見山作歌

顔回も云々
論語雅也
篇に、顔回不幸短命而死矣

ひしげくだ
く一壓碎す

歌に、霞たつながき春日のなんどつどけたり。鶴鳥も喚子鳥の事様に通ひて聞ゆ。萬の事はたのむべからず。愚なる人は、ふかくものを憑むゆゑに、うらみ怒ることあり。勢ありとて憑むべからず、こはきものまづ滅ぶ。財多しとて憑むべからず、時の間に失ひやすし。才ありとて憑むべからず、孔子も時に遇はず。徳ありとてたのむべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも憑むべからず、誅をうくること速なり。奴したがへりとして憑むべからず、そむき走ることあり。人の志をもたのむべからず、かならず變ず。約をも憑むべからず、信あることすくなし。身をも人をも憑まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず、左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげくだく。心を用ゐること少しきにしてきびしき時は、物に逆ひ争ひてやぶる。寛くして柔なるときは、一毛も損ぜず。人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし、人の性何ぞことならん。寛大にして窮らざるときは、喜怒これにさはらずして、物のためにわづらはず。

秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらん人は、無下に心うかるべきことなり。

御前の火爐に火をおくときは、火箸してはさむことなし。土器より直にうつすべし。さればころびおちぬやうに心えて、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人淨衣をきて、手にて炭をさよれければ、ある有職の人「白きものを著たる日は、火箸を用ゐる、苦しからず」と申されけり。

想夫戀といふ樂は、女男を戀ふるゆゑの名にはあらず。もとは相府蓮、文字のかよへるなり。晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せしときの樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とてえびすのこはき國あり、その夷、漢に伏して後にきたりて、おのれが國の樂を奏せしなり。

平宣時朝臣、老ののち昔がたりに、「最明寺入道あるよひの間によばるゝ事ありしに、やがてと申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また使きたりて、直垂な」どの

想夫戀一季吟の説に、白氏文集、韻府等に相夫憐とあるをあやまれるならん
最明寺入道一北條時頼

さうくし
—さびし

さふらはぬにや、夜なればことやうなりとも疾くとありしかば、なえたる直垂、うちのまよにて罷りたりしに、銚子にはらけ取りそへてもて出でて、この酒をひとりたうべんがさうくしければ申しつるなり。肴こそなけれ、人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあるといづくまでも求め給へとありしかば、紙燭さしてくまぐを求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、これぞ求め得てさふらふと申しよかば、事足りなんとて、心よく數獻におよびて興に入られはべりき。その世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

あるじ—饗
應

うち鮑—鬘
斗鮑、鮑の
肉を打ち延
して鬘斗と
せる物

最明寺入道、鶴岡の社參のついでに、足利左馬入道のもとへ、まづ使を遣して、立ちいられたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一獻にうち鮑、二獻にえび、三獻にかい餅にて止みぬ。その座には亭主夫婦、隆辨僧正、あるじがたの人にて坐せられけり。さて「年ごとにたまはる足利の染物心もとなく候ふ」と申されければ、「用意しさふらふ」とて、いろくの染物三十、前にて女房どもに小袖に調ぜさせて後につかはされけり。

徳をつく—
利徳を身に
つける、財
産を作る

り。その時見たる人のちかくまで侍りしが、かたり侍りしなり。

ある大福長者のいはく、「人はよろづをさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかんとおもはど、すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心といふは他の事にあらず。人間常住のおもひに住して、假にも無常を觀する事なかれ。これ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に従ひて志を遂げんと思はど、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願は止むときなし。財は盡くる期あり。かぎりある財をもちてかぎりなき願に従ふこと得べからず。所願心にきざすことあらば、われを亡すべき惡念きたれりと、かたく慎しみおそれて、小用をもなすべからず。次に錢を奴の如くしてつかひ用るものとしらば、長く貧苦を免るべからず。君の如く神のごとくおそれ奪みて、従へ用ることなかれ。次に恥にのぞむといふとも、怒り怨むることなかれ。次に正直にして約をかたくすべし。この義を守りて利をもとめん人

癰疽―熱氣甚しき腫物

究竟、理即―天台に理即、名字即、觀行即、相似即、分身即、究竟即の六即あり、理即は凡夫畜類まで佛性を具するをいひ、究竟即は妙覺の位如來の地

は、富の來ること、火のかわけるに就き、水の下れるに従ふが如くなるべし。錢つもりて盡きざるときは、宴飲聲色を事とせず、居所をかざらず、所願を成ぜざれども、心とこしなへに安く樂し」と申しき。そもく人は所願を成せんがために財をもとむ。錢をたからとする事は、願をかなふるがゆゑなり。所願あれどもかなへず、錢あれども用るざらんは、全く貧者とおなじ。何をか樂とせん。このおきてはたゞ人間の望を絶ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂とせんよりは、しかじ財なからんには。癰疽を病むもの、水に洗ひて樂とせんよりは、病まざらんにはしかじ。こゝにいたりては、貧富分くところなし。究竟は理即到にひとし。大欲は無欲に似たり。狐は人に食ひつくものなり。堀河殿にて、舍人が寢たる足を狐にくはる。仁和寺にて、夜本寺の前をとほる下法師に、狐三つ飛びかよりて食ひつきければ、刀を抜きてこれを拒ぐ間、狐二疋をつく。ひとつはつき殺しぬ。二は遁けぬ。法師はあまた所くはれながら、ことゆゑなかりけり。

龍秋―樂人 豐原龍秋 荒涼―過言

のく―口をのく意にて 笛を吹くに口をもち直すをいふ 性骨―天性 その骨を得たるをいふ

四條黃門命ぜられていはく、「龍秋は道にとりてはやんごとなき者なり。先日きたりていはく、短慮のいたり、極めて荒涼の事なれども、横笛の五の穴は、いさよかいぶかしき所の侍るか、ひそかにこれを存す。そのゆゑは、干の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調をへだてたり。上の穴雙調、次に鳧鐘調をおきて、夕の穴黃鐘調なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤涉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに間々にみな一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子をもたずして、しかも間をくばる事ひとしきゆゑに、その聲不快なり。さればこの穴を吹くときは、かならずのく、のけあへぬときは物にあはず。吹きうる人かたしと申しき。料簡のいたり、まことに興あり。先達後生をおそるといふこと、この事なり」と侍りき。他日に景茂が申し侍りしは、「笙は調べおほせてもちたれば、たゞ吹くばかりなり。笛はふきながら、息のうちにて、かつしらべもてゆく物なれば、穴ごとに口傳の上に、性骨を加へて心を入ること五の穴のみにかぎらず。偏にのくとばかりも定むべからず。あしく吹けば、いづれの穴

太子—聖徳太子
はかせ—師範、定規

放免—又ハウメンとも

もこよろよからず。上手はいづれをも吹きあはす。呂律のものにかなはざるは、人の咎なり、器物の失にあらす」と申しき。

何事も、邊土は卑しくかたくななれども、天王寺の舞樂のみ、都に恥ぢずといへば、天王寺の伶人の申しはべりしは、「當寺の樂は、よく圖をしらべ合せて、ものの音のめでたくとのほり侍ること、外よりも勝れたり。ゆるは太子の御時の圖、今にはべるをはかせとす。いはゆる六時堂の前の鐘なり、そのこゑ黄鐘調の最中なり。寒暑に従ひて上下りあるべきゆるゑに、二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす。秘藏のことなり。

この一調子をもちて、いづれの聲をもとのへ侍るなり」と申しき。およそ鐘のこゑは黄鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舎の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黄鐘調に鑄らるべしとて、あまたたび鑄替へられけれども、かなはざりけるを、遠國よりたづね出されけり。法金剛院の鐘の聲、また黄鐘調なり。

建治弘安のころは、祭の日の放免のつけものにて、ことやうなる紺の布四五端にて、馬をつくりて、尾髪にはとうしみをして、蜘蛛のいかきたる水干に著けて、歌のこよろなどいひてわたりしこと、常に見及び侍りしなども、興ありてしたる心地にてこそ侍りしかと、老いたる道志どもの今日もかたりはべるなり。この頃は、つけもの年をおくりて過差ことの外になりて、萬の重きものを多くつけて、左右の袖を人にもたせて、みづからは鋒をだに持たず、息つぎくるしむ有様いと見ぐるし。

竹谷の乗願房、東二條院へまゐられたりけるに、「亡者の追善には何事か勝利おほき」とたづねさせ給ひければ、「光明眞言、寶篋印陀羅尼」と申されたりけるを、弟子ども

「いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛に勝ること候ふまじとは、など申し給はぬぞ」と申しければ、一わが宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して巨益あるべしと説ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと、重ねて問はせたまは

ば、いかど申さんとおもひて、本經のたしかなるにつきて、この眞言、陀羅尼をば申しつるなり」とぞ申されける。

讀む、檢非違使廳に履はれ警固の役を勤むる小者、元放免せられし罪人を以て任じたるよりの稱、つけものほその著用せる錦繡

歌のこよろ
蜘蛛のい
にあれたる
駒はつなぐ
とも二道か
くる人は頼
まじと云ふ
古歌の意味

田鶴のおほいどの一良
經の三男基
家

さうまき一
鞘巻、鏢な
き短刀にて
緒を鞘に巻
き腰に結び
つく
番にめされ
て一學者を
分ちて論義

田鶴のおほいどののは、童名たづ君なり。鶴を飼ひ給ひけるゆゑにと申すは僻事なり。陰陽師有宗入道、鎌倉よりのほりて、尋ねまうできたりしが、まづさし入りて、「この庭のいたづらに廣きこと、あさましくあるべからぬ事なり。道を知るものは植うる事をつとむ。細道ひとつのこして、みな島に作りたまへ」と諫め侍りき。誠にすこしの地をも徒におかんことは益なきことなり。食物薬種などどうぞおおくべし。多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手のうちに興ある事どもをえらびて、磯の禪師といひける女に教へてまはせけり。白き水干にさうまきをさよせ、烏帽子をひき入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師がむすめ靜といひける、この藝をつけり。これ白拍子の根源なり。佛神の本縁をうたふ。その後、源光行、おほくの事をつくれり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に教へさせ給ひけるとぞ。

後鳥羽院の御時、信濃の前司行長稽古のほまれありけるが、樂府の御論義の番にめされ、七徳の舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心うきことに

せしむる人
數に召さる
る也

山門一比較
山延曆寺

ふしはかせ
一節の規範

妙觀一攝州
勝尾寺の觀
音を刻みし
人

して、學問をすてよ遁世したりけるを、慈鎮和尚、一藝あるものをば、下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へてかたらせけり。さて山門のことを殊にゆゑしくかけり。九郎判官のことは委しく知りて書き載せたり。蒲の冠者のことは能く知らざりけるにや、多くの事どもをしるしもらせり。武士の事弓馬のわざは、生佛東國のものにて、武士に問ひ聞きてかよせけり。かの生佛がうまれつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

六時禮讀は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて作りてつとめにしけり。その後太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代よりはじまれり。法事讀もおなじく善觀房はじめたるなり。千本の釋迦念佛は、文永のころ、如輪上人これをはじめられけり。よき細工は少し鈍き刀をつかふといふ。妙觀が刀はいたくたよす。

とよまれて
一騒がれて

園別當入道
一藤原基氏

なんでふ云
云一何ぞ百
日の鯉を切
らん、明に
虚言と聞ゆ
と也、切ら
んぞ迄が北
山殿の詞

五條の内裏には妖物ありけり。藤大納言殿かたられ侍りしは、殿上人ども黒戸にて碁をうちけるに、御簾をかよけて見るものあり。誰そと見向きたれば、狐人のやうにいるてさしのぞきたるを、あれ狐よとよまれて、まどひ遁けにけり。未練の狐、ばけ損じけるにこそ。

「園別當入道は、さうなき庖丁者なり。ある人のもとにて、いみじき鯉を出したりければ、みな人、別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でんもいかどとためらひけるを、別當入道さる人にて、このほど百日の鯉を切りはべるを、今日缺き侍るべきにあらず、まけて申しうけんとして切られける、いみじくつきくしく興ありて、人ども思へりけると、ある人北山太政入道殿にかたり申されたりければ、かやうのこと、おのれは世にうるさく覺ゆるなり。切りぬべき人なくば、たべ、切らんといひたらんは尙よかりなん、なんでふ百日の鯉を切らんぞとのたまひたりし、をかしくおほえし」と人のかたり給ひける、いとをかし。大かた、ふるまひて興あるよりも、興なくて安らかなる

ついで云々
一其場合の
おもしろき
やうに、文
段抄に其首
尾をつくる
ひて面白き
やうにしな
す事也とい
へるは如何
ちう一柱な
り、琴には
ことぢとい
ひ、琵琶に
はちうとい
ふ
ひもの木一
檜物師の使
ふ木

がまさりたることなり。賓客の饗應なんども、ついでをかしきやうにとりなしたるも、誠によけれども、唯その事となくてとり出でたる、いとよし。人に物をとらせたるも、ついでなくて、これを奉らんといひたる、まことの志なり。惜しむよしして乞はれんと思ひ、勝負のまけわざにことつけなんどしたる、むつかし。すべて人は無智無能なるべきものなり。ある人の子の、見ざまなんどあしからぬが、父の前にて人ともいふとて、史書の文をひきたりじ、さかしくは聞えしかども、尊者の前にてはさらすとも覺えしなり。またある人の許にて、琵琶法師の物語をきかんとて、琵琶を召しよせたるに、ちうのひとつ落ちたりしかば、「作りてつけよ」といふに、ある男の中に、あしからずと見ゆるが、「ふるきひさくの杓ありや」なんどいふを見れば、爪をおふしたり。琵琶なんど弾くにこそ。めくら法師の琵琶、その沙汰にもおよばぬことなり。道に心えたるよしにやと、かたはらいたかりき。「ひさくの柄はひもの木とかやいひて、よからぬものに」とぞ或人

仰せられし。わかき人は、少しの事もよく見えわろく見ゆるなり。
 よろづの科あらじとおもはど、何事にも誠ありて、人をわかすうやくしく、言葉すく
 なからんにはしかじ。男女老少みなさる人こそよけれども、殊にわかかたちよき人の
 言うるはしきは、忘れがたく思ひつかるものなり。よろづのとはは、馴れたるさまに
 上手めき、所えたるけしきして、人をないがしろにするにあり。

をこがまし
 一馬鹿げて
 居る
 うららかに
 一明瞭に

人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ。ありのまよいはんはをこがましとにや、心
 まどはすやうに返事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほさだかにと思ひてや
 問ふらん。又まことに知らぬ人もなか無からん。うらよかに言ひきかせたらんは、おと
 なしく聞えなまし。人はいまだ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまよに、「さてその人の
 事のおさましき」などばかり言ひやりたれば、「いかなる事のあるにか」と推し返し問
 ひにやるこそ、こよろづきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすことも
 あれば、おほつかなからぬやうに告げやりたらん、悪しかるべきことかは。かやうの事

木精一山
 彦、木神、
 木魅、罔象
 など何れも
 同じく木石
 の化生妖怪
 を云ふ也

しる所一知
 行所

いざたまへ
 一いざ来た
 まへ
 かいもちひ
 一牡丹餅

は、ものなれぬ人のあることなり。

主ある家には、すどろなる人、心のまよに入りくることなし。あるじなき所には、道行
 人みだりに立ち入り、狐鼻やうのものも、人けにせかれねば、所えがほに入りすみ、木精
 などいふけしからぬ形もあらはるものなり。また鏡には色形なき故に、よろづの影
 きたりてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虚空よくものを容る。われ
 らが心に、念々のほしきまよにきたり浮ぶも、心といふものの無きにやあらん。心にぬ
 しあらましかば、胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし。

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷して、めでたくつくれり。志太の某とかやしる所な
 れば、秋の頃、聖海上人、その外も人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲拜みに。か
 いもちひめさせん」とて、具しもていきたるに、おのく拜みて、ゆよく信おこした
 り。御前なる獅子狛犬、背きて後さまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめ
 でたや。この獅子のたちやういと珍し。深きゆるあらん」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊

つとーみや
 げ
 やない筥
 關根氏説に
 は柳の木を
 廣さ五分程
 に三角に削
 り編み合せ
 たる筥にて
 後世其蓋の
 棧を高くし
 て足とせる
 をばヤナイ
 巴と稱す云
 云、本文な
 るは後者を
 云へるが如

勝の事は御覽じとがめずや。無下なり」といへば、おのくあやしみて、「まことに他に
 ことなりけり。都のつとにかたらん」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなし
 く物知りぬべき顔したる神官をよびて、「この御社の獅子のたてられやう、定めてならひ
 あることに侍らん。ちと承らばや」といはれければ、「そのことに候ふ。さがなき童ど
 もの仕りける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りてするなほして往にければ、上人
 の感涙いたづらになりけり。
 やない筥にすうるものは、縦ざま横ざま、物によるべきにや。「巻物な」どはたてさま
 におきて、木のあはひより、紙捻を通してゆひつく。硯も縦ざまにおきたる、筆ころば
 すよし」と三條右大臣殿おほせられき。勘解由小路の家の能書の人々は、假にも縦さま
 におかるとことなし、かならず横さまにすゑられ侍りき。
 御隨身近友が自讃とて、七箇條かきとどめたることあり。みな馬藝させることなき事ど
 もなり。そのためしをおもひて、自讃のこと七つあり。

く、舊説に
 よれば筥蓋
 共に同名な
 るが如し

當代—今上
 帝
 坊—春宮
 坊、皇太子
 にておぼす
 る時

一、人あまたつれて花見ありきしに、最勝光院の邊にて、男の馬をはしらしむるを見
 て、「今一度馬を馳するものならば、馬倒れて落つべし。しばし見給へ」とて立ちとま
 りたるに、また馬を馳す。とどむる所にて、馬を引きたふして、乗れる人泥土の中に
 ころび入る。その詞のあやまらざることを、人みな感ず。
 一、當代いまだ坊におはしましところ、萬里小路殿御所なりしに、堀河大納言殿候し
 たまひし御曹子へ、用ありて参りたりしに、論語の四五六の卷をくりひろげ給ひて、「た
 だ今御所にて、紫の朱うばふ事を悪むといふ文を、御覽せられたき事ありて、御本を
 御らんすれども、御覽じ出されぬなり。なほよくひき見よと仰事にて、求むるなり」と
 仰せらるゝに、「九の卷のそこの程に侍る」と申したりしかば、「あなうれし」とても
 てまるらせ給ひき。かほどの事は、兒どもも常のことなれど、昔の人は、いさよかの
 事をもいみじく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、袖と袂と一首の中にあしかりな
 んやと、定家卿に尋ね仰せられたるに、

秋の野の云
云—古今集
在原棟梁

疑状—任官
志願の申文
也、壽命院
抄に、くわ
んの音なれ
どもくわじ
やうと讀む
べき由或る
有職の人の
説也

三塔—東
塔、西塔、横
川をいふ
佐理、行成

秋の野の草のたもとか花すよきほに出でてまねく袖とみゆらん

とはべれば、何事かさふらふべきと申されたることも、時にあたりて本歌を覺悟す、道の冥加なり、高運なりなど、ことごとく記しおかれ侍るなり。九條相國伊通公の歎状にも、ことなる事なき題目をも書きのせて、自讀せられたり。

一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣清書して、型にうつさせんとせしに、奉行の入道かの草をとり出でて見せ侍りしに、花の外に夕をおくれば聲百里に聞ゆといふ句あり。「陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりか」と申したりしを、「よくぞ見せ奉りける。おのれが高名なり」とて、筆者の許へいひやりたるに、「あやまり侍りけり。數行となほさるべし」と返事はべりき。數行もいかなるべきにか、もし數歩の意か、おほつかなし。

一、人あまた伴ひて、三塔巡禮の事侍りしに、横川の常行堂の中、龍華院と書けるふるき額あり。「佐理行成の間うたがひありて、いまだ決せずと申し傳へたり」と堂僧こ

—小野道風
を合せて三
蹟といふ

誰か—原本
これや

八災—憂、
苦、喜、樂、
尋、伺、出
息、入息

所化—弟
子、師を能
化といふ

加持香水—
正月八日よ
り十五日の
朝まで行は
る御法事
中の法式

とごとしく申し侍りしを、「行成ならば裏書あるべし。佐理ならば裏書あるべからず」といひたりしに、裏は塵つもり、蟲の巢にていふせけなるを、よくはき拭ひて、おのく見侍りしに、行成位署名年號さだかに見え侍りしかば、人みな興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼ひじり談義せしに、八災といふことを忘れて、「誰かおほえ給ふ」といひしを、所化みなおほえざりしに、扇のうちより、これくによといひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見はべりしに、いまだ果てぬほどに、僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えす。法師どもをかへして求めさするに、おなじさまなる大衆多くて、えもとめあはずといひて、いと久しくて出でたりしを、「あなわびし。それもとめておはせよ」といはれしに、かへり入りて、やがて具していぬ。

一、二月十五日、月あかき夜、うちふけて千本の寺にまうでて、後より入りて、一人顔深くかくして聽聞し侍りしに、優なる女の、すがたにほひ人よりことなるが、わけ入

妻宿一、二十
八宿の一、
四方七宿の
第二、宿の
字シユクと
讀む説もあ
り

りて膝ひざにるかよれば、にほひななどもうつるばかりなれば、便びんあしと思ひてすり退のきたるに、なほ居寄りておなじさまなれば立ちぬ。その後、ある御所ごしよさまのふるき女房にようばうの、そとろごと言はれしついでに、「無下むげに色なき人におはしけりと、見おとし奉ることなんありし。情なしと恨み奉る人なんある」とのたまひ出したるに、「更にこそ心えはべらね」と申して止みぬ。この事後のちに聞き侍りしは、かの聽聞ちやうもんの夜、御局みづぼねのうちより人の御覽ごらんじ知りて、さぶらふ女房にようばうをつくりたてて、出し給ひて、「便びんよくばことばななどかけんものぞ。そのありさま参りて申せ、興きやうあらん」とてはかり給ひけるとぞ。
八月十五日九月廿三日は妻宿うづしうなり。この宿清明しうせいめいなるゆゑに、月をもてあそぶに良夜りやなとす。
しのぶの浦うらの蟹かまのみるめもところせく、くらぶの山ももる人しけからんに、わりなく通はん心のいろこそ、淺からずあはれと思ふふしぐの、忘れがたきことも多からめ。親はらからゆるして、ひたぶるに迎へすゑたらん、いとまばゆかりぬべし。世にありわぶ

さそふ水云
云一、小町の
歌、わびぬ
れば身を浮
草の根をた
えて誘ふ水
あらばいな
むとぞ思ふ
しられず云
云一、新古今
西行、疎く
なる人を何
しに恨むら
ん知られず
しらぬ折も
ありしに
分けこしは
山一古今集
に、筑波山

る女の、似けなき老法師らうぼうし、あやしの東人あづまびとなりとも、にぎはよしきにつきて、さそふ水あらばななどいふを、なか人なかびといづかたも心にくきさまにいひなして、しられずしらぬ人を迎へもて來らんあいなさよ。何事なにことをかうち出づる言ことの葉はにせん。年月としづかのつらさをも、分けこしは山のななどもあひかたらはんこそ、つきせぬ言ことの葉はにてもあらめ。すべてよその人のとりまかなひたらん、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならんにつけても、品くんだり、みにくく、年もたけなん男は、かくあやしき身のために、あたら身みをいたづらになさんやはと、人も心劣こころなまりせられ、わが身はむかひ居たらんも、影かげはづかしくおほえなん、いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜の朧月たはらつきにたよすみ、御垣みかきが原はらの露つゆ分けいでんありあけの空そらも、わが身みさまに忍しのばるべくもなからん人は、たゞ色このまざらんにはしかじ。
望月もちづきのまどかなる事は、しばらくも住ぢせず、やがて虧かけぬ。心とどめぬ人は、一夜ひとよの中に、さまでかはる様さまも見えぬにやあらん。病やまひのおもるも、住ぢする隙ひまなくして、死期しきすで

は山しげ山
しげけれど
思ひ入るに
はさばらざ
りけり

違順—文段
抄に、違は
わが心に違
ふことにて
苦也、順は

に近し。されどもいまだ病急ならず、死に赴かざる程は、常住平生の念にならひて、生の中に多くの事を成じて後、しづかに道を修せんと思ふほどに、病をうけて死門にのぞむ時、所願一事も成ぜず、いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、この度もしたちなほりて、命をまたくせば、夜を日につぎて、この事かの事怠らず成じてんと、願をおこすらめど、やがて重りぬれば、われにもあらずとり亂してはてぬ。この類のみこそあらめ。この事まづ人々急ぎ心におくべし。所願を成じてのち、いとまありて道にむかはんとせば、所願つくべからず。如幻の生の中に何事をかなさん。すべて所願皆妄想なり、所願心にくきたらば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道に向ふときは、さはりなく、所作なくて、心身ながくしづかなり。とこしなへに違順につかはるよことは、偏に苦樂のためなり。樂といふは好み愛する事なり。これを求むること止む時なし。樂欲するところ、一には名なり。名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二には色欲、三には味なり。よろづのねがひ、この三には

わが心にし
たがふこと
にて樂也

しかず。これ顛倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。求めざらんにはしかじ。八つになりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候ふらん」といふ。父がいはく、「佛には人のなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として佛にはなり候ふやらん」と。父また、「佛のをしへによりてなるなり」とこたふ。また問ふ、「教へ候ひける佛をば、何がをしへ候ひける」と。また答ふ、「それもまた、さきの佛のをしへによりてなり給ふなり」と。また問ふ、「その教へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける」といふとき、父「空よりやふりけん、土よりやわきけん」といひて笑ふ。「問ひつめられてえ答へずなり侍りつ」と諸人にかたりて興じき。

徒然草終

枕草紙索引

語句の配列順は總て歴史的假名遣に據る
本索引は本文中の題をも一行に取扱へり

<p>○愛憎</p> <p>ア</p> <p>一に思はれずば 思ふと憎むと 親子 親族 憎き人の來る 憎き人の追從 憎き人の不幸 人に愛せらるゝ 人に憎まるゝ 宮仕所 怜悯ぶる人</p>		<p>二四ノ七 七ノ三 三六ノ一〇 三六ノ八 一七五ノ一 二八六ノ二 四〇ノ二 三六ノ二 三六ノ七 三六ノ八 二八ノ九</p>
<p>○鸚鵡 ○赤色「織物」を見よ ○縣<small>あがた</small>の井戸 ○曉、曙、朝</p> <p>秋 朝寢 語り明したる 九月九日 雲 咳 手おそく洗ふ人 疾く起き往ぬる ぬか 春</p>		<p>五ノ二 一七ノ三 二五ノ二 一五ノ六 一四ノ一 一三ノ二 一ノ一 一三ノ二 一三ノ二 一三ノ二 一三ノ二 一三ノ二 一三ノ二 一三ノ二 一三ノ二 一三ノ二</p>
<p>冬 枕許の横笛 目覺 物の音 別 ○赤紐 ○秋</p> <p>曉 雨風 鶯 雨後の庭園 落葉 重れ著 唐衣</p>		<p>二七ノ二 二二ノ四 一三九ノ二 一三八ノ四 一八五ノ二 一〇五ノ九 二〇五ノ二 二〇四ノ一〇 五五ノ二 一五一ノ八 二〇五ノ四 二〇四ノ二 二八三ノ二</p>

鳥	一ノ三	〇柏	三三ノ二〇	〇浅緑「染色、模様」を見よ	六七ノ五
雁	一ノ四	〇同	二六ノ二二	〇あさむつ橋	六九ノ二
庭園	二〇五ノ七	〇同	二八ノ二一	〇葦	七〇ノ六
野	一三八ノ八	〇柏の上襲	九ノ五	〇同	二八ノ六
同	一四〇ノ二	〇朝風の里	六七ノ二〇	〇足	一三七ノ二
野分	二〇五ノ七	〇槿	六九ノ八	〇足柄の關	一五五ノ一
蟲	一ノ五	〇浅黄の帷子	四〇ノ二二	〇あしぎぬ	一四〇ノ七
夕暮	一ノ二	〇朝倉山	一五ノ二	〇履	二九三ノ七
夕日	一ノ三	〇朝餉の間	一〇ノ二	〇足駄	一五〇ノ七
〇明順朝臣	一七〇ノ七	〇朝座	四四ノ一	〇朝の原	二七五ノ二
〇欠伸	二七四ノ三	〇浅茅	六九ノ七	〇悪しと人にいはるゝ人	一五五ノ一
〇胡床	二五九ノ二	歌の題	六八ノ二〇	〇足ぶくろ	二九ノ八
〇味爽	一九五ノ三	「草は」	一三九ノ二〇	〇網代一春	三六ノ二〇
〇あげばり	二五〇ノ二	露	二五〇ノ二	〇網代車	六六ノ二
〇柏	九ノ五	〇朝日	一五ノ二	〇飛鳥川	一六ノ二
〇同	一七三ノ三	〇「あさきしきもの」	一五ノ六	〇飛鳥の市	一九二ノ一
〇同	二七〇ノ九	〇浅間山		〇飛鳥井	

〇あすはひの木	五二ノ七	〇葵	二〇ノ五	〇小さき	一七五ノ二二
〇「あそびは」	二〇九ノ三	〇同	一一ノ四	〇葵かつら	二二三ノ五
〇あそびわざ	二二〇ノ一	〇榎	二八ノ七	〇安倍野	二〇九ノ七
〇「あぢきなきもの」	七〇ノ九	〇榎扇	二六二ノ六	〇安倍の原	一五〇ノ二〇
〇「あつげなるもの」	一四六ノ九	〇骨	二六三ノ四	〇阿彌陀の大呪	二〇八ノ六
〇「あてなるもの」	五六ノ五	〇三重がされ	一〇四ノ八	〇阿彌陀の峯	一五ノ八
〇あとびの火箸	一六三ノ七	〇蟲ばみたるかはぼり	二六七ノ一	〇同	九一ノ五
〇粟津野	二〇九ノ六	〇物のをりの扇	二六ノ六	〇同	九二ノ二
〇粟津原	一五ノ二〇	〇逢坂の里	六七ノ二〇	〇同	
〇「あはれなるもの」	一三八ノ九	〇逢坂の關	一三四ノ三	〇同	
〇扇		〇同	一三六ノ二	〇同	
五重	一四ノ八	〇榎の木	五三ノ二	〇同	
枝扇	一四ノ七	〇榎の花	四九ノ二	〇同	
香染	二九ノ二	〇葵	四九ノ二	〇同	
海月の骨	一三五ノ二	〇髮	五七ノ二	〇同	
去年のかはぼり	三五ノ二	〇枯れたる	三五ノ九	〇同	
こまの物語	二〇九ノ三	「草は」	六八ノ二	〇同	

○あまづら	五六ノ六	十二月晦日	二七ノ二	○綾―「織物」「服装」を見よ	六八ノ四
○あまにそぎたる	一七五ノ七	正月の寺籠	一四〇ノ五	○あやふ草	
○あまの川	六七ノ二	節會	一五ノ二	○あらがひこと	
○あまびこの橋	六七ノ五	前駈	一四六ノ七	○争事	
○雨		外出	一四六ノ七	蛇の雌雄	二六ノ七
雨と霧と	七三ノ三	同	一四五ノ二	曲玉に緒通すこと	二六ノ二
雨の日に來る人	二六五ノ七	橋	二八五ノ八	丸木の本末	二六ノ一
雨ふると日てると	七三ノ二	徒然	四八ノ一	○嵐―「風」を見よ	
歩く人	二六八ノ一	寺詣	一六三ノ二	○嵐山	一五ノ五
市女笠	一七八ノ九	同	一四五ノ二	○荒島	
音信	二六八ノ六	疾く降り止め	二八五ノ八	○あらしぬ人	一七ノ二
片時降る	二六七ノ二	夏の花	二六六ノ五	○霰	
穢き板屋	一四六ノ六	ひぢかさ雨	一ノ二	板屋	二八ノ五
九月九日	一四ノ一	佛名	一七ノ七	「歌の題は」	六九ノ七
心もとなきもの	二六七ノ二	文を見る	二八八ノ三	「ふるものは」	二八ノ三
五月雨は咎めなし	二六ノ一	○あめうし	五八ノ一	○あらしわに	三三ノ一
七月	五七ノ七	○あめの陵	一六ノ三	○蟻	
				ありとほし	二七ノ二
				蟻通	

蜜	二七ノ三	○青摺の唐衣	一〇五ノ七	小弓―「小弓」を見よ	
水	五七ノ五	○青末濃―「染色、模様」を見よ	六八ノ一〇	雙六―「雙六」を見よ	
○有明		○青葉	五二ノ二	重食	一一五ノ七
七月	四九ノ五	○青鈍―「染色、模様」を見よ	六九ノ七	謎々合	一七〇ノ二
笛	一九五ノ一	○同	六九ノ七	耽る男	一七九ノ九
○「ありがたきもの」	七三ノ二〇	○青淵	一七七ノ五	篇をつく	八〇ノ一
○蟻通	二五ノ二	○白馬	二ノ五	鞠	二〇ノ一
○蟻通の明神	二五ノ二	白馬の節會	二六九ノ八	掩韻―「掩韻」を見よ	二六三ノ四
○有馬の湯	一三八ノ二	藏人式部丞	一四九ノ〇	○いかゞ崎	二六三ノ四
○藍	七三ノ三	○青柳(襲の色目)	一三九ノ四	○殿籠	二六二ノ二
○青色―「染色、模様」を見よ	一〇一ノ一〇	○青山吹(襲の色目)	一三九ノ四	○雷	一七五ノ五
○青色すがた	一六ノ五	イ		○怒	七二ノ二
○青色の淵	六八ノ四	○遊戯	三三ノ一	○班鳩	五四ノ五
○青草	二二三ノ二	あそびわざ		○生靈	一七七ノ七
○青朽葉(襲の色目)	二二三ノ二	碁―「碁」を見よ		○生田の森	一三七ノ四
○あなをさし	三三ノ一			○活田の社	三三ノ二
○青磁の龜	三三ノ三			○池は	四九ノ四

○いさめの里	六七〇	○一條院	一六〇六	組糸	五〇二
○石	二七〇三	歌にて人を謀り給ふ	一六〇六	とみの物縫ふ	一三七〇三
○石山	二〇八〇三	翁丸	一三〇二	針に通す	一八二〇四
○伊勢の海	一六〇八	御笛ふかせ給ふ	三三〇九	村渡	一〇四〇六
○板敷	一七〇二〇	清少等の局に臨み給ふ	六三〇四	紫	一〇三〇九
○同	二八〇三	八幡臨時祭	一六〇八	○いとほしげなきもの	七八〇二
○いたどり	一七〇二〇	○一人一行粧	一〇三〇八	○否かへじ	一〇九〇二
○板屋	一七〇二〇	○一の舞	一六四〇二	○同(笙の笛)	一〇二〇二
霧	三三〇五	○「市は」	一五〇二	○印南野	二〇九〇六
鳥の齋の産飯くふ	三三〇八	○市女笠	一七八〇九	○いな淵	一六〇六
○覆盆子	五六〇七	○一切經	二五八〇〇	○稻荷	二六二〇〇
美しき兒の食ひたる	五六〇七	○五幡山	一五〇一	○いにすし	一七七〇六
暗きに食ふ	七二〇二	○一品の宮	三三〇二	○犬	一〇〇九
文字	一七二〇	○いつまで草	六八〇五	翁丸	一〇〇九
○著しからぬ人の聲	一七四〇二	○泉川	六六〇二	忍び来る人	二九〇五
○一條	一七〇二	○出雲鑑	一七四〇六	長鳴	三二〇二
○一條殿「公信」を見よ	一七〇二	○絲		鷓を追ふ	二七九〇五

晝吠ゆる	二三〇八	四阿屋	二六三〇六	車	六六〇二
○大島	二〇二	新に叙爵したる人	一九二〇八	車宿	一九二〇九
○犬ふせぎ	一四二〇五	板敷「板敷」を見よ	一九三〇二	樽階	一四〇〇六
○稻	二二七〇三	いたづらなる	一九三〇九	木立焼けたる	一九〇〇二
○同	二二七〇六	板屋	一九三〇九	小牛蒨	一九二〇二
○いはせの森	一七〇五	「家は」	一七〇一	小檜垣	一九二〇九
○石田の森	一三六〇六	いみじうしつらひたる	二〇六〇二	小廂	二六四〇二
○岩田山	一五〇三	大なる	二六〇二	障子「障子」を見よ	二七〇五
○山石榴	七二〇四	格子「格子」を見よ	二六〇二	侍の曹司	二七〇五
○盤余の池	四九〇五	高欄「高欄」を見よ	二七〇六	三尺の几帳	二七〇五
○軒	二九〇六	かきいた	二七〇六	蔀	二六〇二〇
○「いひにくきもの」	二八七〇五	懸盤	二七〇五	寢殿	二二〇二
○伊吹山	一五〇二	瓦葺	一八三〇八	住まぬ	一九二〇一
○衣服「服装」を見よ		からかさ	二七〇六	對「對」を見よ	
○家、建物「宮中」参照		唐廂「唐廂」を見よ	二七〇七	立蔀「立蔀」を見よ	
明順朝臣の家	二七〇七	北おもて	二七〇七	棚厨子	二七〇六
新しき簪	二七〇五	厨	二七〇五	中盤	二七〇六

銚子	二七ノ六	南面	二二ノ五	○庵	二四ノ一〇
衝立障子	二七ノ五	御階	二四ノ六	○今内裏	三ノ六
月	一四〇ノ三	宮づかへ人	二七ノ五	○新参	三〇ノ八
局	一四一ノ五	葎	一四〇ノ三	○同	一六八ノ一〇
長押	一八ノ三	馬道	三三ノ一	○今参	二五ノ二
西面	二二ノ六	物怪調する家	二九〇ノ二	○今様歌	二六〇ノ五
四面	二二ノ六	門	一九九ノ二	○「いみじくきたなきもの」	二四ノ二
塗籠	二六ノ八	門前の出入	六六ノ二	○飲食	
はしたのもの	二七ノ五	母屋「母屋」を見よ		あはせ	二八ノ二
牛蒡	八四ノ二	遺戸「遺戸」を見よ		御膳	二八ノ二
ひさげ	二七ノ六	四足門	六ノ九	おももの	二八ノ二
廂「廂」を見よ		廊「廊」を見よ		御膳奏す	一八ノ一
ひぢをりたる廊	二七ノ六	渡殿「渡殿」を見よ		粥	二九〇ノ五
檜皮屋	一〇四ノ九	圓座	二七ノ六	汁物	二八ノ一
東面	二八ノ二	餌袋	二七ノ六	水飯	二八ノ三
火桶	二七ノ七	女の獨棲	一九三ノ三	工匠	二八ノ一
丸屋	二六三ノ六	○「家は」	一七ノ一	陪膳	一八ノ七
みつ葉よつばの殿造	五二ノ五				

終の御飯	一八ノ一	ウ		○鶯のさへぶり(音楽)	二〇ノ二
もちかゆ	三ノ二	○蕨	六八ノ二	○うぐひすの陵	一六ノ三
湯漬	二八ノ八	○萍	一九ノ一	○經綯縁の疊	一九〇ノ九
○妹背山	一五ノ六	○浮島	二〇七ノ九	○右近の陣	一八四ノ四
○「いやしげなるもの」	一七四ノ二	○浮田の森	一七五	○右近の目	一八八ノ一〇
○彌高の峯	一五ノ八	○鶯		○牛	
○伊豫藤		歌	五五ノ五	あめうし	五八ノ一
筋ふとき	一七四ノ六	梅	五五ノ一	牛飼	二二ノ九
「にくきもの」	二九ノ七	宮中	五四ノ一〇	大なる	二六ノ二
紫革	一九ノ二	聲	五四ノ一〇	毛色	三六ノ三
○いりすみ	一七ノ八	文	五四ノ五	鞆の香	二六ノ一
○いりたぐぬ	二三ノ七	郭公との比較	三三ノ四	○うしおに	一七ノ八
○いりたち山	二四ノ二	杜鵑の聲に似せんと	二三ノ七	○牛飼	
○入日	三八ノ七	むしくひ	五五ノ三	牛にくみたる	二二ノ九
○色「色彩」染色、模様」を見よ		夜なかぬ	五五ノ二	きたなげなる	六五ノ一
○色ふし	二〇八ノ二	夜なかぬ	三三ノ四	無作法なる	二八ノ四
				容貌風采	三七ノ二

○牛はさめ	一七〇六	○歌—「和歌」を見よ	一七〇六	○團扇	二九〇九
○うしろめたさに	二四七〇九	○うたじめ橋	六七〇五	○うちばし	一三三〇五
○薄色—「染色、模様」を見よ	二五三〇四	○假寐の橋	六七〇八	○うちふし(人名)	一八九〇五
○薄色の裳	二五三〇三	○假寐の森	一三七〇五	○擣目	八五〇二
○薄墨の袈裟衣	一九七〇七	○宇多法師(横笛)	一一〇〇五	○打目	二二二〇六
○薄紅梅	一九七〇七	○「歌は」	二六〇〇四	○うつ木垣根	二二四〇九
○薄鈍—「染色、模様」を見よ	三三〇三	○歌よみがまし	一五四〇三	○うつきの森	一三七〇四
○薄二藍	二八〇三	○内	三三〇二	○「うつくしきもの」	一七五〇三
○羅	二八〇三	○内	二二〇〇九	○うつつすべき人	二九一〇三
赤色の羅の御衣	二五八〇五	○同	二八二〇一	○卵槌	二六〇〇八
袈裟	二九二〇二	○同	八五〇二〇	○同	九六〇一〇
小袷	二五〇〇二	○同	二八二〇一	○卵槌の木	一七二〇四
夏	二八三〇二	○うちぎぬ	四六〇〇一	○うつば(物語)	二〇九〇二
○薄様	八〇〇二〇	○打出の濱	二〇七〇二	○太秦詣	二三四〇六
○同	一〇四〇六	○「うちとくまじきもの」	二七五〇一	○卵杖	九六〇一〇
○同	一五三〇二	○内大臣殿—「伊周」を見よ	二五九〇一	○齋院より獻じたる	七八〇七
○同	二〇三〇一	○うちの御使	二〇二〇七	○祝言	七八〇七
○同	二〇三〇一	○團扇	二〇二〇七		

法師	一七八〇八	○荊棘	一七〇〇八	早朝	二七六〇八
○于定國の事	七〇八	○産屋	二二〇〇八	船夫	二七五〇一
○内舎人	二五七〇一	○同	一〇三〇六	泊り	二七六〇六
○有度濱(謡ひもの)	一六四〇二	○産養	二六〇〇七	波荒き	二七五〇六
○うなるこが原	一五〇〇二	○うへへ—「一條院」を見よ	一三七〇六	のどかなる	二七五〇三
○采女	二五三〇三	○うへへ—「道隆の室」を見よ	一三七〇六	船路	二七五〇二
葡萄酒の織物の指貫	四九〇二〇	○うへ木の森	一三七〇六	○「海は」	一六〇〇七
猿澤の池	二五三〇二	○うへのきぬ	五二〇二	○梅(襲の色目)	九七〇三
服装	二五三〇二	○同—「朝負佐」	五八〇〇五	○梅	九七〇三
馬に乗せて引出づ	二五三〇二	○うへのきぬの袴	一五四〇二	鶯	五五〇〇一
○卯花	二五三〇二	○上の局	一七〇〇五	御前の梅	八五〇〇四
車に葺き指す	一八〇〇九	○同	一七〇〇七	紅梅	四七〇〇八
賤が垣根	四七〇〇二	○上の女房	一八二〇三	花の皆散りたる	一三三〇六
杜鵑	四七〇〇九	○うへの判官	五八〇〇七	雪	五六〇〇七
○卵花重	一八〇〇二	○馬—「馬」を見よ	五八〇〇七	○梅壺	八四〇〇二
○乳母—「乳母」を見よ	二八二〇二	○海	二七五〇八	○梅壺の少將(物語)	二〇九〇二
○上衣	二八二〇二	航海する人	二七五〇八	○「浦は」	二〇七〇三

○羨しき人 一八ノ三
 ○「うらやましきもの」 一七九ノ五
 ○雲林院 五ノ九
 ○うるさかり 二四ノ三
 ○うるさく 二四ノ二〇
 ○「うれしきもの」 二九ノ三
 ○右衛門尉 二七ノ五
 ○右衛門佐 一三九ノ二

エ

○櫻 二三ノ三
 ○えせ親 二七ノ五
 ○えせもの 一八ノ七
 子産みたる折 一八ノ七
 従者かんがふる 一四八ノ七
 見ならひするもの 二七ノ三
 ○「えせもの所のるをりの事」二八ノ五

オ

○枝扇 一四ノ七
 ○葡萄酒「織物」「服装」「染色、模様」
 ○垣下 二四ノ三
 齋院 二八ノ二〇
 同 六ノ三
 ○筵道 一三ノ一
 ○同 一六八ノ五
 ○おいらか 二八ノ四
 ○大海 二七ノ七
 ○翁 一四八ノ七
 人に侮らるるもの 一〇ノ九
 擧放ちたる 二四ノ二
 ○翁丸(犬) 二〇ノ九
 ○贈物

○卵髓 九六ノ二〇
 餅俵 一五ノ二
 ○押小路のほどぞ 一七ノ二
 ○「おそろしきもの」 一七三ノ五
 ○落窪少将 二六ノ五
 ○音無川 六六ノ二
 ○音無の瀧 六六ノ八
 ○音羽山 一五ノ四
 ○鬼 五六ノ九
 蕨蟲 五六ノ九
 母屋の鬼 六六ノ二
 ○鬼童 一六二ノ三
 ○鬼藏 一七ノ八
 ○生の浦 二〇八ノ一
 ○おふさの市 一六ノ二
 ○大荒木の森 一三七ノ四
 ○御佛名「佛名」を見よ

○おほかみ 一七ノ六
 ○「おほきにてよきもの」 二六ノ二〇
 ○大口 一五ノ三
 ○大藏卿 二二ノ三
 ○おほさき「さき」 七ノ一
 ○「おぼつかなきもの」 七ノ八
 ○おほとなぶら 一一〇ノ八
 ○同 二〇六ノ三
 ○おほと油 一九ノ四
 ○大殿ごもり 九六ノ六
 ○おほとれたる 七〇ノ三
 ○大原野 二六ノ二〇
 ○大比禮(舞曲) 一六五ノ二
 ○大比禮山 一五ノ三
 ○御賀茂詣 二二三ノ三
 ○大井川 六六ノ二
 ○御まへの池 四九ノ二

○御産屋「産屋」を見よ
 ○音楽、樂器
 否かへじ(笙の笛) 一一〇ノ二
 宇多法師(横笛) 一一〇ノ五
 宮中の樂器の名 一一〇ノ三
 琴 二四ノ二
 行啓を迎ふる 二五ノ八
 釘打(横笛) 一一〇ノ五
 朽目(和琴) 一一〇ノ四
 支象(琵琶) 一一〇ノ四
 小水龍(横笛) 一一〇ノ五
 高麗唐土の樂 二五ノ八
 箏 二〇ノ九
 笙の笛 二二ノ六
 鹽竈(和琴) 一一〇ノ四
 「しらべは」 二〇ノ二〇
 水龍(横笛) 一一〇ノ四

調
 殿上の御遊び 二〇ノ二〇
 葉二(横笛) 一一〇ノ五
 箏 二二ノ八
 琵琶「琵琶」を見よ
 笛「笛」を見よ 一一〇ノ四
 二貫(和琴) 一一〇ノ四
 牧馬(琵琶) 一一〇ノ四
 無名(琵琶) 一一〇ノ四
 同 一一〇ノ四
 夜 二〇ノ一
 和琴 一一〇ノ四
 渭橋(琵琶) 一一〇ノ四
 井手(琵琶) 一一〇ノ四
 ○御菓物「菓物」を見よ
 ○陰陽師 主從 二七〇ノ二

紙冠 <small>かみかうぶり</small>	二九三ノ八	愛情	三三六ノ二〇	よき子もちたる	一八〇ノ六
祓 <small>はら</small>	三六ノ四	海に沈めらる	二七ノ五	小野殿の母	二七ノ二〇
○御乳母の大輔 <small>お乳母の大輔</small>	一一ノ四	えせ親	二七ノ五	女親の老いたる	二二三ノ二
○澤潟 <small>さわがた</small>	六八ノ三	孝子	三三ノ二〇	○綴物	
○おもてぶせ	二八ノ二	かけて誓ふ	二八ノ五	赤色	二五ノ二
○御物忌「物忌」を見よ	二八ノ二	繼母子	二八ノ六	同	二五八ノ五
○おももの	二八ノ二	子多き	一七八ノ二	同	一七ノ九
○御膳 <small>おもの</small>	一一ノ五	子の好色の意見	二八七ノ七	同	五〇ノ九
○御膳奏す	一八ノ一	なげく人 <small>なりひら</small>	七八ノ一	同	一〇ノ九
○思ふ人「戀愛」参照		業平の母	二七八ノ二	同	一一ノ九
いたく酔ひたる	一一ノ五	別居	一七九ノ九	色	二五六ノ一
人にほめらるゝ	二二九ノ二	菘蟲	五九ノ九	葡萄染 <small>なびぞの</small>	一〇三ノ八
病中の慰め	二二五ノ六	宮仕人	一九三ノ八	同	一九〇ノ二
二人持ちたる男	一七ノ三	物恐しき折	二三五ノ七	同	二五八ノ八
物書くたのぞく	二二三ノ九	養子	七ノ三	大海	二六三ノ四
○親、親子		山籠の法師の親	七ノ九	堅紋	二四四ノ七
愛子、藏人に任す	二〇三ノ九	病	一七四ノ九	かとり	二五三ノ四

唐錦	一〇一ノ八	○蚊	二九ノ三	吳竹の事	一五九ノ二
朽葉	二〇五ノ二	ほそ聲になのる	三三ノ三	清少と問答	六〇ノ二
紅梅	二二八ノ三	睫の落つる	二六三ノ三	清少に餅餅を贈る	一五二ノ二
同	一七三ノ二	○搔練襲	四一ノ七	殿上の御遊び	七九ノ一
同	二五八ノ九	○香 <small>か</small>	二七五ノ八	女の評	六〇ノ二
濃き綾	二八三ノ四	○航海	一九四ノ二	○香染「染色」服装を見よ	一七ノ七
しびら	五〇ノ八	○格子	一九七ノ二〇	○強盜	一三七ノ六
生絹 <small>すいし</small>	二八三ノ八	○同	二〇五ノ二	○かうたての森	一五二ノ九
染色	二八三ノ二	○同	二九〇ノ三	○寄居蟲 <small>がいな</small>	二八〇ノ五
萌黄の固紋 <small>りふもん</small>	二四四ノ七	○格子のつぼ	二〇五ノ九	○かうぶりえて	一九二ノ八
立紋	二八三ノ七	○庚申	二二三ノ四	○高野 <small>かうらん</small>	二〇八ノ三
○「織物は」		○好色「戀愛」参照	二八九ノ二	○高欄	一七ノ六
○香「たきもの」 「薫物」参照		獨住する	一九〇ノ三	○同	一〇四ノ四
菖蒲の殘香	二六ノ四	老人	二八九ノ二	○同	一〇四ノ二
衣にたきしめたる	二六ノ六	○行成	一九〇ノ三	○同	一四〇ノ九
		逢坂の關	一五ノ二	○同	二四三ノ六

○鏡	山鳥	心見ゆる	鏡の池	かじやき	かきいた	書立	杜若	「かきまさりするもの」	楽器「音楽」を見よ	學者	神樂	還立の	櫛	人長	同	神樂歌
一六ノ六	一三〇ノ二	八ノ三	三三ノ九	六七ノ六	四ノ二	二八ノ三	二七ノ五	二〇八ノ三	六七ノ六	一〇三ノ二	一六五ノ八	五二ノ一	七八ノ七	一六五ノ二	二六〇ノ五	
○かくれの淵	○かくれ簀	○鏝	○懸子	○かけはし	○懸盤	○同	○同	○笠置	○鶴の橋	○かさし	○笠取山	○汗衫	○同	○同	○同	
一六ノ六	一三〇ノ二	八ノ三	三三ノ九	六七ノ六	四ノ二	二八ノ三	二七ノ五	二〇八ノ三	六七ノ六	一〇三ノ二	一五ノ一	五〇ノ二	五六ノ六	一〇四ノ四		
○汗衫	○同	○同	○同	○「汗衫は」	○鎧太刀	○かしこ淵	○柏木	○尉	○葉守神	○兵衛佐	○柏原の陵	○春日	○春日野	○春日詣	○春日祭	○霞
一〇五ノ七	一三九ノ八	一五四ノ一〇	二八三ノ六	二八三ノ五	一〇一ノ八	一六ノ四	五三ノ二	五三ノ二	五三ノ二	一六ノ二	二六二ノ一〇	二〇九ノ七	一〇三ノ八	一七六ノ八	二ノ二	

○風	秋の暁	秋の夕	荒くはあらぬ	通ひ来る人	こがらし	七月	野分	暴風	春風の問答	船	女	「風は」	鹿背山	家族談話	方人	同
二〇五ノ二	一ノ五	一四〇ノ四	二六七ノ六	二〇四ノ一〇	五七ノ七	二〇五ノ七	一七七ノ五	二四七ノ二	一九一ノ五	二〇五ノ二	二〇四ノ九	一四ノ二	二七四ノ五	一七〇ノ八	一八九ノ二	
○かたさり山	○辱く	○方違	○雙應	齊信方違にゆく	夜深く歸る	○かたさめ山	○交野	○交野少將	○交野の少將(物語)	○酢漿	○かたばみ(紋)	○「かたばらいたきもの」	○かたへ	○堅紋	○かたらひの岡	○乞兒
一四ノ二	二四ノ六	二二ノ九	八四ノ三	二七〇ノ二	一五ノ六	二〇九ノ六	二六七ノ四	二九ノ二	六八ノ四	二八三ノ一〇	一四ノ四	一九ノ八	二四四ノ七	三三ノ九	一四六ノ五	
○片岡	○加持	○同	○勝間田の池	○桂	○鬘	○髮短き人	○七尺の鬘	○葛城神	○同	○葛城山	○門「門」を見よ	○かとり	○鏡	○同	○雁緋	○兼證が事
二三四ノ九	二八ノ二	二九三ノ四	四九ノ四	五二ノ一〇	一四八ノ五	一九〇ノ二	一八六ノ二	一九七ノ九	一五ノ五	二五三ノ四	五六ノ六	一七三ノ九	七〇ノ二	二四七ノ二		

○川一月下	二六ノ八	○還立の御神樂	一六五ノ八	葉守の神	五三ノ二
○かばぎぬ	一七八ノ二	○蛙	一九六ノ二〇	平野	二六二ノ二
○川霧	三九ノ六	○かへる山	一五ノ六	松尾	二六二ノ六
○かばぐちの海	一六ノ八	○顔「容貌、風采」を見よ		水分神	二六三ノ二
○川竹	一三九ノ二	○鷹來紅	七〇ノ一	「社は」	二四ノ二〇
○川千鳥	五四ノ八	○竈に豆	一三五ノ一〇	八幡	二六二ノ九
○「川は」	六六ノ二〇	○雷「雷」を見よ		○髪	
○「川は」		○神「神社」参照		あしき人	五七ノ二
○蝙蝠		蟻通の明神	三三ノ二	葵	五七ノ二
去年の	三五ノ二	・稻荷	二六二ノ一〇	大やかなる童	二九三ノ一
ふるき	二〇九ノ三	大原野	二六二ノ一〇	頭あらひてほす	一七三ノ六
むしげみたる	二六七ノ一	春日	二六二ノ一〇	頭の毛	二五四ノ四
○土器	一五二ノ二〇	葛城の神「葛城の神」を見よ		髪短き人	一四八ノ五
○同	一七三ノ九	「神は」	二六二ノ八	唐衣の中なる	二五五ノ三
○貝	一四二ノ二〇	賀茂	二六二ノ一〇	清げなる童	二九三ノ一
○飯匙	二〇六ノ一〇	任事の明神	三三ノ二	黒き髪の筋太き	一七四ノ三
○かひろぎ	七〇ノ二	職の神	二〇二ノ六	肥えたる人の髪多き	一四六ノ一〇
○楓	五二ノ六				

硯	二七ノ二	白う清き	二四〇ノ四	雪月花時最憶君(朗詠)	一九六ノ四
そぎすゑ	二〇六ノ四	檀紙「檀紙」を見よ		大廈嶺之梅早落(朗詠)	一三三ノ六
立ちあがる	二二ノ二	紫	一〇三ノ九	月與秋期而身何去(朗詠)	一五五ノ八
燈火	一九七ノ五	○紙冠	二九三ノ八	露應別涙(菅家文章)	一八五ノ二〇
長く麗しき人	一八〇ノ六	○神南備の森	一三七ノ五	西去都門(白樂天)	八七ノ四
女房	二五二ノ七	○「神は」	二六二ノ八	花心開(白樂天)	二四九ノ二
○紙		○函谷關	一五七ノ四	琵琶聲停欲語遲(白樂天)	七九ノ二
赤き薄様	一五三ノ二	○漢詩		雪滿群山(朗詠)	一九五ノ二
淺綠	二七二ノ一〇	朝爲行雲(文選)	三三ノ三	蘭省花時(白樂天)	八〇ノ二〇
淺綠なる薄様	二〇三ノ一	遊子猶行殘月(朗詠)	二七九ノ二	梨花一枝帶春雨(白樂天)	四八ノ九
青き薄様	八〇ノ一〇	一聲秋(朗詠)	七七ノ六	凜々氷鋪(朗詠)	二七三ノ二
紙屋紙	一五六ノ二	香爐峰雪(白樂天)	二七〇ノ九	廬山雨夜(白樂天)	八ノ二
清き紙	二四一ノ四	瓦有松(白樂天)	八七ノ五	○漢書の御屏風	二六九ノ三
胡桃色といふ色紙	一六〇ノ二	九品蓮臺之間(朗詠)	二四一ノ一〇	○上達部	三三ノ二
紅梅	二四五ノ九	稱此君(朗詠)	一五九ノ七	○同	一五五ノ六
色紙	二四〇ノ四	聲驚明王之眠(朗詠)	二七九ノ七	○「上達部は」	三三ノ一
同	二四一ノ五	蕭會稽之過古廟(朗詠)	一八七ノ七	○雷鳴の陣	

おそろし	二六九ノ一〇	赤色櫻の五重の唐衣	二五八ノ一	夜の烏	七三ノ四
舎人の言語	三三〇ノ三	青末濃	二九ノ二	〇枳殻	一七ノ八
〇閑院の太政大臣の女御	一八九ノ五	織物の唐衣	二二九ノ九	〇唐錦	一〇ノ八
〇鴨	五四ノ九	著垂れたる	一九八ノ八	〇唐廂	一一九ノ七
〇賀茂	二六ノ二〇	五月節句	五〇ノ二	〇同	二五ノ二〇
〇同	二六二ノ二〇	櫻の唐衣	一七ノ二〇	〇から繪	二六二ノ七
〇賀茂臨時祭	一六五ノ七	同	二五三ノ四	〇唐繪の革の帶	二三〇ノ一
〇掃殿寮	二四七ノ五	染色	二四四ノ七	〇雁	一ノ四
〇掃部司	一六四ノ一	同	二八三ノ二	〇同	五四ノ八
〇同	一六四ノ八	名	一五四ノ二〇	〇狩衣	
〇粥	二九〇ノ五	〇「唐衣は」	二八三ノ一	青き	二六〇ノ九
〇粥の木	三ノ二	〇唐崎	二六三ノ四	青葉	二六〇ノ九
〇唐葵	七一ノ三	〇烏		香染	四六ノ一
〇唐綾	一九九ノ五	秋の夕	一ノ三	香染のうすき	二六〇ノ九
〇唐鏡	三五ノ三	集り鳴く	二九ノ四	領	一七二ノ二
〇からかさ	二七ノ六	齋の産飯くふ	二二九ノ八	さくら	二六〇ノ九
〇唐衣		見いれ聞きいれする人なし	五五ノ七	白きふくさの赤色	二六〇ノ九

ふぢ	二六〇ノ一〇	「木は」	五ノ九	宜陽殿	一一〇ノ五
松の葉いろしたる	二六〇ノ九	野分の朝	二〇五ノ八	藏人所	一五六ノ二
前を下に捲り入る	二八ノ八	葉	二五四ノ二	吳竹臺	一六五ノ四
亂れ著たる	二四ノ二	〇舅姑「舅姑」を見よ		黒戸「黒戸」を見よ	
やなぎ	二六〇ノ九	〇宮中		管絃の遊	一一〇ノ七
童	一七三ノ一	朝餉の間	一〇ノ二	官のつかさ	一八三ノ七
〇「狩衣は」	二六〇ノ八	鶯	五四ノ二〇	五月節句	五〇ノ四
〇かりのこ	五六ノ六	右近の陣	一八四ノ四	五節	一〇七ノ二
〇かりの子	一七六ノ五	上の局「上の局」を見よ		坤元録の御屏風	二六九ノ二
〇狩袴	九〇ノ五	梅壺	八四ノ二	左衛門の陣「左衛門の陣」を見よ	
〇刈萱	六九ノ二	御産屋	一〇三ノ六	職の御曹司「職の御曹司」を見よ	
〇家屋「家、建物」を見よ		御物忌	一八八ノ二〇	見よ	
		漢書の御屏風	二六九ノ二	仁壽殿	一〇七ノ七
		雷鳴の陣「雷鳴の陣」を見よ		深夜の御笛	二六三ノ二
		掃部司	一六四ノ一	深夜男ども召す	二六三ノ二
		后宮	五〇ノ六	正月	二ノ九
〇木		北の陣「北の陣」を見よ			
風に倒れたる	一四八ノ五				
「木の花は」	四七ノ七				

正月十五日	三ノ二	登華殿—「登華殿」を見よ	五〇ノ八
宿泊	二九ノ二	主殿司	一五ノ九
承香殿	一六四ノ九	中の戸	一八ノ二
清涼殿—「清涼殿」を見よ		縫殿	五〇ノ七
清涼殿のそり橋	一〇八ノ一	廂—「廂」を見よ	
宣耀殿	二九ノ六	書御座	一七ノ三
臺盤所—「臺盤所」を見よ		藤壺	一五〇ノ二
陣—「陣」を見よ		廊—「廊」見よ	
除目	四ノ一	廊に忍ぶ	五八ノ九
貞觀殿	二九ノ六	廊の一の口	一八五ノ八
月次の御屏風	二七〇ノ一	御厨子所	六四ノ五
作物所	二七〇ノ一	宮仕人の批評	二七四ノ三
局	二二三ノ三	御湯殿	二二三ノ一
局に立ちとまる人々	七五ノ二	厩寮	二八〇ノ六
殿上	一五ノ三	〇桔梗	六九ノ二〇
殿上の臺盤	一三六ノ七	〇菊	
殿上のなだいめん	六三ノ八	九月九日	一四ノ一
		九月節句	五〇ノ八
		露	一五ノ九
		ところ／＼うつろひたる	六九ノ一〇
		〇きくだの森	一三七ノ四
		〇戲言諧諷	
		下衆	一二四ノ七
		猿樂こと	一三〇ノ九
		せんぞくれう	一二五ノ九
		〇后	
		御むすめの女御	一〇三ノ二
		畫の行啓	一〇三ノ六
		立后の作法	一〇三ノ六
		〇后腹の姫宮	二二ノ二
		〇后 町の井	一九二ノ一
		〇氣質—短氣	一七九ノ三
		〇季節	
		五節句	一三ノ一

頃ば	一ノ九	三尺の几帳	七五ノ二〇
四季の評	一ノ一	同	一九七ノ三
過ぎに過ぐるもの	二二三ノ六	同	二七五
〇木曾路の橋	六七ノ六	同	二五六ノ七
〇祈禱		同	二九一ノ五
効驗	二二〇ノ九	四尺の几帳	二九一ノ一
態度	二二〇ノ五	袖几帳	八三ノ二
〇「きたなげなるもの」	一七三ノ二〇	夏の几帳	一〇四ノ五
〇北の陣	一四ノ六	ひきたつ	二二ノ一
〇同	二二七ノ一	紐	二〇七ノ一
〇同	二二三ノ三	ほころびより見入る	一九八ノ二
〇几帳		〇貴人	一八〇ノ七
後なるは誰ぞ	一九九ノ二〇	〇衣の名	一五四ノ九
押しやる	一八ノ三	〇木のほし	六ノ二
帷の舊りぬる	一九ノ二〇	〇「木の花は」	四七ノ七
几帳の經子	七五ノ四	〇季の御讀經	二六九ノ九
朽木形	一四ノ一〇	〇「木は」	五二ノ九
		〇黄檗	七二ノ三
		〇吉備の中山	一五ノ五
		〇君達	
		假粧	二四六ノ一
		彈正にておはする	二八四ノ四
		〇公達	
		隨身	五九ノ二
		官	三三ノ五
		直衣姿	一〇四ノ三
		なり上りたる	二〇三ノ九
		祭のかへさ	二二四ノ三
		小忌の公達	一〇五ノ三
		〇「公達は」	二二一ノ四
		〇公任	一三三ノ二
		〇きんの御琴	二〇ノ一〇
		〇公信(一條殿)	一一九ノ三
		〇琴の袋	一四六ノ一〇

○行幸	一七八ノ六	人の見ぬ	二六ノ三	川霧	三二九ノ六
姫大夫	二〇〇ノ二	○宜陽殿 <small>ぎやうでん</small> の一の棚に	二〇ノ五	○桐	四八ノ二
見る	二二二ノ三	○「経ば」	二〇八ノ五	琴	四八ノ二
「見るものば」	二二二ノ二	○客	三六ノ四	葉のひろごり	四八ノ二〇
めでたきもの	二二二ノ二	心ゆく	三七ノ七	鳳凰	四八ノ二
○経供養	二五八ノ二〇	虚察	二七ノ二〇	紫の花	四八ノ二〇
行事	二五七ノ六	長言する	二四ノ五	○蟋蟀 <small>きりぎりす</small>	五六ノ九
棧敷の有様	二五七ノ六	無作法	二四ノ五	○同	一三九ノ九
○行啓	一〇三ノ六	○毀譽 <small>はうへん</small> 「褒貶」を見よ		○「霧ば」	三二九ノ五
後の行啓	二五三ノ二	○虚言	二〇ノ八	ク	
積善寺行啓の行粧	二五三ノ二	噫	一九ノ三	○釘打 <small>くわづ</small> (横笛)	一一〇ノ五
御輿の粧	二五三ノ二	大事うけたる	一七三ノ八	○傀儡 <small>くわい</small>	七八ノ九
○行粧	二〇三ノ八	○「きよしと見ゆるもの」	二六ノ二	○括物 <small>くわくぶつ</small>	一八二ノ六
一人	二〇三ノ八	○清見が關	二六ノ二	○九月	二〇四ノ一〇
下衆などにも	二〇三ノ八	○「さら／＼しきもの」	二六ノ二	雨風	
參詣	二〇三ノ八	○霧	二六ノ二	雨後の朝	一五二ノ八
積善寺行啓	二〇三ノ八	雨と霧と	七三ノ三		

菊	五〇ノ八	○俱舎の頌	一四〇ノ八	○菓子	一六三ノ三
蟋蟀	一三九ノ九	○葛	六九ノ二	○同	二二六ノ二
九日	一三九ノ九	○同	六九ノ七	○朽木形 <small>くちなは</small>	一〇四ノ一〇
節句	五〇ノ八	○くすしがり	一五ノ三	○地楊梅 <small>くちなは</small>	一七七ノ七
○草「花」を見よ	五〇ノ八	○薬玉	二六ノ八	○朽葉 <small>(織物)</small>	二〇五ノ二
○「草の花は」	六九ノ九	○同	五〇ノ七	○朽目 <small>(和琴)</small>	一一〇ノ四
○「草は」	六八ノ一	○同	一〇四ノ四	○「くちなはしきもの」	一一五ノ二
○噫	二〇一ノ八	○同	一五ノ二	○響蟲	二二一ノ八
虚言	二〇一ノ八	○同	二〇ノ二	○九條錫杖	二六〇ノ三
元日	二〇二ノ九	○くすの木	五二ノ二	○國ゆづり <small>(物語)</small>	二〇九ノ二
男	三〇一ノ二	○裙帶 <small>くたい</small>	一五ノ一	○水鷄	五四ノ二
○櫛	三〇一ノ二	○同	一九ノ二	○供奉	二〇四ノ五
菖蒲のさしぐし	五〇ノ二	○同	二五ノ二	○熊野	
指櫛	二ノ六	○くだきの關	一三六ノ二	○修驗者	六ノ五
指櫛みがく程に	一五ノ二	○菓子 <small>くだもの</small>	九八ノ三	○那智の瀧	六六ノ八
○孔子	一五三ノ九	○同	一三三ノ四	○雲	
○孔雀經の御讀經	二六九ノ八	○同	一四三ノ二	天雲	三二九ノ二

入日	三三八七	大夫	一九三ノ九	○藏人辨	二五九ノ四
黒	三三九ノ二	忠隆	一〇ノ二	○競馬	一七四ノ九
白	二二九ノ二	殿上のなだいめん	六三ノ二	○鞍馬の九曲	一九一ノ七
月	三三九ノ三	頭	一三六ノ七	○鞍馬詣	八四ノ三
春の曙	一ノ一	任官の際競争ありたる	二〇二ノ九	○位山	一五ノ五
紫	三三九ノ二	藤原時柄	一三六ノ四	○栗のいが	一七三ノ六
○蜘蛛の巣	一五ノ二〇	御琴もたりし人	二二三ノ五	○厨	二二七ノ五
○「雲は」	三三九ノ一	昔の藏人	一〇三ノ二〇	○厨女	六六ノ五
○藏人	一〇五ノ一	同	二六七ノ二〇	○「くるしけなるもの」	一七八ノ二
あやめの藏人	二〇ノ二〇	夜行	五八ノ二	○くるべきの森	一三七ノ五
青色すがた	一一ノ九	節折	一七八ノ六	○くるべきもの	一一八ノ一
犬を調す	一九二ノ九	六位藏人	五八ノ七	○車「乗物」参照	
權守	三七ノ三	同	一〇一ノ八	網代車	三六ノ一〇
五位	五ノ三	同	一九三ノ八	合ひ乗	二七三ノ一
同	二五九ノ一	○藏人少納言	二二三ノ五	葵かつら	二二三ノ五
同	三三ノ一	○藏人兵衛佐	二二三ノ五	尼の車	二五三ノ二
すけたと		○藏人辨	二二三ノ五	書立に随ひて乗す	二五二ノ二

唐の車	二五三ノ二	軾	二七三ノ二〇	○胡桃	一七三ノ一〇
借りて乗る	二八九ノ三	とみのな	二二六ノ三	○胡桃色	一六〇ノ二
きしめく	三〇ノ一	夏	一四六ノ四	○吳竹	一五九ノ一
行事	二五〇ノ二〇	納涼	二五〇ノ二〇	○紅「染色」「服装」を見よ	二八六ノ二
行列	二五二ノ二〇	業遠朝臣の誠	二八九ノ七	○樽階	
元三の音	一三八ノ四	花の粧飾	一一八ノ九	○黒「白	七三ノ二
笙の笛	二二一ノ六	同	二二四ノ九	○鐵	一七七ノ五
下簾	二五三ノ二	張筵	一四六ノ五	○黒戸	七九ノ八
同	二五三ノ三	人(給(副車))	二二九ノ六	○同	一三三ノ七
同	二九三ノ六	檳榔毛の車	六ノ二	○同	一三三ノ二〇
楊	六六ノ三	同	六六ノ二	○同	一五〇ノ五
正月八日	三ノ一	深き所に陥りたる	二八九ノ八	○懷舊	三五ノ九
車中に入る垣の枝	二五七	船に居う	一三七ノ八	○繪畫	
車輪に挫かれたる蓬	二五九	待つ間	一八三ノ七	扇の繪	一一一ノ四
後口	二五三ノ三	筵張	一七四ノ五	荒海障子	一七ノ四
松明の煙	二六ノ二	物見の裝飾	二八ノ六	大笠	三三〇ノ二
顛覆	二五ノ二	女車に續く男車	二五ノ一	「かきまきりするもの」	一三八ノ七

唐繪	一〇九	釐々見れば目立たず	三六〇二
中宮清少に見せ給ふ	一九七三	右衛門の尉	二七七五
地獄畫の屏風	七八〇〇	右衛門佐	一九九二
布屏風	一七四〇三	上達部「上達部」を見よ	二〇四一
屏風の繪	二三八〇二	上達部になる	二〇四一
火桶の火に見えたる	二〇七三	掃殿寮	二四七五
「繪にかきて劣るもの」	一八七五	公達	三二一五
女繪	三六〇一	藏人「藏人」を見よ	三二一五
○外出		藏人おりたる人	三二一五
雨	一四五〇二	藏人式部丞	三六九八
同	二八五〇八	藏人少納言	三二一五
○皇后宮の權大夫	一七二〇	藏人兵衛佐	三三〇五
○過去	三五〇八	藏人の辨	二五九四
○官人、官職		皇后宮の權大夫	一七二〇
右近の目	一八八〇〇	關白	一五〇五
内舍人	二五七〇一	近衛づかさ	一四〇八
		權中將	一四〇七
		權の守	一九三〇九
		五位の藏人「藏人」を見よ	
		左大辨	一五三〇七
		雜色「雜色」を見よ	
		式部丞	二四五〇四
		式部丞の爵	一七四〇三
		式部大夫	二八〇九
		上官「上官」を見よ	
		昇進	二〇三〇〇
		同	二二二〇二
		受領「受領」を見よ	
		駿河前司	二八〇九
		大饗の甘栗使	一〇一〇二
		大將	二六九〇八
		大貳	二〇四〇一
		臺盤所の雜仕	二四二〇五

大夫	一九二七	主殿の女官	二四七五
瀧口「瀧口」を見よ		内侍	一三〇二
彈正	二八四〇四	内膳	一〇三〇七
中少將	二二三〇一	姫大夫「姫大夫」を見よ	
地下「地下」を見よ		別當「別當」を見よ	
除目「除目」を見よ		御厨人「御厨人」を見よ	
作物所の別當	二二七〇一	御綱助	二二七〇一
殿上	二五二〇二	宮司	二四九〇八
殿上人「殿上人」を見よ		木工允	三二〇二
出居の少將	一四六〇二	宿りの司の權の守	一九三〇五
頭中將	七九〇六	六位藏人「藏人」を見よ	
頭辨「頭辨」を見よ		院司	二五九〇六
時づかさ	二八三〇二	院の別當	一四九〇二
所衆「所衆」を見よ		衛士	一九〇二〇
刀自	一六二〇四	衛府「衛府」を見よ	
主殿司「主殿司」を見よ		○卷「卷」を見よ	一六〇二二
主殿亮	一三九〇五	○官「官」を見よ	一五三〇九
		○關白殿「道隆」を見よ	一〇三〇二
		○願文	
		○筈	二〇七〇四
		○履子	五〇六
		○同	一四〇九
		○同	二二七〇九
		○藝能	
		歌よみ	一八〇〇七
		能書	一八〇〇七
		○警蹕	七七一
		○計略	
		人を謀り得たる	二四〇〇八
		男を謀り得たる	二四〇〇九
		○教育「女子」	二〇〇九
		○教化	一四三〇一

○けぎよう	一三三ノ九	○懸想人	一七八ノ四	○同(菩提寺)	四〇ノ七
○袈裟	一七八ノ四	○懸想文	二五三ノ三	○同(善提寺)	四〇ノ二
赤	二五三ノ三	○下種、下衆	一四六ノ二〇	○削氷	五六ノ六
薄墨	二五八ノ六	家	二五八ノ六	○毛拔	七三ノ二
衾	二二八ノ八	同	二二八ノ八	○夾算	二二ノ九
紫	二二八ノ八	歌うたふ	二二八ノ八	○驗	二五ノ四
○化粧、假粧	二二八ノ八	諸謔	二二八ノ八	○同	一七九ノ一
鏡	二二八ノ八	紅の袴	二二八ノ八	○嫌疑	五八ノ六
君達	二二八ノ八	櫻を引倒す	二二八ノ八	○言語	二八七ノ六
心ときめきす	二二八ノ八	船夫	二二八ノ八	いひにくきもの	二八七ノ六
指櫛の似合たる	二二八ノ八	褒貶	二二八ノ八	打解け言	二二四ノ五
舍人	二二八ノ八	初瀬詣	二二八ノ八	同じ事したる	二二四ノ六
涙	二二八ノ八	六位藏人	二二八ノ八		
女房	二二八ノ八	○けそ	二二八ノ八		
齒黒の乾く間	二二八ノ八	○顯證	二二八ノ八		
眉拔く	二二八ノ八				
御梳櫛	二二八ノ八				

隆口	二二四ノ六	使ひ方	二六二ノ四	うつ人	一七三ノ二
雷鳴の陣の舍人	二二四ノ六	長言	二七〇	碁石	二二ノ五
虚言	一九三ノ三	情ある人の詞	二七〇	同	二〇七ノ四
下司	五二ノ二	禰宜	三六ノ八	碁盤	一八七ノ三
口狀の始終	二八七ノ六	秘事を公言する	二二五ノ五	深夜の圍碁	二〇七ノ三
「ことごとくなるもの」	五二ノ二	文こと葉のなめげなる	三三ノ七	つれなくなぐさむもの	一六三ノ二
「詞なめげなるもの」	二二〇ノ二	無禮	二二六	欲深き對手に勝つ	二〇三ノ二
差出口	二八八ノ五	宮のめ	二二〇ノ三	○小一條	一七ノ三
舟夫	二二〇ノ三	わざと繕はで言ふ	二六二ノ二	○小一條の大將	四〇ノ七
知らず見ず聞かぬ事	二二〇ノ三	○驗者	一七九ノ一	○小一條院	三三ノ六
相撲	二二〇ノ三	○立象(琵琶)	二二〇ノ三	○紅梅	四七ノ八
消息	二二〇ノ三	○源少納言	二二〇ノ三	○紅梅(家)	一七ノ三
僧侶	二二〇ノ三	○建築「家、建物」「宮中」を見よ	二二〇ノ三	○紅梅「織物」「染色」「服装」を見よ	二二〇ノ三
同	二二〇ノ三	○解文	二二〇ノ三	○紅梅の衣	二二〇ノ三
他人に對する批評	二二〇ノ三	○碁	二二〇ノ三	○弘法大師	二二〇ノ三
兒の物言ふ	二二〇ノ三			○鴻門の會	二二〇ノ五
男女	二二〇ノ三			○肥えたる人の髪多かる	二二〇ノ一〇

○五葉	五二〇	御精進	一六八	○心の鬼	一六六
○粉川	二〇八	山里	二五〇	○「こころもとなきもの」	一八九
○こがらし	二〇四	蓬	五〇四	○「こころゆくもの」	三五二
○木枯の森	一七〇	○五月五日	四九三	○心よしと知られたる人	二七〇
○弘徽殿(女御)	一八九	標の花	四九三	○御座	二四二
○古今集	六九五	曇りくらしたる	一三二	○故事	二四二
○古今集の歌	二〇〇	節句	五〇四	聞き出でたる	二四〇
○古今の草紙	二〇一	○五月節句—書簡	五〇四	探し出でたる	二四〇
○五月	二〇一	○極樂	一九一	○故事	二四二
あやめの藏人	一〇五	○苦	六八四	○小白川	四〇七
五日	一三〇	○「こころちよげなるもの」	七八六	○小水龍(横笛)	二〇五
宮中	五〇四	○こころひの森	一七〇	○五節	一〇八
菖蒲	五〇四	○心あがり	六八三	かいつくろひ	一〇八
節句	五〇四	○「こころづきなきもの」	一四五	かしづき	一〇五
空	五〇六	○「こころづきなきもの」	二八五	宮中	一〇七
朔日	四八〇	○心ときめきするもの	三五三	行事の藏人	一〇八
楡	五二五	○「心にくきもの」	二六八	試の御髪上	一七八

五節の局	一〇五	○「こころなるもの」	五二	○近衛の御門	一七〇
受領の出す折	二三五	○こととり	七八九	○小牛蒨	一七〇
帳臺の夜	一〇八	○ことなし草	六八七	○木幡の森	一三七
殿上人	一〇八	○ことなしび	一三四	○戀—「戀愛」を見よ	一三七
主殿司	一〇七	○同	二八九	○こひぬまの池	五〇
舞姫	一〇七	○「こころに人にしられぬもの」	二三五	○こひの森	一三七
舞姫の服装	一〇五	○小舎人童	五九	○御佛名—「佛名」を見よ	一三五
童	一〇五	○同	二九〇	○胡粉	一七四
童舞の夜	一〇九	○任事の明神	三四	○こぼす	一五八
○御前	三七〇	○詞—「言語」を見よ	三三〇	○護法	二九一
○後撰集	六九五	○「詞なめげなるもの」	二五〇	○水	二七三
○木幡	六八四	○このきみ	一五九	削氷	五六
○琴	六八四	○このくれ山	一四二	垂氷	二七三
桐	四九	○木の葉	二五〇	○駒	六九
ならふ	一八二	○木のはし	六〇	○狛犬	一〇三
音も弾き整へり	二四二	○「木の花は」	四七	○同	二四二
○こと加へ	九三	○近衛づかさ	一四八	○狛犬(舞)	二五四

○ 狛犬しく舞ふもの	一四八ノ九	○ 後夜	一四三ノ三	○ 罪科	一〇ノ二
○ こまがた(舞)	二二〇ノ七	○ 小弓	二〇三ノ一	犬を流罪にす	一三ノ八
○ こまの物語	二〇九ノ六	○ 同	二二〇ノ一	畏勤事	二五ノ七
○ 同	二〇九ノ三	○ こりすまの浦	二〇八ノ一	○ 釵子	三三ノ二
○ 古萬葉集	二六六ノ二	○ こりすまの波	一六ノ二〇	○ 宰相	三三ノ二
○ こま山(催馬樂)	一六五ノ一	○ 御靈會	二六ノ二〇	○ 宰相中將	二二ノ二
○ 金鼓	一四五ノ一	○ 振幡	七八ノ七	○ 宰相中將「齊信」を見よ	二二ノ二
○ 權大納言	三三ノ二	○ 馬長	七八ノ七	○ 宰相の君	二五六ノ二〇
○ 權大納言「伊周」を見よ	三三ノ二	○ 伊周(權大納言、大納言)	二七九ノ二	○ 催馬樂	六七ノ一
○ 權中將	三三ノ五	遊子猶行殘月の條	二七九ノ二		
○ 權中納言	三三ノ二	庚申に歌詠ます	一三三ノ四		
○ 菰	六八ノ二	關白(道隆)に沓を穿す	一五〇ノ七		
○ 同	一三七ノ九	聲驚明王之眠の條	二七九ノ七		
○ 蔣	六九ノ七	清少に物言ふ	一九九ノ二		
○ 薦	一七三ノ九	中宮に候す	一八ノ二		
○ 木守	九七ノ二	女房と物言ひ戯る	一九九ノ七		
		女房の降車の世話	二五五ノ一		

サ

○ 裁縫	二二ノ三	○ 草紙	一〇四ノ六	○ さうぞき	五ノ八
頓の物ぬふ	二二ノ三	薄様	二七八ノ四	○ さうぞく「服装」を見よ	四〇ノ五
縫ひ競べ	一八二ノ四	歌かく	二四三ノ六	○ さうちうが家の人	三三ノ二
針に糸を通す	一八二ノ四	下賜の紙	二〇〇ノ三	○ さうなしのぬし	三三ノ二
待つ間	一八二ノ二	草假名書きたる	二〇〇ノ三	○ 左右の大將	三三ノ二
○ 祭文	二七〇ノ二	○ 精進	二七〇ノ二	○ 笙の笛	一一〇ノ二
○ 同	二七〇ノ三	○ 行	二七〇ノ二	否かへじ	一一〇ノ二
○ 齋院	二二四ノ三	精進物	六ノ二	淑景舎の得給へる	一〇九ノ八
垣下	二二四ノ三	千日の精進	一三四ノ二	月に車上にて	二二ノ六
○ 同	二二八ノ二	御嶽精進	一三八ノ二〇	吹く顔	二二ノ七
罪深し	二二九ノ二	○ 障子	一七九ノ四	もてあつかひ	二二ノ七
御輿の通過	二二九ノ三	荒海の障子	二九ノ二	○ 薔薇	七ノ五
宮仕	二二九ノ二	開閉	八ノ三	○ 菖蒲	一七ノ二
雪の日のおとづれ	九六ノ三	北の障子	二七ノ五	雨に刈る	一七ノ二
○ 箏	二二〇ノ九	衝立障子	一九二ノ二	「草は」	六八ノ二
○ 姓	二四四ノ六	布障子	二二ノ四	五月節句	五〇ノ四
○ 造花	二四四ノ二	○ 裝飾「柳のかづら	二二ノ四	菖蒲輿	三三ノ二

書簡の中に入る	五二ノ四	○左京(人名)	一八九ノ五	○笹	六九ノ七
残の香	二六ノ四	○櫻(襲の色目)	一七ノ二〇	○棧敷	二五四ノ二
檜皮屋に葺きたる	一〇四ノ九	○同	一四ノ一〇	○さし出	三〇ノ三
○菖蒲のかづら	一〇五ノ一	○櫻	一七ノ六	○同	一四九ノ一
○相府蓮	二〇ノ二	青き瓶にさす	一七ノ六	○指貫	
○才 <small>さへ</small> の男	一六五ノ二	落葉	二〇五ノ五	青鈍 <small>あをにじ</small> の堅紋の指貫	二四四ノ五
○櫛	五二ノ一	造化	二四四ノ一	青鈍の指貫	一四四ノ三
○「さがしきもの」	二三〇ノ四	造化を引倒す	二四六ノ二	葡萄染 <small>えびぞめ</small> の織物	二五三ノ二
○捜し物		花瓶に挿す	四ノ八	葡萄染の堅紋の指貫	二七三ノ八
急ぎ求むる	二四〇ノ六	花瓣、葉色、枝ぶり	四七ノ八	葡萄染の指貫	八五ノ一
文	二四〇ノ六	繪にかきて劣るもの	一三八ノ六	酷暑には夏蟲の色	二六〇ノ七
○肴	一三三ノ四	○櫻の唐衣 <small>「唐衣」を見よ</small>		名あたらす	一五四ノ二
○同	二四五ノ二	○櫻の直衣 <small>「直衣」を見よ</small>		夏は二藍	二六〇ノ七
○嵯峨野	二〇九ノ六	○櫻井	一九二ノ一	紫のいと濃き	一三九ノ四
○さがりば	一八〇ノ六	○酒		紫の濃き	二六〇ノ七
○鷺	五四ノ五	酒客	二八ノ九	萌黄	二六〇ノ七
○「崎は」	二六三ノ三	御經佛供養はて後	一五ノ七	○「指貫は」	二六〇ノ六

○左大辨	一五三ノ七	蟲	四ノ二〇	○猿樂 <small>こと</small>	二〇一ノ三
○定め	一八七ノ四	桃	四ノ六	○さるがひ	一六三ノ三
○「里は」	六七ノ九	柳	四ノ六	○猿澤の池 <small>采女</small>	四九ノ二〇
○里人		夕暮の花風	二〇四ノ二〇	○「さがしきもの」	二三九ノ七
白馬 <small>あをびま</small> 見 <small>み</small> にゆ <small>ゆ</small> く	二ノ五	○三四月 <small>紅梅のきぬ</small>	二二ノ八	○左衛門大夫	一九二ノ八
六位藏人	五八ノ七	○三十の期	一八七ノ二	○左衛門の陣	二ノ七
○佐野の船橋	六七ノ五	○三尺の几帳 <small>「几帳」を見よ</small>	七六ノ三	○同	九〇ノ五
○澤田川	六七ノ一	○参内	七六ノ三	○同	一五九ノ二
○雑色 <small>馬の口などす</small>	二九ノ一	○三條の宮	三〇ノ二	○從者	
○雑色		○三の御前 <small>(中宮の妹)</small>	二四六ノ二	客待して内を覗く	一九四ノ二
藏人 <small>なりたる</small>	二〇ノ二	○三味堂	一八ノ三	主思はぬ	二八五ノ八
同	二三ノ四	○三位中將 <small>(隆家)</small>	二五ノ二	主人の推し量らるる	二七ノ二
○佐保殿	二六二ノ二	○三位の中將	二三ノ二	主謗らぬ	七三ノ二
○三月		○狭山の池	四九ノ二	出世したる主に諂ふ	二〇三ノ五
急ぎ過ぎたる七夕	一八五ノ八	○更級山	一五ノ五	主に物いばせぬ	二七ノ二
三日	一三ノ二	○舍利 <small>の壺</small>	一七ノ五		
鳥	四ノ二〇	○猿樂 <small>こと</small>	一三〇ノ九		

主待ち詫ぶる	七三ノ二	〇飭摩 <small>しかま</small> の市	一六ノ二	〇職の御曹司	一八三ノ六
新参者	七ノ九	〇史記	二九四ノ八	〇式部丞 <small>しきぶのじやう</small>	
豎文を取りたる	二九〇ノ二〇	〇四季「季節」を見よ		御使	二四五ノ四
使用する者	二七ノ八	〇鳴	五四ノ三	爵	一七四ノ三
服装	六五ノ一	〇色彩		〇式部丞則理 <small>のりまさ</small>	二五九ノ二
よしあし	七三ノ七	藍と黄蘗と	七三ノ三	〇式部大夫	一九二ノ八
〇舅姑		黒きと白きと	七三ノ二	〇櫛	一四二ノ二
ありがたきもの	七三ノ二	花かへる	二〇六ノ四	〇時雨	二三八ノ五
住まぬ聾	二五ノ一	晝よりばえまさる	一六六ノ二	〇四月	
同	二五ノ八	紫	一〇三ノ九	賀茂祭	四ノ二
〇鹿		紫の指貫雪に映えたる	二二三ノ九	紅梅のきぬ	二二ノ八
かきまさりするもの	一三八ノ八	紫、雪にはゆ	一九九ノ一	空	五ノ一
聲	一三八ノ二〇	〇職の御曹司	六〇ノ八	晦日	四七ノ三
〇志賀(寺)	二〇八ノ三	〇同	一〇ノ二	長谷寺に詣づ	一三七ノ八
〇試樂	一六三ノ三	〇同	二二ノ四	杜鵑	五ノ二
〇しかすがの渡	一六〇ノ二〇	〇同	一七ノ二〇	〇淑景舍 <small>しげしや</small> (中宮の妹)	
〇志賀の浦	二〇八ノ一	〇同	一五五ノ五	御装束	二三八ノ二

車に乗る女房御覽	二五ノ一	〇下簾「車」を見よ		他の女をほむる	三〇ノ九
五節のかしづき	一〇五ノ六	〇「したりがほなるもの」	二〇三ノ八	〇疾病「病人」参照	
笙の御物語	一〇九ノ八	〇榻 <small>どし</small>		脚氣 <small>あしのけ</small>	二八四ノ七
春宮 <small>とうぐう</small> に参り給ふ事	二七ノ五	大路に立つ	二五ノ九	怠りたる知らせ	二九ノ一〇
〇重正	二五ノ二	檳榔毛の車	六六ノ三	齒痛	二八四ノ七
〇獅子	一〇三ノ六	〇七月		情人の見舞	二八五ノ一
〇同	二四三ノ三	雨	五七ノ七	修法	二三五ノ六
〇獅子(舞)	二四ノ九	有明	四五ノ五	讀經	二八五ノ四
〇仁壽殿	一〇七ノ七	風	五七ノ七	胸	二八四ノ七
〇侍従の君	二〇三ノ一〇	十五日、盆	二七ノ七	物食 <small>ものく</small> はぬ	二八四ノ七
〇侍従宰相	二三ノ三	相撲	一七八ノ九	物怪	二八四ノ七
〇熾盛光	二六九ノ九	月	四五ノ四	「やまひは」	二八四ノ六
〇史大夫	一九二ノ八	七日	一三ノ二	〇兒童「童」参照	
〇下 <small>した</small> 襲 <small>がさね</small>	一三五ノ五	闇	四五ノ五	悪戯	三〇ノ五
〇同	一四ノ二	夜	四五ノ四	遊 <small>あそ</small> ばする	三五ノ四
〇同	二六ノ二	〇嫉妬		抱かれて寝入りたる	一七五ノ二〇
〇「下襲は」	二六ノ二	恨み憶 <small>おぼ</small> ふる	一七八ノ二	覆盆子	五六ノ七

今やうの三歳子	二二〇ノ五	装束せさす	八ノ五	模倣	二七四ノ二
美しき	六五ノ一〇	すくばなし歩く	一七三ノ二	桃の木切る	一七二ノ一
美しき動作	一七五ノ五	生長	一三五ノ一	夜泣	五六ノ四
梅の買取る	一七二ノ七	稚兒の寝おびれ	一四三ノ八	同	二三四ノ五
嬰兒	二二ノ八	稚兒の物いふ	一六三ノ二	老人	五九ノ六
陰口を當人の前にて云ふ	一四九ノ一	稚兒の物語し笑ふ	一三三ノ二	例ならぬ人の前	二九三ノ六
かなしく慣はされたる	一七六ノ八	讀書	一七六ノ二	皇子	一〇三ノ一
祈禱する女	二二〇ノ五	泣き入る	一七四ノ一〇	童女	一〇四ノ三
草を携ふる	二二三ノ九	泣く兒	二九ノ四	同	二二五ノ九
藥玉	一〇四ノ四	同	七二ノ二	同	二四五ノ八
肥えたる	六四ノ二	にくげなる	一四ノ八	同	一三一ノ三
同	一七六ノ一	火取の童	一〇五ノ三	同	一六〇ノ一〇
五月節句の童女	五二ノ二	ふとりたる	一七四ノ六	同	二八七ノ九
心悪き人の養ひたる	二八五ノ二〇	瓜に書きたる顔	一七五ノ四	同	一三七ノ四
五節の童	一〇五ノ四	祭	五ノ五	同	一五ノ一〇
さし出	三〇ノ三	乳母	二四ノ八	同	五八ノ二
侍者	一四三ノ八	乳母の夫	三二ノ二	同	

大進 生昌	八ノ三	鹽竈(和琴)	二二〇ノ四	蟻通の明神	二三五ノ一
六位藏人	五八ノ九	鹽竈の浦	二〇八ノ一	嚴籬	二六二ノ三
忍の森	一三七ノ三	〇「島は」	二〇七ノ八	活田の社	二三四ノ二
〇しのぶ草	六八ノ八	〇自慢、自惚	二四ノ九	上の御社(賀茂)	一六六ノ六
〇芝	六九ノ七	才なき人の	二四ノ九	「神は」	二六二ノ八
〇咳	一七六ノ八	音も弾き整へぬ琴	二四ノ二	任 事の明神	二四ノ二
〇椎の木	五二ノ二	〇進士	七ノ八	杉の御社	二四ノ二
〇十月		〇神事「祭」参照		龍田の社	二四ノ二
蟋蟀	一三九ノ九	葵祭	六八ノ二	中の御社(稻荷)	一七九ノ九
庭園	二〇五ノ五	稻荷詣	一七九ノ九	はなふちの社	二三四ノ二
〇十二月		春日詣	一〇三ノ八	布留の社	二三四ノ二
御佛名	二七二ノ二	春日祭	一七八ノ八	美久理の社	二三四ノ二
晦日と正月一日との間	一九一ノ七	祭	一四五ノ九	「社は」	二三四ノ一〇
晦日のなが雨	二七ノ二	御禊	一四五ノ九	親族	二二六ノ八
晦日の楳	五三ノ八	臨時の祭(八幡)	一八二ノ六	愛憎	一九一ノ七
節折	一七八ノ六	〇神社「神」参照	一六三ノ二	思はぬ	二七四ノ五
〇「集は」	六九ノ四			談話	

○身體	あつげなる	一四六ノ二〇	○正月、新年	舍人	二ノ七
肥瘦	六四ノ三	○白馬 <small>あをむま</small>	主殿司	二ノ八	
目の大小	二六六ノ二	一日	七日	二ノ四	
○新中納言	一三三ノ二	同	同	一五二ノ三	
○寢殿	一一三ノ二	大根	女官	二ノ八	
○新年「正月」を見よ		霞	初瀬詣	一四三ノ二	
○しめぢ野	二〇九ノ六	薬子	望粥の節供	三ノ二	
○霜		車の音	八日	三ノ一	
板屋	二三八ノ五	九重	若菜	二ノ四	
いと白き	一ノ六	最初に噓ひたる	○上官	一五三ノ二〇	
鴨	五四ノ九	十五日	○同	一八四ノ六	
庭	二三八ノ五	十二月晦日と正月一日	○上臈	二九二ノ七	
鴛鴦	五四ノ八	里人	○釋迦	二〇八ノ二	
○下野	一九二ノ六	空	○笏	一四ノ四	
○同	二八二ノ二	内裏	○積善寺 <small>とくぜんじ</small> 一切經供養	二四三ノ八	
○しもつけの花	七〇ノ三	殿上人	○釋奠	一五二ノ九	
		寺籠	○修驗者		

苦しき生涯	六ノ四	難波わたりの遠からぬ	紅梅につく	一五三ノ二
こぼき物怪預りたる	一七九ノ一	見知る	紅梅の紙	二四九ノ九
こぼき物怪調じたる	二〇三ノ一	物書かまほしうする	五月節句	五ノ四
れぶり聲	二八ノ三	よく書く	親しき人文通を絶つ	二六八ノ四
病人	二七ノ三	○朱買臣が妻を教へけん年	情人の贈れる	一八二ノ八
物怪	二五ノ一	○壽命經	情人の書簡	一七五ノ二
○朱雀院	一七ノ二	○櫻欄の木	たて文	一五三ノ一
○出産		○承香殿	同	一六〇ノ八
遅るゝ	一八二ノ二	○勝負事	同	二九〇ノ一〇
祈禱	一四三ノ一	○書簡	豎文	二二七ノ八
兒の行末	一八二ノ三	雨の日	地方よりの文	二二三ノ二〇
後産の遅き	一八二ノ二〇	卯の花につけたる	取り違へたる	一一三ノ二
男か女か	一八二ノ六	艶書	蓮の花瓣に書きたる	二七二ノ二
○手跡		大きな木の白きにつ	火の光に讀む	二六九ノ五
悪筆	五七ノ二	けたる	藤につけたる	一〇七ノ二〇
老法師のいみじけなる	一六二ノ一	懷舊	返事	二三四ノ三
こまんと書きたる	二六九ノ二	後朝の書簡	松につけたる	九六ノ四

密書を見られたる	二二七〇七	○白川の關	一三六〇二	○すいせい君	二八二〇一
結び文	二六八〇三	○「しらべは」	二二〇〇〇	○菅原の院	一七〇二
無徳にいひなしたる	七九〇三	○白山の觀音	九四〇八	○透影	二〇〇〇三
めでたきもの	三三三〇〇	○しりうごと	二四三〇二	○杉立てる門	二六〇〇五
文字思ひ直したる	一一二〇二	○後口	二五三〇三	○「過ぎにし方の戀しきもの」	三五〇〇八
文言の無禮なる	三三〇七	○しりなが	二四二〇〇	○杉の御社	二三四〇二
柳につけたる	一〇四〇六	○白黒	七二〇二	○誦經	三三〇二
破り捨てたる文の續	三三九〇五	○しろい物	二〇〇〇七	○同	一四二〇四
雪の日	二六八〇二	○白き筥	一八二〇一	○宿世	一三二〇一
遠方の情人の贈れる	一八二〇二	○白くて著よ	九二〇八	○同	二五九〇二
○叙爵	一九二〇八	○四位	二〇四〇一	○主君	二五七〇三
かうぶりえて	一九二〇八	○四位少將	三三二〇五	○すけたと	三二〇三
六位藏人	一九二〇八	○四位	二〇四〇一	○雙六	三二〇三
○書籍	七四〇二	○四位少將	三三二〇五	一番に勝つ	一九二〇四
○白襲	二六二〇三	○蜘蛛の巢	一五二〇九	敵の賽きたる	一八二〇四
○白重の汗衫	五六〇六	野分の朝	二〇五〇七	采	一七二〇〇
○白樫	五三〇一	○透垣	二〇五〇七	つれづれ慰むるもの	一六三〇二

筒	一七二〇〇	子	二七三〇二	○蘇枋「染色、模様」を見よ	二六二〇三
盤	一七二〇〇	○同	一七五〇四	○蘇枋襲	四三二〇一
馬おりぬ	一六二〇二	○雀のこがひ	三五〇〇四	○昂星	二八二〇三
○朱砂	一七四〇四	○硯	二七〇二	○炭櫃	一九六〇七
○「すさまじきもの」	二二〇七	髪	二七〇二	烟たつ	一九六〇七
○珠數	二二〇一	心見ゆる	二二〇七	長炭櫃	一九八〇五
○同	五六〇六	墨つかぬ	三三〇八	同	二〇六〇二
○鈴鹿の關	一三六〇二	塵ばみたる	三三二〇六	火おこさぬ	二二〇〇九
○薄	一三六〇二	○すゝろに	二四三〇一	○修法	二六九〇八
「草の花は」	七〇〇九	○末濃「染色、模様」を見よ	二四三〇一	五大尊	二六九〇九
蜘蛛の巢	一五二〇九	○簾	一九二〇二	熾盛光	二六九〇九
○生絹	五〇〇八	伊豫簾	一九二〇二	佛眼眞言	一四八〇二
○生絹の單衣「單衣」を見よ	五〇〇八	鈎	二〇七〇一	病	二三五〇六
○鈴蟲	五六〇九	紫革	一九二〇二	○すまし	九八〇六
○雀	一七五〇五	帽額	二〇七〇一	○須磨の關	一三六〇二
親	一七五〇五	帽額の無くなりぬる	一九〇〇二	○相撲	一三六〇二
頭赤き	五四〇五	○簀子「燈火」	二〇七〇五		

言語	二二〇ノ三	大貳、四位	二〇三ノ二	蟹の住家	八七ノ七
負けて入るうしろ手	一四八ノ六	中將になる	二〇三ノ八	一條院の御褒詞	一〇一ノ二
〇炭		肥瘦	六四ノ二	同	一三三ノ七
頼に煎炭おこす	一八二ノ二	無禮なる	一一三ノ六	歌よまぬ事	一一三ノ四
冬	一ノ七	待ち／＼てなりたる	二〇三ノ五	袿姿	八五ノ七
〇墨		〇「受領は」	一九二ノ二	厭世	二四ノ三
石こもりたる	二七ノ三	〇駿河前司	二八ノ九	行成との問答	六〇ノ二
大なる	二六ノ二	〇駿河舞	二〇ノ四	行成餅餠を贈る	一五三ノ二
すりひらめかしたる	二三ノ六	〇榎欄の木	五三ノ二	高名のふねたきの事	二六ノ三
〇すみよし(物語)	二〇九ノ二	〇随求經	二〇八ノ六	香爐峰の雪	二七〇ノ八
〇すみれ	七〇ノ三	〇水晶の珠數	五六ノ六	虚言の條	二〇一ノ七
〇誦文	三〇ノ二	〇水精の珠數	二五三ノ三	清水に籠る	二七二ノ七
〇修理	一九三ノ六	〇水龍(横笛)	一一〇ノ四	草の庵の條	七九ノ六
〇受領		〇末の松山	一五ノ四	海月の骨の條	一一五ノ二
和泉	一九二ノ四			結縁入講の聽聞	四〇ノ二
紀伊守	一九二ノ四			五千人の中	四四ノ八
五節	二三ノ五			この君	一五八ノ二〇

伊周に話しかけらる	一九九ノ二	内侍にとの評定	一三四ノ九	夜をこめての歌	一五六ノ二
最終の車に乗る	二四九ノ四	中なるをとめの條	九〇ノ五	〇清僧都	二五八ノ四
造花に春風	二四七ノ二	睡きを念じて侍ふ	二七八ノ二〇	〇清範	四四ノ一
實方と和歌應酬	一〇六ノ二	宣方に戯る	一八九ノ九	〇同	一五五ノ六
下敷の事	一二二ノ三	始めての宮仕	一九七ノ二	〇同	三三ノ六
積善寺行啓の供奉	二五五ノ一	花散りたる梅の條	一三三ノ六	〇姓名	二六四ノ六
すこし春あるの條	一三三ノ二〇	藤原時柄	一二六ノ三	〇清涼殿	一七三ノ三
せんぞくれう	一二五ノ九	筆紙疊に心慰む	二四二ノ二	〇同	二一七ノ七
第一の人と思はれん	二二四ノ五	杜鵑を尋ぬ	一一六ノ八	〇同	二七二ノ四
大進生昌との問答	七ノ五	枕草紙著作の趣旨	二九四ノ四	〇少將(深草少將)	二七二ノ四
齊信と契らざる條	一五五ノ二	三笠山の條	三〇一ノ一	〇少將(舞人)	一六六ノ五
齊信との應對	八四ノ二	道隆との問答	二四八ノ二	〇少將の井	一九二ノ一
齊信の朗詠を譽む	二八七ノ六	道隆に褒めらる	一五四ノ五	〇消息	四二ノ五
中宮の御里居に伺候	一六九ノ二〇	道長方と疑はる	一六八ノ六	〇消息	二四五ノ三
中宮の御姿を評す	一一〇ノ七	物忌に行く	二七二ノ四	内裏より中宮へ	二七二ノ二
地獄繪	七八ノ二〇	雪山	九四ノ二	宰相の君より清少へ	二七二ノ二
經房に思はる	一五八ノ五	よどのの歌の條	二八〇ノ二	齋院より中宮へ	九六ノ五

清少より宰相の君へ	二七二ノ四	○「せちば」	五〇ノ三	○前裁「庭園」を見よ	二五ノ二
清少より中宮へ	二七二ノ三	○節會	一五ノ二	○前司	二〇八ノ二
中宮より清少へ	二〇二ノ一	雨	一七八ノ九	○千手	二〇八ノ六
同	二〇二ノ一	采女	一五ノ二	○千手經	二〇八ノ六
同	二七二ノ九	御物忌	一五ノ二	○千手陀羅尼	二〇八ノ六
東宮より淑景舎へ	一三二ノ四	○説經	二二八ノ三	○せんぞくれう	一三五ノ二
頭中將より清少へ	八〇ノ五	○節句	五〇ノ八	○「せめておそろしきもの」	二三五ノ二
女院より一條院へ	一四九ノ六	五月	五〇ノ四	○芹つみし	三二ノ二
女院より中宮へ	二五九ノ五	九月	一三ノ二		
宣方より清少へ	一八八ノ二	五節句	五〇ノ三		
八講の日義懷中納言より物		「せちば」	一九六ノ四		
見車へ	四三ノ四	○雪月花	二九ノ二		
○清和院	一七二ノ二	○節分	二九ノ六		
○「關は」	一三六ノ二〇	○背縫	一九九ノ六		
○節供	三ノ二	○宣耀殿	二〇ノ七		
○同	五〇ノ一〇	○宣耀殿の女御	一四六ノ七		
○勢多の橋	六七ノ六	○前駈			

御佛名初夜の御導師	二七二ノ二	長者	五ノ八	夜居の僧	一四七ノ一
供奉	二〇四ノ五	地位の高下	二〇四ノ五	老僧の行	一四〇ノ二
言語	五ノ三	讀經	一〇三ノ四	老尼	九ノ五
木のほし	六ノ二	同	一七八ノ七	律師	二二ノ七
小法師	一四三ノ四	讀經に熟せる	一七九ノ七	威儀師	一七八ノ六
十二年の山籠	七ノ九	内供	二二ノ七	女	六ノ三
同	一三五ノ一	坊	一四三ノ九	女に侮らる	二〇四ノ六
修行者	一四四ノ二	聖僧の學勳	三〇ノ一	女に目を配る	二八五ノ五
僧綱	一六二ノ二	病中の修法	二三五ノ六	○蘇香の急	二〇二ノ一
同	二五八ノ七	評判よき	二九二ノ二	○俗謡「和歌、俗謡」を見よ	二四一九
僧正	二〇四ノ七	服裝	一四〇ノ七	○息災のいのり	二四一九
僧都	一四ノ七	法師子	一七四ノ六	○續飯	一八二ノ二
同	二〇四ノ六	法師のさえある	一〇三ノ三	○足下	二八七ノ三
大行道	二五八ノ三	佛の出現とも見ゆる	二九二ノ二	○素盞鳴尊	五ノ三
大なる	二二六ノ二	眞の世捨人	一八二ノ四	○袖几帳	八二ノ二
堂童子	二四二ノ二	物怪調する	二九二ノ一	○そとの濱	二〇七ノ一
持經者	一〇三ノ三	容貌	三七ノ七	○その原	一五ノ一

○そばの木	五ノ二〇	薄色	一六七ノ一〇	香染	四五ノ九
○尊勝陀羅尼	二〇八ノ六	同	二五三ノ三	同	四六ノ一
○染色、模様		同	二五三ノ四	唐衣	二四四ノ七
淺黄	七〇ノ二	薄紅梅	一九七ノ七	同	二八三ノ二
淺綠	二〇三ノ一	薄墨	二五三ノ三	朽葉	二〇五ノ二
同	二七二ノ〇	薄にび	八五ノ九	紅	一六〇ノ二
青色	四七ノ二	同	一八四ノ一	同	四六ノ一
同	七五ノ五	薄二藍	三八ノ三	同	五八ノ四
同	一〇五ノ四	薄二藍	三五ノ九	同	一一〇ノ九
同	二六七ノ九	薄二藍	八五ノ一	同	二二八ノ五
青末濃	二九ノ二	同	一〇三ノ八	同	一一九ノ二
同	二五三ノ一〇	同	一九〇ノ二	同	一一九ノ五
青鈍	一四ノ三	同	二五三ノ二	同	一三三ノ六
同	二二八ノ三	同	二五三ノ二	同	一八四ノ一
同	二四四ノ五	同	二五八ノ八	同	二四四ノ六
薄色	五六ノ六	同	二七三ノ八	同	二四四ノ七
同	一一九ノ二	香	四一ノ七	紅梅の濃きうすき	二八七ノ九

紫苑	二八四ノ二	村濃	一八ノ六	九月三十日、十月一日のほど	二〇五ノ三
末濃	五ノ四	紫	一七ノ八	五月五日	一三ノ二
同	六五ノ四	同	一九九ノ一	同	五〇ノ六
蘇枋	四一ノ七	同	二六〇ノ七	三月三日	一三ノ二
同	四三ノ二	同	二八ノ五	四月	五ノ一
同	一三八ノ二	同	一三九ノ二	七月七日	一三ノ二
二藍	五ノ三	同	二九ノ二	正月	二ノ二
同	三五ノ九	同	一三九ノ八	正月一日	一三ノ二
同	四〇ノ二	同	一三ノ一〇	夕	
同	四一ノ七	同	一四ノ二	○田一穗に出でたる	二三四ノ六
同	四五ノ二	同	二六〇ノ七	○對	八ノ二
同	二六〇ノ七	同	二六七ノ一〇	○同	一三ノ三
同	二六二ノ三	同	二八七ノ九	○同	二五ノ二〇
同	五ノ五	同	二八三ノ二	○同	二八ノ八
同	五〇ノ二	同	一七ノ二	○大變	
同	二四ノ六	同			
同	一〇八ノ一	同			

甘栗使 <small>あまぐりのつかひ</small>	二〇ノ三	大夫の君	二〇ノ二〇	瀧口	六三ノ二
史生	一七八ノ九	〇「大夫は」	一九ノ七	〇「瀧は」	六六ノ七
所のあゆみ	一七八ノ八	〇太平樂(舞)	二〇ノ四	〇薰物「香」参照	
〇大將「警蹕」	二六九ノ八	〇道心すゝむる松が枝(物語)	二〇九ノ三	香のかゝへたる	六六ノ二
〇大床子	一〇三ノ六	〇道命阿闍梨	二七七ノ七	煙の残りたる	二六ノ六
〇大臣	二〇三ノ二	〇隆家「扇を奉る	一一五ノ二	一人臥したる	三五ノ四
〇大進生昌	六ノ九	〇高砂(笛の曲)	三ノ二〇	〇柁繩 <small>たくなは</small>	二七六ノ二
家の門	七ノ五	〇高瀬	六九ノ七	〇工匠「物食ふ有様」	二八七ノ二
門の大小	八ノ三	〇高瀬の淀	一三七ノ二〇	〇巧 <small>たくみどり</small> 鳥	五四ノ五
忍び	九ノ二〇	〇高杯 <small>たかつち</small>	一九七ノ四	〇腰輿 <small>たこし</small>	二二三ノ二〇
物聞ゆる	二〇三ノ二	おほと油	九ノ七	〇太政官の地	一八四ノ二〇
〇大納言	一五九ノ八	ちうせい高杯	三ノ九	〇疊紙	四六ノ六
〇大納言「伊周」を見よ	二〇四ノ一	〇高遠の大貳	一五九ノ二〇	〇同	一八八ノ二
〇大貳	一三ノ六	〇竹原 <small>たかはら</small>	六四ノ一	〇たゞ、こえの關	一三六ノ二
〇臺盤所	九八ノ二	〇たかひざまづき	一三九ノ五	〇「たゞすぎにすぐるもの」	二二三ノ五
〇同	一九二ノ七	〇隆光	二一ノ三	〇たゞの人の子	一〇一ノ二〇
〇大夫		〇瀧口		〇齊信(頭中將、宰相中將、左中將)	

宜陽殿の一の棚に	二一〇ノ六	〇太刀	二〇ノ八	〇七夕祭	一八五ノ二
宰相になる	一八六ノ三	鑄太刀 <small>かぎりたま</small>	二二ノ四	〇谷の洞	一七七ノ五
秀句を誦す	一五九ノ八	鞘	一〇七ノ九	〇たのめの里	六七ノ二〇
清少と契らんとす	一五六ノ一	細太刀	一三七ノ五	〇「たのもしきもの」	二三五ノ五
清少を訪る	八四ノ二	〇立聞の森	四八ノ一	〇「たのもしげなきもの」	一九一ノ二
清少を誘る	七九ノ六	〇同	五ノ二〇	〇たはれ島	二〇七ノ九
宣旨の御使	一四九ノ九	〇龍田の社	三四ノ二一	〇たびしかはら	二二ノ一
中宮御里居の有様を語る	一六七ノ七	〇辰の市	一六ノ一	〇「たふときもの」	二六〇ノ二
「人間四月」の條	一八五ノ二	〇楯 <small>たて</small>	五九ノ三	〇玉坂山	一五ノ四
蘭省の詩	八〇ノ五	〇立 <small>たて</small> 菰	二ノ八	〇玉造の湯	一三八ノ二
〇疊		〇同	二〇五ノ七	〇玉の井	一九二ノ一
出雲筵	一七四ノ六	〇同	二八八ノ二〇	〇玉淵	一六ノ六
經綯縁	一九〇ノ九	〇「たとしへなきもの」	七二ノ一	〇玉星川	六七ノ一
高麗縁の疊の筵	二四二ノ六	〇たと島	二七〇ノ九	〇手向山	一五ノ四
御座	二四二ノ九	〇棚厨子	二七ノ六	〇彈正	二八四ノ四
長ざまに縁をして	二五九ノ三	〇棚橋	六七ノ七	〇短 <small>たん</small> 策 <small>はやく</small>	二八〇ノ二

○談話、物語	いひ募る	一四七〇四	御祓の爲に官の廳に御座します	一八三〇六
貴人の對手	さし出	二二九〇七	思ふやと問はせ給ふ	二〇一〇七
世間話	つれづれなぐさむ	三〇〇〇二	車に乗る女房御覽	二五二〇二
宮仕人	雪の夜	一六三〇二	五節出ださせ給ふ	一〇五〇五
○「たゆまるゝもの」	○「陀羅尼は」	二七四〇五	小二條の御里居	一六七〇五
○「垂水―水晶の莖」	○中宮定子	一九五〇四	御服装	二五五〇二
	扇を給ふ	二七〇〇四	御容姿	一九七〇六
	否かへじの筈	二〇九〇八	御容貌	一九九〇五
	御裝束	二七三〇五	三條の宮に座します	二五六〇六
		二二八〇三	積善寺行啓	三〇〇〇二
			清少に御文を賜ふ	二四九〇三
			清少に紙を賜ふ	一六八〇〇
			清少に疊を賜ふ	二四一〇〇
			清少を愛し給ふ	二四二〇七
			同	一九七〇三
			同	二五六〇二
			○中間に	二五九〇二
			○中將―蟻通明神	八八〇〇四
			○ちうせい高杯	二五五〇四
			○ちうせい折敷	九〇七
			○中少將	二二二〇一
			○中納言	二〇三〇一
			○中納言殿―「隆家」を見よ	二〇三〇二
			清少を試み給ふ	二四〇〇五
			大進生昌の家に臨み給ふ	六〇九
			寺籠せる清少を召す	二七二〇七
			女房の局に臨み給ふ	六三〇〇四
			琵琶を持たせ給ふ	二〇〇〇九
			法興院行啓	二四三〇八
			道隆のために佛事を修し給ふ	一五五〇五
			物忌中の清少を召す	二七二〇八
			我をばいかゞ見る	二五六〇二

○中納言の君	二二二〇六	○除目	一の國得たる人	二〇三〇一〇
○同	二二六〇九	宮中	第一の國得たる人	四〇〇一
○中盤	二二七〇六	知人のなるべき折	知人のなるべき折	一八二〇七
○「近くて遠きもの」	一九二〇六	官得ぬ人	官得ぬ人	二五〇〇五
○地下	二二九〇三	官得ぬ人の家	官得ぬ人の家	一六二〇二
○同	二二九〇三	中の夜	中の夜	一三六〇四
○地藏	二〇八〇三	申文	申文	四〇〇一
○地摺袴	二〇七〇二	○貞觀殿	貞觀殿	二二九〇六
○地摺	一九〇〇二	○ちやうざ	ちやうざ	五〇〇八
○知足院	二二二〇五	○帳臺の夜	帳臺の夜	一〇八〇八
○父―蓑蟲	五五〇二	○定澄僧都	定澄僧都	二八二〇一
○千貫の井	一九二〇二	○定本	定本	二六二〇一〇
○小さきもの	一七五〇二	○枝扇	枝扇	二四〇〇七
○陣	六二〇〇六	○同	同	二二二〇一
○同	一八八〇五	○女子の教育	女子の教育	二〇三〇九
○沈の御火桶	一九八〇六	○重食	重食	三六〇〇三
		○衝重	衝重	一六四〇三
		○衝立障子	衝立障子	二二七〇五
		○築地の板	築地の板	一五四〇七
		○築土のくづれ	築土のくづれ	二七〇〇八
		○召	召	八二〇〇七
		○同	同	八二〇〇七
		○月	月	八二〇〇六
		○同	同	二六六〇七
		明きに通ひ來る人	明きに通ひ來る人	二三八〇二〇
		有明	有明	二八八〇八
		同	同	一四〇〇三
		荒れたる家	荒れたる家	二二九〇三
		薄雲	薄雲	五七〇二二
		車	車	五七〇二二

車にて川を渡る	二六ノ八	○つきはな	一七三ノ二	○つば装束	二九三ノ七
懷舊	三五ノ二	○月まつ女(物語)	二〇九ノ二	○壺坂	二〇八ノ三
下衆の家	五七ノ三	○作物所	一七二ノ一	○壺董	六九ノ七
月光に文を見る	二六八ノ一	○作佛	一〇一ノ八	○同	七〇ノ三
こまの物語	二六八ノ二	○土塊	一七二ノ五	○局主人	一九八ノ二
笙の笛	二二一ノ六	○土御門(町)	一九九ノ五	○局する	一四〇ノ六
七月	四四ノ四	○同(門)	一九九ノ二	○壺胡籬	六六ノ五
七月七日	一三三ノ二	○躑躅(下襲)	二六二ノ三	○つまとりの里	六七ノ二
車中の装束	二七三ノ七	○經房	七九ノ一	○罪	三二一ノ二
追想	二六六ノ二〇	笙の笛	一五八ノ五	齋院	三七ノ九
夏	一ノ二	清少を悦ばす	一三八ノ三	罪はえがたの詞	四六ノ五
二六七日の月	一四〇ノ一	○常よりこにきこゆるもの	一六ノ一	○露	三九ノ二〇
空車	五九ノ五	○椿市	六八ノ二〇	あはれと思ふ	二〇八ノ二
物見	二二一ノ五	○茅花	三九ノ二	○庭の淺茅	一三五ノ一
雪	二七三ノ四	○つば装束	一八〇ノ二	○頰杖	二〇八ノ二
○鴨頭草	一七二ノ二〇	○同		○貫之	三三ノ一
○「月は」	二八ノ九			○鶴	

かきまさりするもの	一八ノ八	木立焼けたる	一九〇ノ二	雛あそびの	三五ノ九
めでたきもの	五ノ四	十月頃	二〇五ノ五	雛の	一七五ノ二
○椽のかさ	一七三ノ六	前栽	三三八ノ五	○てうげみ	一一五ノ七
○「つれづれ」なるもの	一六三ノ一	同	三三ノ七	○手結	二七ノ四
○「つれづれ」なるもの	二〇三ノ二	廢園の月	二〇六ノ六	○手長足長	一七ノ四
○追従	二〇三ノ七	れたきもの	一四〇ノ三	○手ならひ	一〇四ノ六
テ		笹	一三三ノ三	○蝶	五九ノ九
○手火桶	二八ノ四	架垣	三二ノ八	○殿上	二五三ノ二
○貞操	一八七ノ四	雪のふりしきたる	一八三ノ二〇	○殿上のがうし	二三五ノ一
○庭園	二〇五ノ七	女獨棲む家	二〇三ノ二〇	○殿上のなだいめん	六三ノ七
秋		○調	一九三ノ三	○殿上のまじらひ	二八ノ八
秋深き	一三九ノ二〇	○銚子	二〇一ノ〇	○殿上人	二八ノ八
池	一九〇ノ三	○手水	二二七ノ六	正月	二ノ七
雨後の秋の朝	一五二ノ八	○調度	二九〇ノ五	官	三三ノ五
萱草を植ふたる	一八三ノ二〇	負ふ	二五七ノ八	名	三三ノ二
木立	六三ノ二〇	にくげなる	三三九ノ一	御湯殿より下り來る	三三ノ一
				○殿上童	

車にのせたる	二四ノ四	長谷寺	一三ノ八	○童謡「和歌、俗謡」を見よ	二二ノ二
裝束たてられて歩く	一七五ノ九	普門寺	二七ノ二〇	○春宮の御母女御	二二ノ二
○殿上童(人形)	一九六ノ二	法興院	二四三ノ八	○東宮權大夫	二二ノ二
○轉生	一三ノ九	山階寺	一四ノ八	○春宮亮	二二ノ二
○天にはり弓	一七〇ノ二	雪に籠る	二四〇ノ五	○春宮大夫	二二ノ二
○天人	一八四ノ二	○寺籠	一四ノ九	○登華殿	二二ノ二
○同	二〇一ノ四	花盛	一四ノ九	○同	一五〇ノ二〇
○寺	二〇一ノ四	人を誘ふ	一四ノ三	○東三條	二七ノ三
雨	一四〇ノ五	○「寺は」	二〇八ノ二	○藤三位	一六〇ノ七
雲林院	二二三ノ四	○寺詣	一四五ノ二	○藤侍從	二〇〇ノ六
清水	二二九ノ八	雨	二八五ノ八	○燈臺	八ノ五
同	二七二ノ七	同	二八五ノ八	○同	一〇九ノ二
こもりたる	二七ノ五	○「出居の少將	一四六ノ二〇	○同	一三六ノ五
積善寺	二四三ノ八	○行粧を人の見ゆ	二二六ノ四	○藤大納言	二七ノ三
知足院	二二三ノ四	○筒	二二五ノ七	○頭中將	一六二ノ四
仁和寺	一六二ノ三	ト		○頭中將「齊信」を見よ	二二ノ五
長谷寺	一六〇ノ一				

○頭辨	二二ノ四	誦經	三三ノ二	○「とくゆかしきもの」	一八ノ五
○同	二二三ノ五	同	一四三ノ四	○獨鈷	二五ノ一
○頭辨「行成」を見よ		千手陀羅尼經	二九ノ三	○同	二九ノ六
○とうぬん	一七二ノ二	その寺の佛經	一四ノ一	○鳥籠の山	一五ノ一
○時		はるかなるもの	二二五ノ一	○所の衆	
時奏する	二六三ノ七	不斷經	二九ノ五	青色白襲	二二ノ二
弦うちす	二六三ノ八	不斷の御讀經	一九ノ二	御裝束	一七八ノ八
時の机	二六三ノ九	目をくばりつゝ讀む	二八四ノ四	藏人になりたる	一〇一ノ二〇
時づかさ	一八三ノ二	やすらかに讀む	二七九ノ七	試樂の日	一六四ノ三
○時の人	一四六ノ一	夕暮	二〇九ノ六	○刀自	一六二ノ四
○常磐木	五三ノ二	○「讀經は」	二〇九ノ二〇	○俊賢の中將	一三四ノ九
○常磐の森	一三七ノ五	○徳		○轟の橋	六七ノ六
○讀經		御徳を見る	二二〇ノ二	○舍人	
數多が中にて	一〇三ノ四	徳見る事	二八八ノ八	春日祭	一七八ノ八
季の御讀經	一七八ノ六	○木賊	六八ノ一〇	化粧	二二ノ一〇
同	二六九ノ九	○讀書—兒童	一七六ノ二	言語	二二〇ノ三
孔雀經の御讀經	二六九ノ八	○得選	二四九ノ二〇	正月	二二ノ七

○殿うつり(物語)	二〇九ノ二	○宿直所	一八九ノ八	川千鳥	五四ノ八
○主殿司	一五二ノ二	○宿直物	六二ノ五	鴨	五四ノ九
行成の使	一〇七ノ二	○同	一三五ノ六	烏 <small>「烏」を見よ</small>	
五節	五九ノ七	○同	二〇六ノ四	雁 <small>「雁」を見よ</small>	
下女	二ノ八	○同	二五九ノ九	水鷄	五四ノ二
正月	五九ノ七	○鷹	五九ノ七	聲	一三八ノ四
装束	五九ノ二〇	○飛火野	二〇九ノ六	鷺	五四ノ四
齊信の使	一三三ノ二	○「遠くて近きもの」	一九一ノ九	三月	四ノ一〇
文の使	一八六ノ四	○とみのを	二二六ノ三	雀 <small>「雀」を見よ</small>	
○主殿亮	一三九ノ五	○ともあきらのおほきみ(人形)	一九六ノ三	巧鳥	五四ノ五
○主殿の女官	二四七ノ五	○轆岡	三三ノ九	鷓 <small>「鷓」を見よ</small>	五五ノ七
○宿直衣	九六ノ四	○豊浦の島	二〇七ノ九	鷓 <small>「鷓」を見よ</small>	五五ノ七
○宿直姿	一〇三ノ一〇	○鳥	二〇七ノ九	容鳥	五四ノ七
○同	二〇五ノ四	○鶺鴒	五四ノ二	火燒	五四ノ三
○同	二二三ノ八	○班鳩	五四ノ二	鴉	五四ノ三
○同	二八七ノ九	○鶺鴒 <small>「鶺鴒」を見よ</small>	五四ノ五	杜鵑 <small>「杜鵑」を見よ</small>	五四ノ三
○宿直所	八一ノ六				

みこ鳥	五四ノ三	○掌侍	二二ノ九	○長押	一八ノ三
水鳥	五四ノ七	○内侍のすけ	二二ノ四	○同	二五五ノ一〇
都鳥	五四ノ八	○典侍	二二ノ九	○勿來の關	一三ノ一
山鳥	五四ノ三	○内膳	一〇三ノ七	○梨	六九ノ七
鶺鴒 <small>「鶺鴒」を見よ</small>		○ないりその淵	一六ノ四	○梨の花	四八ノ四
○「とりどころなきもの」	一六三ノ五	○「名おそろしきもの」	一七ノ四	○奈志原	一五ノ一〇
○鷓の聲に催されて	一五七ノ二	○長炭櫃	二〇六ノ二	○梨原	二三四ノ六
○鳥の舞	二二〇ノ五	火光	一九八ノ五	○謎々合	一七〇ノ二
○「鳥は」	五四ノ一	火おこして	八六ノ六	○なだいめん	六三ノ八
○「とりもてるもの」	七六ノ八	○仲忠が事	二〇七ノ二	○名高の浦	二〇八ノ一
○十市の里	六七ノ二	○長濱	二〇七ノ二	○那智の瀧	六六ノ八
		○長櫃	一一三ノ四	○夏	
ナ		○ながめの里	六七ノ一〇	銅の鍛冶	一四六ノ二
○名	二六四ノ六	○長柄の橋	六七ノ五	雨	一ノ二
○「ないがしろなるもの」	三三九ノ三	○長井の里	六七ノ二	池の蓮	四〇ノ二
○内供	二二二ノ七	○長烏帽子	二九ノ六	鶺鴒	五五ノ二
○内侍—右近内侍	一三三ノ二	○なきの花の御輿	二六ノ九	牛の鞞の香	二二六ノ一

羅 かきまさりするもの	二八三ノ二	晝寝	二九三ノ二	〇七久里の湯	一三八ノ二
汗衫	一三八ノ八	服装	四〇ノ二	〇難波津	一八ノ二
唐衣	二八三ノ六	餐	一ノ二	〇なのりその川	六七ノ一
車	二八三ノ二	短夜の戀	七三ノ六	〇繩籠	一七三ノ七
下種女の子貢ひたる	一四六ノ四	關	一ノ二	〇衲の袈裟	一四六ノ一〇
指貫	一四六ノ五	夕かた草もつ兒	二二三ノ九	〇なほき木を折る	四三ノ五
淨水	二六〇ノ六	夕涼	二五ノ二〇	〇直衣	四ノ九
下襲	二二五ノ四	〇薺 <small>なづな</small> 夜	一ノ二	櫻の直衣	四ノ九
疾病	二六二ノ三	〇夏 <small>なつ</small> の几帳	六八ノ二	同	一七ノ八
装束	二八四ノ二〇	〇夏蟲	一〇四ノ五	同	八四ノ二二
修法の阿闍梨	二八三ノ二	〇藜	五七ノ四	同	一三三ノ六
月	一四六ノ二	〇粟	六九ノ八	二藍の直衣	二四四ノ六
月夜の川	一ノ二	〇盟麥	一七六ノ五	同	四〇ノ二
夏と冬と	二六ノ八	うつくしきもの	一七六ノ五	同	四一ノ七
久しく湯浴みぬ	七三ノ二	草の花は	六八ノ二〇	〇「なほ世にめでたきもの」	二二四ノ二
晝寝	一七三ノ二	繪にかきて劣るもの	一三八ノ六	〇なまげしからぬ	一六三ノ二
	五七ノ八	〇名取川	六七ノ二		二七四ノ二

〇「なまめかしきもの」	一〇四ノ二	〇二月一定考 <small>かうちやう</small>	一五三ノ九	〇如意輪 <small>にようくわん</small>	二〇八ノ二
〇涙	二七六ノ八	〇「にげなきもの」	五七ノ二〇	〇女 <small>にようくわん</small> 官	
〇蜘蛛 <small>なめくぢ</small>	一四九ノ三	〇西の京	八七ノ二	采女の服装	二五三ノ二〇
〇ならしげ	二五五ノ一	〇西の對	一三三ノ二	髪あげたる姿	二五〇ノ一
〇業遠朝臣—牛飼	六八ノ二	〇二條	一七ノ二	正月	二ノ八
〇成信	二八九ノ七	〇二條の宮—「法興院」を見よ		まゐる	一九七ノ二〇
一條院の廂を叩く	二六四ノ二	〇庭—「庭園」を見よ		〇女御	一〇三ノ二
伊豫守兼輔が女	二六四ノ二	〇鶏	二七九ノ四	〇女御(官耀殿)	二〇ノ七
聲を聞き知る	二二九ノ九	隠し置きたる	二七九ノ四	〇女御(弘徽殿)	一八九ノ五
〇業平	六七ノ三	子	一三九ノ二〇	〇女房	二二二ノ二
〇業平の母—歌	二七六ノ二	〇庭燎 <small>ていは</small>	一七六ノ三	御乳母になりたる	二二二ノ二
〇濟政 <small>なりまさ</small>	七九ノ一	〇人形(殿上童)	一六六ノ二	假粧	二五二ノ七
二		〇人間—「人」を見よ	七六ノ七	從者	二五二ノ一
〇にえの池	四九ノ五	〇人 <small>にんぢやう</small> 長	一六五ノ三	得選 <small>とのもり</small>	二四九ノ二〇
〇「にくきもの」	二七ノ九	〇同	一六二ノ三	主殿の女官	二四七ノ五
		〇仁和寺の僧正	一六二ノ三	御手水番の采女	二九ノ二
				〇女房の局	三三ノ四

○女院(東三條院)	一〇五ノ六	○布障子	一九ノ二	○野	二八ノ九
○同	一四九ノ六	○布屏風	一七四ノ三	○秋	二四〇ノ二
○同	二四三ノ九	新しき	一七四ノ四	○野口の驛	二四三ノ六
○同	二五二ノ二	繪畫	五〇七	○のけくび	二九三ノ六
又		○縫殿	二七六ノ一	○のしひとへ	二九四ノ二
○ぬかつき	七〇ノ五	○繡物	二六八ノ一	○のぞきの淵	一六ノ六
○叩頭蟲	五七ノ一	○塗籠	二六八ノ八	○後瀬山	一五ノ一
○貫川	六七ノ一	○猫		○後のあした	二五七ノ一
○ぬす人	八二ノ二	○木		○「野は」	二〇九ノ五
○盗人		碓の緒引きたる	一〇四ノ二		
強盗	一七〇ノ七	毛色	三〇ノ六		
沉隣に入りたる	二三五ノ三	耳のうち	一六ノ二		
警戒	一九四ノ二	命婦のおもと	一〇七		
花盗人	二四七ノ三	○鼠			
密盗人	一四七ノ一	子	二七六ノ一		
我家に入りたる	二三五ノ三	住處	一七三ノ二		

○信賢—御嶽詣	二三ノ九	○博士	使ふ人の我を褒めぬ	一四二ノ三
○宣方の中將		女子	二五ノ九	
左京か思ふ	一八九ノ六	博士のさえあるは	一〇三ノ二	
清少を恨む	一八九ノ二	申文	二八ノ九	
齊信の朗詠をまれば	一八七ノ〇	文章博士	一七〇ノ〇	
「露は別の涙」の條	一八五ノ〇	○齒固	五三ノ八	
「人間四月」の條	一八五ノ二	○袴	一五四ノ二	
○信經—せんぞくれう	二五ノ九	○同	二〇六ノ五	
○蚤	三ノ一	朝露	七ノ一	
○則光	八ノ六	雨後	一五ノ二	
蚤の住處	八七ノ二	野分の朝	二〇五ノ八	
秀句のよろこび	八二ノ七	○萩原	一五ノ〇	
○乗物—「車」参照		○白衣	二二ノ二	
綱代	三ノ〇	○齒黒	五ノ三	
腰輿	二二ノ〇	○容鳥	五四ノ七	
慈花の御輿	二六ノ九			
横椰毛	三六ノ九			
		横椰毛の車	六ノ二	
		同	六ノ二	
		御輿—「御輿」を見よ	六ノ九	
		○賭弓	二五ノ九	
		○呪ふ	一七三ノ二	
		ハ		
		○齒—齒痛	二八四ノ九	
		○拜謝	一四ノ四	
		○同	二五ノ四	
		○牛靴	一七三ノ二	
		○同	一四〇ノ三	
		○はうたう	二九ノ六	
		○褒貶		
		歌を褒めらるゝ	二九ノ三	
		思ふ人の褒めらるゝ	二九ノ二	
		下種の褒貶	二七八ノ六	

○「はしたなきもの」	一四八ノ三	雨風	二〇四ノ二〇
○半蒨	八四ノ二	白麩	二七ノ三
○「橋は」	六七ノ四	養蟲	五六ノ三
○はしりくらべ	一〇三ノ二	○八講	
○はしり火	三九ノ八	朝座	四ノ一
○走井	一九ノ三	小白川	四ノ七
○蓮		普門寺	二七ノ二〇
一切經を入れたる	二五八ノ二〇	菩提寺	四〇ノ二
うき葉	六八ノ三	六月	二六ノ二
同	一七五ノ二	○恥しき人	
はなびらに歌を書く	四〇ノ三	歌の本末問ふ	二四〇ノ四
村雨にあひたる	六八ノ七	物おこせたる返事	二八七ノ七
○長谷寺	一六ノ一	○「はづかしきもの」	
○鱧板	一七五ノ五	○初瀬	二四六ノ二
○促織	五六ノ九	○同	四九ノ五
○蜂の巢	一八四ノ九	○初瀬詣	二八六ノ九
		○同	一四〇ノ六
		○同	一四四ノ七

澤鴻	六八ノ三	蕪	六九ノ七
杜若	一〇三ノ九	蕪	二四四ノ二
酢漿	六八ノ四	造花	二四六ノ八
雁来紅	七〇ノ二	造花の雨	二四六ノ二
唐葵	七〇ノ三	造花を引倒す	二四六ノ二
刈萱	六九ノ二	薔薇	七ノ五
桔梗	六九ノ二〇	葛蒲	七ノ五
菊		葛蒲	七ノ五
「菊」を見よ		櫻	
「木の花は」	四七ノ七	「櫻」を見よ	六九ノ七
桐	四八ノ二〇	征	六八ノ八
「草の花は」	六九ノ九	しのぶ草	六九ノ七
葛		芝	六九ノ七
「葛」を見よ		しもつけの花	七〇ノ三
紅梅	四七ノ八	薄	
苔	六八ノ四	「薄」を見よ	一〇三ノ九
木蠟	六八ノ四	すべて紫なるは	七〇ノ三
ことなし草	六八ノ七	すみれ	七〇ノ三
		橋	
		「橋」を見よ	一七ノ二〇
		鴨頭草	

○拔頭(舞)	二〇ノ五	○花(草を含む)	
檜	六九ノ八	淺茅	
淺茅		「淺茅」を見よ	六九ノ八
葦		「葦」を見よ	四九ノ二
櫻		葵	
葵		「葵」を見よ	六八ノ四
あやぶ草	六八ノ四	青草	
青草	六八ノ四	青蕪草	
青蕪草		「青蕪草」を見よ	六八ノ四
覆盆子		「覆盆子」を見よ	六八ノ四
いつまで草	六八ノ五	山石榴	
山石榴	七ノ四	蕪	
蕪	七ノ四	蕪	
蕪	六八ノ二〇	卵の花	
萍	一九ノ一	「卵の花」を見よ	六八ノ二〇
梅		「梅」を見よ	六八ノ二〇

茅花	六八ノ二〇	董董	六九ノ七
董董	六九ノ七	同	七〇ノ三
木賊	六八ノ二〇	梨	四八ノ四
同	七〇ノ三	薔	六九ノ二
蕪	六九ノ二	瞿麥	
瞿麥		「瞿麥」を見よ	六八ノ二
ならしげ	六八ノ二	萩	
萩		「萩」を見よ	六八ノ二
蓮		「蓮」を見よ	六八ノ二
花盗人	二四七ノ三	濱茅	
濱茅	六八ノ二〇	濱木綿	
濱木綿	六九ノ二	女蘿	
女蘿		「女蘿」を見よ	六八ノ二
菱	二七ノ六	蛇床子	
蛇床子	六八ノ四	藤	
藤		「藤」を見よ	六八ノ四

牡丹 一七〇八	○はなふらの社 二四〇二	○半臂の緒 二二〇五
荊三稜 六八〇〇	○箒 二七〇五	○守の神 五三〇二
三稜草「三稜草」を見よ 一五二〇五	新しき 二二〇五	○暴風 一七〇五
みづな草 一四〇三	えせ板敷の 一五〇五	○原の池 五〇〇一
萩 四〇六	○柞山 一五〇七	○「原は」 一五〇九
桃 四〇六	○灰「冬の晝」 一〇七	○祓 三六〇五
八重葎 六九〇二	○はひぶし 二八〇七	○同 二七〇二
麥門冬 六九〇二	○葉二(横笛) 二〇〇五	○同 二九〇八
山吹「山吹」を見よ 一七〇二〇	○蠅 五七〇二	○春 二九〇八
楊梅 一七〇二〇	○濱茅 六八〇二〇	曙 一〇〇一
山蘭 六九〇二	○濱名の橋 六七〇五	網代 一三〇八
夕顔 七〇〇四	○「濱は」 二〇七〇	鶯 五五〇四
蓬「蓬」を見よ 六九〇二	○濱木綿 六九〇二	汗衫 二八三〇六
龍騰 六九〇二	○盤 二九〇二	夕暮の花風 三〇〇一〇
女郎花「女郎花」を見よ 一四〇二〇	○半揮 一四〇二	臨時の祭の試樂 二六三〇二
○花風 一四〇二〇	○反對 七〇〇二	○透なる世界 二二〇一〇
○花盛「寺籠」 一四〇九	○牛臂の暮 一四〇二	○「はるかなるもの」 一四〇二

ヒ

○日「入日」 三三〇七	○日陰 一〇八〇二	○菱 一七〇六
○日「凶會日」 三三〇八	○ひきいれ聲 三三〇八	○美醜 二二八〇二
○火 三三〇八	○ひきはこえたる 一七〇二	○聖僧の擧動 二二〇一
近所の火事 三三〇二〇	○「ひきものは」 二二〇八	○火焼屋 一六四〇五
火事 二八〇二	○茅蝸 二六〇二	○同 一九八〇五
警戒 一四〇八	○ひくれの驛 三三〇六	○常陸介 九二〇
火桶の火 二七〇三	○髻 二九〇一	○ひぢがさ雨 一七〇七
船の火 二六九〇五	○髪籠 二四〇七	○事業 二二〇八
文を読む 一〇七	○幸牛 三三〇三	○ひぢをりたる廊 二七〇六
冬 一〇七	○提 二〇〇〇	○祓點 二六〇一〇
焼けたる所 二七〇六	○同 二七〇六	○人「ありがたきもの」 七三〇二
○難あそびの調度 三三〇九	○同 二七〇六	○ひとし暮 一八七〇四
○難の調度 一七五〇二	○同 二七〇六	○人給 二二九〇六
○女蘿 六九〇二	○同 二七〇六	○ひとつ橋 二五〇七
○同 六九〇七	○同 二七〇六	○ひとつまの里 六七〇五

○「人にあなづらるるもの」	二七ノ六	ひの装束の紅の単衣	二六〇ノ三	琵琶は	二一〇ノ三
○「人の家につきくしきもの」	二七ノ四	○単 <small>ひとがさね</small> 襲	四三ノ二	無名	二〇九ノ四
○「ひとばえするもの」	一七六ノ七	○「ひとへは」	二六〇ノ二	○檜皮屋 <small>ひはたや</small>	二〇四ノ九
○人々しき	一三五ノ四	○人間 <small>ひとよ</small>	一三六ノ二	○ひはの山	二四ノ二
○単衣	二四二ノ五	○人丸	四九ノ二	○賓客 <small>ひめまうちぎら</small> 「客」を見よ	一七八ノ六
青き	二六〇ノ二	○同	五ノ四	○姫大夫	二二二ノ二
色きばみたる	二九四ノ二	○人見の岡	二三四ノ九	○病人「疾病」参照	二七ノ二
色黒き人の	二九四ノ二	○人め(物語)	二〇九ノ二	修験者	二七ノ二
白き	二六〇ノ二	○火取の童	一〇五ノ三	健やかなる人	一七九ノ八
生絹の単衣	二〇四ノ二	○人忘れがちなる	一九ノ三	貴く思ふ人	三三九ノ九
同	二〇六ノ三	○檜	五三ノ四	見舞	二八四ノ二
同	二九二ノ四	○日の装束	七六ノ三	六七八十なる人	一九二ノ四
同	二九四ノ二	○ひの装束	二二四ノ三	○屏風	二六九ノ二
男女	二六二ノ二	○鶴 <small>つば</small>	五四ノ三	漢書の御屏風	一九〇ノ九
練色のきぬ	二六二ノ二	○「日は」	二八ノ六	唐繪の屏風	二六九ノ二
のしひとへ	二九四ノ二	○琵琶「音楽、楽器」参照	二二〇ノ九	坤元録の御屏風	二六九ノ二

地獄繪の御屏風	七六ノ二〇	夜と晝と	七二ノ二	火おこさぬ	二二ノ八
月次の御屏風	二七〇ノ一	○晝寢	二六ノ二	火の大きなる	二七〇ノ三
布屏風	一七四ノ三	親	五七ノ八	冬	一ノ八
繪	三三八ノ二	夏	二九三ノ二	物語の折	一九九ノ四
○兵衛の藏人—雪月花の條	一九六ノ三	同	二九三ノ九	よく調じたる	二〇七ノ二
○檳榔毛	三六ノ九	女	六八ノ四	○蟬 <small>ひやむし</small>	五六ノ九
○檳榔毛の車	六ノ二	○蛇床子 <small>いさむしろ</small>	一〇五ノ一	フ	七三ノ二
○同	六六ノ二	○領巾 <small>ひれ</small>	二二九ノ三	○夫婦	二六〇ノ五
○平 <small>らね</small> 織の御衣	一三二ノ四	○同	一〇四ノ八	○風俗歌	一九五ノ一
○平野—神輿宿	二六二ノ二	○檜 <small>ひわりこ</small> 碓子	二七〇ノ五	○笛「音楽、楽器」参照	三三ノ九
○ひらの山	一五ノ一	○火桶	二七〇ノ四	有明	一八二ノ二
○平緒	一〇七ノ九	大なる	二七〇ノ七	一條院のふかせ給ふ	一八二ノ二
○晝	一〇三ノ六	炭と火の置き方	二七〇ノ七	ならふ	一六六ノ四
後の行啓	一〇七	他人の炭おこしたる	一九九ノ六	笛の聲	二二一ノ一
冬	一三ノ八	竹王繪 <small>かきたる</small>	二八ノ四	横笛	二二〇ノ三
吠ゆる犬	二一五ノ七	沈の火桶		○「笛は」	
待ち明して		手のあぶり方			

○風香調 二〇〇ノ二
 ○深杏 一四〇ノ三
 ○吹上の濱 二〇七ノ二
 ○服 一八三ノ六
 ○服装 二五八ノ一
 赤色櫻の五重の唐衣 二五八ノ一
 赤色の羅の御衣 二五八ノ五
 赤色の唐の御衣 二五五ノ二
 赤衣 二四二ノ七
 赤袈裟 一七六ノ七
 赤紐 一〇五ノ九
 袖「袖」を見よ
 淺黄の帷子 四〇〇ノ三
 青色の紅の衣 一三九ノ五
 青き單衣 二四二ノ五
 青朽葉 二二三ノ二
 青末濃の裳 二五三ノ一〇

青摺 一〇五ノ七
 青純の豎紋の指貫 二四四ノ五
 青純の指貫 一四四ノ三
 青柳(襲の色目) 一四四ノ一〇
 青山吹(襲の色目) 一三九ノ四
 衣服の名 一五四ノ八
 浮紋の御衣 二八ノ三
 後をまひす 一四四ノ四
 薄(襲の色目) 四五ノ八
 薄色の裳 一六七ノ二〇
 同 二五三ノ四
 薄墨の衣 二九ノ二
 薄墨の袈裟衣 二五三ノ三
 薄純の衣服(喪服) 一八三ノ一
 羅の袈裟 二九ノ二
 袷 二八二ノ一
 うちたるきぬ 一六五ノ一〇

卯花重 一八ノ二〇
 うへのきぬ 五三ノ一
 同 一三五ノ五
 うへのきぬの袴 一五四ノ一
 采女 二五三ノ一〇
 梅(襲の色目) 九七ノ三
 葡萄酒の五重の御衣 二五五ノ二
 葡萄酒の織物の指貫 二五三ノ二
 葡萄酒の織物の直衣 二五八ノ八
 葡萄酒の豎紋の指貫 二七三ノ八
 葡萄酒の指貫 八五ノ一
 大口 一五四ノ三
 搦練重 一〇八ノ六
 搦練の下襲 一六五ノ五
 香の羅 四一ノ七
 汗衫「汗衫」を見よ 一七六ノ二
 ひはぎぬ

髪 一〇六ノ一
 唐綾の柳の御衣 二五五ノ二
 唐衣「唐衣」を見よ
 唐繪の革の帯 二三〇ノ一
 狩衣「狩衣」を見よ
 着いた 二八三ノ二
 黄朽葉(襲の色目) 一六七ノ一〇
 公達の直衣姿 一〇四ノ三
 裙帯「裙帯」を見よ
 紅の御衣 一三三ノ六
 同 一四四ノ六
 黒き衣 一三九ノ二
 黒牛臂 一三六ノ三
 檢非違使の袴 一七四ノ六
 紅梅の固紋 一八ノ三
 紅梅の狩衣 一四四ノ二
 紅梅の衣 一三ノ八

紅梅の衣 一七三ノ二
 濃き綾の御衣 二八ノ三
 濃き紫の指貫 一七ノ八
 象眼重ねたる衣裳 二五六ノ一
 櫻(襲の色目)「櫻」を見よ
 櫻の汗衫 二九ノ八
 櫻の唐衣「唐衣」を見よ
 櫻の直衣「直衣」を見よ
 指貫 一五四ノ三
 同 二六〇ノ六
 従者 六五ノ一
 淑景舎 二八ノ三
 襪 一三六ノ六
 下襲「下襲」を見よ
 下襲の帯 一〇二ノ三
 同 一五〇ノ八
 白重の汗衫 五六ノ六

白き綾 一〇四ノ五
 白き綾の衣 五七ノ二
 白き御衣 一七ノ八
 紫苑(襲の色目) 一六七ノ一〇
 紫苑の衣 一八四ノ二
 生絹の單衣袷「單衣」を見よ
 蘇芳襲 一三六ノ三
 蘇枋の織物の袷 二八ノ二
 蘇枋の袴 四一ノ七
 摺衣 二六九ノ九
 摺りたる袴 一四四ノ二
 水干袴 一三九ノ五
 隨身の長の狩衣 一四六ノ一〇
 背縫片よせて著たる 二五三ノ六
 僧侶 一四〇ノ七
 袖口 一五〇ノ七
 中宮 一八ノ三

中宮	二五ノ二	單衣―「單衣」を見よ	四三ノ二	萌黄(襲の色目)	二八ノ五
地摺の唐の羅	二五六ノ一	單衣襲	二二ノ四	同	二九ノ七
地摺の裳	一九ノ二〇	日の装束―「日の装束」を見よ	二二ノ四	萌黄の固紋の御衣	二八ノ三
壺装束―「つば装束」を見よ	五九ノ二〇	平縫の御衣	二二ノ四	萌黄の狩衣	二四ノ三
主殿司	九ノ四	領巾―「領巾」を見よ	二二ノ四	裳、唐衣	二四ノ二
宿直衣	九ノ四	二藍の直衣	二二ノ二	紋	二八ノ九
萎えたる	一七三ノ二	藤(襲の色目)	一七ノ二	柳の下襲	二二ノ八
萎えたる練色の衣	一七三ノ二	ほそなが	一五ノ九	山吹(襲の色目)	一七ノ二
直衣―「直衣」を見よ	一七三ノ二	法服	二五八ノ二	綾のうへの袴	二三ノ二
直衣、指貫の紫色	一九九ノ一	まひろげ姿	二九〇ノ二	わきあけ	五八ノ二
衿の袷	一四六ノ〇	道隆	二九〇ノ二	女の上衣	二八ノ二
のけくび	二九三ノ六	同	二四ノ五	○普賢	二〇八ノ二
のしひとへ	二九四ノ二	道隆の室	二八ノ五	○普賢十願	二〇八ノ六
袴―「袴」を見よ	二六七ノ二〇	無紋の御装	二二ノ二〇	○ふさう雲	一七七ノ五
蕨(襲の色目)	一六四ノ三	紫の袷	二五八ノ六	○伏見の里	六七ノ二
半臂	一六四ノ三	紫の指貫	二九ノ四	○豊前(采女)	二五ノ二
半臂の緒	一三〇ノ二	裳	二八ノ三	○二藍	

織物	四三ノ一〇	○文机	三三ノ九	讀經―「讀經」を見よ	五〇ノ三
さいて	三三ノ九	○佛眼眞言	一四八ノ二	念佛の回向	四〇ノ二
指貫	四三ノ二	○佛事	二四三ノ八	入講	四〇ノ七
同	二六〇ノ七	一切經供養	二四三ノ八	同	二七ノ二
下襲	二六三ノ三	御佛名―「佛名」を見よ	一四三ノ四	同	二六ノ二
直衣	四一ノ七	祈願	一七八ノ六	同	二八ノ九
直衣、指貫	四〇ノ二	季の御讀經	二六九ノ九	初瀬詣	四〇ノ六
二藍などのもの	五ノ三	同	二六九ノ九	同	二八ノ九
○舞踏	一四ノ五	經供養	一七九ノ六	御齋會	二六九ノ九
○同	一五ノ四	經を習ふ	一七九ノ六	御修法	二六九ノ八
○二貫(和琴)	一〇ノ四	孔雀經の御讀經	二六九ノ八	御嶽精進	一五八ノ二〇
○藤	五ノ七	熾盛光の御修法	二六九ノ九	○佛名	
あてなるもの	四七ノ八	正月	一四三ノ二	雨	二五ノ二
しなひ長く色よき	一〇ノ八	説經に來る人	三九ノ六	御装束の所の衆	一七八ノ七
松にかとりたる	一六ノ三	千燈の御志	一四一ノ二〇	地獄繪の屏風	七六ノ二〇
○「淵は	二六ノ四	千日の精進	二〇九ノ八	宮の	二七三ノ二
○藤原時柄		陀羅尼			

人の筆	二二三ノ二	火	二七六ノ七	下種女の子負ひたる	一四六ノ五
よき筆	二四一ノ五	船人の言語	二三〇ノ三	下襲	二六二ノ三
〇不動尊	二八八ノ二	帆あげたる	二二三ノ六	霜	一ノ六
〇船岡	二四九ノ九	道	一九九ノ二〇	炭櫃	一ノ八
〇船		蓬庫	二七六ノ二	炭	一ノ七
海路	二七五ノ二	櫓	二七五ノ五	夏と冬と	七ノ二
航海する人	二七五ノ八	〇文一驚	五五ノ五	灰	一ノ八
風疾に帆上げたる	一九一ノ五	〇文一「書簡」「消息」を見よ	二〇八ノ八	火	一ノ七
機取	一七八ノ二〇	〇「文は」	二六二ノ八	晝	一ノ七
車を居う	一三〇ノ八	〇文章一良否	二六二ノ八	火桶	一ノ八
菰積みたる	一三〇ノ九	〇文房具	二六二ノ八	火桶の火	二七〇ノ三
潮干の湯なる	一四八ノ五	頓著せざる	二二二ノ二	冬の夜の戀	七三ノ九
他船を見る	二七六ノ五	人の目とむ許りなる	二二二ノ九	冬は	一ノ五
積荷	二七五ノ二	〇冬	二二二ノ九	雪	一ノ六
乗りて行くまじき	二七六ノ八	曉	二七三ノ二	夜を居あひす	一九四ノ二
遊艇	二七六ノ七	御佛名の夜	二七三ノ二	〇瓜	一七五ノ四
早緒	二七六ノ二	かきまさりするもの	二七三ノ二	〇振幅	七六ノ七

〇布留の瀧	六ノ八	〇法師一「僧侶」を見よ	二五ノ八	中宮行啓	二四三ノ八
〇布留の社	三三ノ二	〇法師陰陽師	二五ノ八	道隆清少の問答	二四八ノ二
〇「ふるものは」	三三ノ二	〇法師子	一七四ノ六	道隆、中宮に候す	二四四ノ五
〇ふれあそび	二二ノ三	〇「法師は」	二二ノ六	御階のものと造花	二四四ノ一
〇陪従		牡丹	一七〇ノ八	院内のしつらひ	二四三ノ八
試樂の日	一六四ノ三	〇ほうちばうたう	二九二ノ六	〇菩薩	一五八ノ六
しなおくれたる	二二ノ八	〇法輪	二〇八ノ三	星	二二ノ三
〇餅談	一五二ノ二	〇鳳凰一桐	四八ノ二	七月七日	二二ノ三
〇屏幔	二五〇ノ二	〇法會一説教	三六ノ二〇	昂星	二六ノ三
〇別當	一四ノ八	〇牧馬(琵琶)	二二〇ノ四	煮牛	二六ノ三
〇同	二四ノ八	〇法華經	二〇八ノ六	明星	二六ノ三
〇辨	五九ノ二	〇鉢	五九ノ三	長庚	二八ノ三
〇變化の名	二〇一ノ四	〇ほこぼし	一七〇ノ六	流星	二八ノ三
		〇法興院(二條の宮)	二四六ノ三	〇「星は」	二六ノ二
		北の方、中宮に候す	二四六ノ三	〇臍	二九四ノ三
		造花の木を抜く	二四一ノ二	〇細冠者	二九ノ八
		清少車に乗り候る	二四九ノ四	〇細太刀	一〇七ノ九

○細谷川 ほそこの	六七ノ一	卯の花	四七ノ二〇	○孟嘗君	一五七ノ三
○廊	五九ノ一	同	五五ノ二	○申文	
○同	七四ノ五	賀茂の奥	二六ノ九	除日	四ノ一
○ほそなが	一五ノ九	五月の節句	五ノ八	博士の	一〇八ノ九
○細長	二四ノ二	忍ばぬ	五五ノ九	○雛の鳥	二〇七ノ七
○細櫃	一七三ノ九	橋	四八ノ三	○まがなひ	一九八ノ七
○螢	一ノ二	花橋	五五ノ二	○巻染	五ノ五
○同	五六ノ九	祭の頃	五ノ二	○同	一八ノ六
○佛		六月	五六ノ二	○詩繪	三三ノ二〇
御顔拜む	一八六ノ二	「鳥は」	五〇ノ二	○秣 <small>まぐさ</small>	二八〇ノ六
観音	一六ノ二	○頼	二四ノ二	○枕 <small>まくら</small>	二九ノ九
関白より勝る	一五ノ四	○磯漿	二六ノ二	○方弘 <small>まさひろ</small>	六四ノ四
○佛の御國	二五ノ二〇	○盆 <small>千盃盆</small>	二七ノ七	なだいめん <small>の事</small>	
○「佛は」	二〇八ノ二〇	○堀江の橋	六七ノ六	人に笑はる <small>と事</small>	一五ノ三
○杜鵑		○堀兼の井	一九ノ二	○ますだの池	五ノ一
鶯	二二ノ六			○ませこし	三二ノ二
鶯との比較	二三四ノ四			○松	

大なる	二六ノ三	○祭		○待兼山	一五ノ四
かきまさりするもの	一八ノ八	葵	六八ノ二	○「舞は」	二〇ノ三
藤のかとりたる	一〇ノ八	神樂の笛	一六ノ八	○舞人	
○待つ		かへさ	四七ノ二	狛犬しく舞ふ者	一四八ノ九
必ず來べき人を	二四ノ四	同	五五ノ九	少將といひける人	一六六ノ五
車	一八ノ八	同	二二ノ三	八幡の臨時祭の試樂	一六四ノ二
戀人	二四ノ二〇	同	二二ノ一	臨時の祭の	一〇五ノ四
修驗者	二八ノ三	賀茂祭の頃	四ノ二	○舞姫	
人を待ち明して	一五ノ五	四月	四ノ二	五節	一〇七ノ五
人を待つ夜	三五ノ六	使	二二ノ四	服装	一〇五ノ七
夜の明くるを待つ	一八三ノ四	御神樂	五ノ一	○まひろげ姿	一九ノ一
呼びし人の來ぬ	一六ノ二	宮のほとりの	一九ノ七	○萬葉集	六九ノ五
○松が浦島	二〇七ノ九	見る	一四五ノ九	○まめ人	七六ノ六
○松君	一三〇ノ九	物見車の競争	二四ノ五	○檀 <small>たのみ</small>	五ノ二
○同	二五八ノ八	八幡の臨時祭の還立の事	一六ノ八	○客人 <small>きやく</small> 「客」を見よ	
○松尾	二六三ノ九	臨時の祭	五ノ一	○丸屋 <small>まるや</small>	二六三ノ六
○松蟲	五六ノ九	臨時の祭の舞人	一〇五ノ四	○鞠	二二〇ノ一

○荊三枝 六八ノ二	○御匣殿 二八ノ八	○紫盗人 一四七ノ一
○御形の宣旨一人形 一九六ノ二	○三稜草 六八ノ四	○御萩 一四五ノ九
○御格子まわぬ 二四七ノ五	○同 六九ノ七	○みそひめ 一六三ノ六
○御格子もまわらず 一九七ノ〇	○美久理の社 二四ノ二	○雲 五二八ノ三
○御神樂「神樂」を見よ 一九七ノ〇	○「見ぐるしきもの」 二九ノ五	○御嶽 六ノ五
○三笠山 一四ノ二	○御梳櫛 二二ノ七	○御嶽詣 五二ノ八
○帝一老人 二五ノ三	○御輿 六ノ九	○同 一三九ノ二
○壺の原 一五ノ二	○同 一四九ノ六	○道方 七九ノ一
○御厨人 二一ノ八	○同 二二ノ二	○道隆(關白殿) 二四三ノ八
○同 二二ノ一	○神輿宿 二六ノ三	經供養 一七ノ二
○水草 一九ノ一	○みこ鳥 五四ノ三	しほのみつゝの歌 一九ノ八
○御匣殿 八四ノ五	○御齋會 二六九ノ九	中宮に参る 二七ノ二
○同 三〇ノ二	○山陵は「 二六ノ〇	入講聽聞の事 四一ノ七
○同 二四六ノ二	○みぢかききり 二四ノ二	服装 二二九ノ二
○同 一五七ノ一〇	○「短くてありぬべきもの」 二七ノ三	同 二四四ノ五
	○御節供 九六ノ六	御使に祿を出す 二四五ノ二
		威勢 一五〇ノ五

○道隆の室 中宮に候す 二四六ノ三	○水うみ 三六ノ五	○「見ならひするもの」 二七四ノ二
○服装 二八ノ九	○御厨子 一六ノ八	○「峯は」 一五ノ七
○道長(宮の大夫) 五〇ノ二	○御厨子所 六四ノ五	○美濃の御山 一五ノ五
○檀紙 三六ノ二	○水鳥 五〇七ノ九	○養蠶 五六ノ二〇
○白く清げなる 二四〇ノ三	○水なしの池 四九ノ六	秋 いとあはれなり
○同 二四〇ノ五	○御綱助 二二ノ一	親 みはかし
○清少の慰籍 四六ノ六	○みつはしの渡 一六ノ二〇	○御太刀 一五〇ノ二
○疊紙 一三三ノ二	○みつばよつば 五三ノ五	○御籠 一三ノ七
○陸奥國 一〇三ノ七	○水ぶき 一七三ノ六	○三保が崎 二六三ノ四
○御帳 一三三ノ二	○同 一七〇ノ〇	○任那成行 一五三ノ二
○同 一三三ノ三	○香 一六ノ二	○耳敏川 六六ノ二
○水 五七ノ五	○御讀經 一七八ノ七	○耳とき人 三三ノ三
○蠶 二二六ノ八	○水無瀬川 六六ノ二	○みとな草 一五三ノ五
○水晶の破れたる様に 一七三ノ九	○南面 一一三ノ五	○耳宜無山 一五ノ四
○物に入ると透影 一七三ノ九	○南院(道隆の家) 二五二ノ四	○命婦のおもと 一〇ノ七

○命婦の乳母	二二ノ六	○「見るものは」	二二ノ二
○宮城野	二〇九ノ七	○彌勒	二〇八ノ三
○都	六九ノ七	○三輪の山	一五ノ四
○都鳥	五四ノ八	○身をかへたらん人などはかくや あらんと見ゆるもの」	二三ノ一
○御息所	一〇五ノ五		
○宮司	二四九ノ八		
○宮仕、宮仕人			
○宮仕所は	二二ノ二〇		
○宮の大夫(道長)	二五〇ノ三		
○宮の中將(源賴定)	二八四ノ四		
○宮のめー言語	二二〇ノ三		
○みやはじめの作法	二二〇ノ六		
○深山木	五三ノ一		
○行幸—「行幸」を見よ			
○見るにことなることなき物の文 字にかきてことしくしきもの」	一七〇ノ九		
○みるめの關	二二六ノ三		
○「昔おぼえてふようなるもの」	一九〇ノ八		
○昔の御行	一五ノ二		
○蜈蚣	一八四ノ八		
○椋—落葉	二〇五ノ五		
○葎	一四〇ノ三		
○驅籠	一三六ノ三		
○増	二〇二ノ二		
○「無心	一五〇ノ四		
○むつかし	六九ノ二		
○むつかしう	二四ノ三		
○「むつかしげなるもの」	一七〇ノ三		
○むとく	二四八ノ九		
○「むとくなるもの」	一四八ノ四		
○「むれつふるもの」	一七四ノ八		
○馬	三五ノ一		
○馬ぞひ	一四九ノ二〇		
○馬 錢	二六ノ八		
○馬の命婦	一〇ノ八		
○馬場	一七ノ三		
○「むまやは」	二四ノ五		

通はぬ	二四ノ七	○「蟲は」	五六ノ八
子なき	二六ノ二	○無心	一五〇ノ四
參内	三ノ五	○むつかし	六九ノ二
住まぬ家の舅	二三五ノ八	○むつかしう	二四ノ三
住まぬ婿の出世	二三五ノ九	○「むつかしげなるもの」	一七〇ノ三
時に逢ひたる人の	二三五ノ九	○むとく	二四八ノ九
無情	二二六ノ二	○「むとくなるもの」	一四八ノ四
夜がれがちなる	一九二ノ三	○「むれつふるもの」	一七四ノ八
忘れにし人	二二六ノ三	○馬	三五ノ一
○無期	二二三ノ一〇	○馬ぞひ	一四九ノ二〇
○蟲		○馬 錢	二六ノ八
秋	一ノ五	○馬の命婦	一〇ノ八
蟻—「蟻」を見よ		○馬場	一七ノ三
蚊—「蚊」を見よ		○「むまやは」	二四ノ五
寄居蟲	二八〇ノ五		
蛙	一九六ノ二〇		
蟋蟀—「蟋蟀」を見よ			
戀蟲	二二ノ八		
鈴蟲	五六ノ九		
蝶	五七ノ九		
夏蟲	五七ノ四		
蜘蛛	二三五ノ一		
叩頭蟲	五七ノ二		
促織	三二ノ一		
蠅	五七ノ二		
ひぐらし—「蛸」を見よ	五六ノ九		
蟬	五六ノ九		
蟹—「蟹」を見よ			
松蟲	五六ノ九		
蓑蟲—「蓑蟲」を見よ			
蜈蚣	一八四ノ八		
われから	五七ノ九		
○むしくひ	五五ノ三		

○馬長 七八ノ七	○紫野 三〇九ノ七	○帽類の簾 二九ノ八
○無名(琵琶) 一〇九ノ四	○村雨 七八ノ七	○木工尤 三二ノ二
○同 一一〇ノ四	○「めでたきもの」 二二ノ一	○もたいな 二八八ノ四
○無紋 二六二ノ七	○馬道 二二ノ一	○喪中 一八三ノ六
○むもれ木(物語) 二〇九ノ三	○「めでたきもの」 二二ノ一	○望月の節供 三ノ二
○村上院 一九六ノ三	○乳母 二四ノ八	○望月の驛 二四ノ六
雪月花の條 二〇ノ七	内、東宮の乳母 一八ノ三	○元結よる 一七四ノ九
宣耀殿の女御 二〇ノ七	御乳母の服裝 二二ノ二	○米子(舞) 二二〇ノ四
○村濃―「染色、模様」を見よ 五〇ノ二	住まぬ婿を呪ふ 三三ノ二	○物あはせ 二〇四ノ七
○紫(染色)―「染色、模様」を見よ 一〇三ノ九	乳の出ぬ 二七ノ三	○物忌 二〇四ノ七
糸 一〇三ノ九	夜泣する兒 一七八ノ二	こもる 一五ノ二
紙 一〇三ノ九	○萌黄―「染色、模様」を見よ 二〇四ノ二	三月頃 二七ノ四
花 一〇三ノ九	○帽類 一〇四ノ二	さるがふ男 一六三ノ三
六位の宿直姿 一〇三ノ二	○同 一九〇ノ二	書簡 二四ノ三
○紫野 四七ノ一〇		つく(標を) 五〇ノ二
		徒然 二七ノ八
		所さりたる 一六二ノ二

村上帝 二〇ノ二	行幸の車 二八ノ二	強くさせ 一九ノ二
○物羨み 二九ノ一	車の色々 二八ノ三	番人 一九三ノ二
○物語 一九九ノ四	車の歸り騒ぐ 二九ノ二	○紋 二八三ノ二〇
口に任せて言ひたる事 二六ノ九	車を立つる 二八ノ九	○文集 二〇八ノ九
作者 二二九ノ四	車服の悪き 二八ノ三	○文章博士 一七ノ二〇
まだ見ぬ 二〇九ノ一	白き管見つけたる 一八ノ二	○文珠 二〇八ノ二
○「物語は」 九〇ノ三	他の車を逐ふ 二九ノ五	○文選 二〇八ノ九
○「物のあはれ知らせがほなるもの」 九〇ノ三	納涼 二五ノ二〇	○「紋は」 二八ノ一
○物怪 二九ノ三	人の顔見知らぬ 二七ノ二	○文盲 二八ノ一
うつすべき人 二五ノ一	待つ間 一八ノ二〇	○桃 四ノ六
○同 二八ノ二	○物見車 一四ノ九	○桃の木切る 一七ノ二〇
○物の音 一三八ノ三	○「裳は」 二八三ノ三	○母屋 九六ノ六
○物詣 三九ノ三	○模倣 二七四ノ二	○同 二〇六ノ一
○物見 三六ノ一	○紅葉 五二ノ二	○同 二九ノ一
かへさ 三六ノ一	○門 六ノ九	○「森は」 一三七ノ三
	家の門 六ノ九	
	于定國 七ノ八	

鳳凰	四八ノ二	○「やどりの司の権の守は」	一九ノ五	○山里	一三八ノ八
梨花	四八ノ六	○柳篁	一〇八ノ二	かきまさりするもの	一三八ノ八
○唐土の帝	三三ノ三	○柳	四ノ六	五月頃の景	三三ノ四
○諸寄の濱	二七ノ二	○同	五ノ二〇	雪	一三九ノ二
		○同	二七ノ五	○夢門冬	六九ノ二
		○「屋は」	二六ノ五	○山菅の橋	六七ノ七
ヤ		○八幡	二六ノ九	○山路	一三八ノ八
○矢	五九ノ三	○八幡行幸(一條院)	二四九ノ五	○山鳥一鏡	五四ノ三
○楊器	一九六ノ三	○八重葎	六九ノ二	○山梨の木	五二ノ三
○楊貴妃	四八ノ八	○山		○やまの驛	三三ノ六
○やうしたる	一〇五ノ九	入日	三三ノ七	○山の井	一九ノ二
○やくがひ	一六四ノ四	春の曙	一ノ一	○山井の大納言(道頼)	一九ノ二
○薬師佛	二〇八ノ三	御嶽詣	五二ノ八	いとよくおぼす	一三三ノ七
○焼けたる所	一七三ノ六	山の端の月	三三ノ二〇	戲言	二五三ノ三
○社「神社」を見よ		○山蓋	一〇八ノ二	○「山は」	一四ノ二
○「社は」	三三ノ二〇	○山籠	七ノ九	○病「疾病」を見よ	二八四ノ六
○八十島	二〇七ノ九	○同	一三五ノ一	○「やまひは」	
○やどり木	五二ノ二				

○山吹	一六九ノ一	薄雪	一九五ノ三	紫の指貫	二二ノ九
花辨に歌をかく		梅の花	五六ノ七	物語	一九五ノ三
花辨の大なる	二六ノ三	音信	二六八ノ九	楊器に盛る	一九六ノ三
繪にかきて劣るもの	一三六ノ六	御佛名の長	二七三ノ二	山里	一九九ノ二
○楊梅	一七七ノ二	香爐峰の雪の條	二七〇ノ八	○ゆきあひの橋	六七ノ六
○山蘭	六九ノ二	挿頭の花にかゝる	二二ノ三	○行成「行成」を見よ	
○闇		瓦の目毎に入る	二三八ノ四	○雪山	九三ノ二
知らぬ所	七ノ九	通ふ人	二六七ノ七	○靱負佐(渾名)	三三ノ七
夏	一ノ二	下衆の家	五七ノ二	○靱負佐	
○遣戸	二九ノ二〇	残月に映す	二七三ノ四	狩衣すがた	五八ノ五
○同	一七四ノ五	雪月花	一九六ノ三	○夜行	五八ノ四
○同	二二三ノ一	中宮、清少を召し給ふ	一九八ノ一	○弓長	一二三ノ六
		寺籠	一四〇ノ五	○油單	一三六ノ五
		宿直姿	二二三ノ八	○櫟	五三ノ六
		光	一九五ノ五	○ゆづるばの峯	一五ノ八
		檜皮葎	二三八ノ三	○「湯は」	一三八ノ一
		冬	一ノ六	○夕顔	七〇ノ四

○夕暮

- 秋 一ノ二
- 川竹 一三九ノ二
- 旅より家の主の歸る 三三九ノ九
- 讀經 二〇九ノ二
- 人の來集 三三九ノ八
- 夕涼—音樂 二五ノ二
- 夕日—秋 一ノ三
- 夕日の里 六七ノ二〇
- 弓 六三ノ二
- 瀧口 二ノ七
- 舎人の 二七ノ四
- 眞弓 五九ノ三
- もてありく 三三九ノ六
- 夢—夢合 五四ノ三
- 萬木の森

ヨ

- 容貌風采 二九ノ二
- 色黒き人の生絹單 二九ノ二
- 牛飼 三七ノ二
- 面相よき人 二六九ノ五
- 貴公子 三七ノ四
- 小舎人 三七ノ五
- 雑色隨身 三七ノ三
- 説經師 三七ノ七
- 中宮 二〇ノ二
- 特に美なる所 二三八ノ二
- 夏の晝寢起 二九三ノ三
- 寐くたれの朝顔 二四八ノ一
- 博士の顔 一〇二ノ三
- 花婿 三ノ七
- 人の貌かたも 二二九ノ一

- 晝寢起きて見交す顔 二九四ノ一
- 瓜にかきたる兒の顔 一七五ノ四
- 醜き顔 二二九ノ二
- 物語中の男女の繪 一三八ノ六
- 養子の顔 七七ノ二
- 女 六〇ノ二
- 女の寢起 六三ノ四
- よこばしりの關 一三六ノ二
- 横笛 二二ノ四
- 曉に見つけたる 二二ノ五
- 宇多法師 二〇ノ五
- 釘打 二〇ノ五
- 携帶 二二ノ二
- 小水龍 二〇ノ五
- 水龍 二〇ノ五
- 音の遠近 二二ノ一
- 葉はふたつ 二〇ノ五

文のやう

- 與謝の海 二二ノ五
- 義懷中納言 一六ノ八
- よしなよしなの關 四二ノ二
- 吉野川 一三六ノ二
- 淀の渡 六七ノ二
- 流よほひほし星 一三七ノ八
- 蓬 二三八ノ二
- いとをかし 六八ノ九
- 香 二二五ノ八
- 五月節句 五〇ノ四
- 高く生ひたる庭 一四〇ノ三
- 夜—「月」參照
- 明くるを待つ間 一八三ノ四
- 鶯 五五ノ二
- 同 三三四ノ四
- 音樂 二二〇ノ一

庚申の夜

- 五月雨の夜 一三ノ四
- 忍びやかなる笑 五五ノ二
- 深夜の圍碁 二〇七ノ五
- 兒 二〇七ノ三
- 時奏せう 五六ノ三
- 泣く兒 二六三ノ七
- なくもの 二三四ノ五
- 同 五六ノ三
- 夏 一ノ二
- 寢起きて飲む水 二三四ノ五
- 晝と夜と 三六ノ五
- 笛の聲 七二ノ二
- 冬の夜 二六三ノ二
- 待つ夜 七三ノ九
- 短夜の戀 三五ノ六
- 夜の鳥 七三ノ六
- 夜よ 七二ノ四

夜を居あかす

- 夜のおとど 一九四ノ二
- よろこび奏す 七九ノ二
- 夜折 一四ノ四
- 夜居の僧 一七八ノ六
- 同 一四七ノ三
- 同 一五五ノ二
- 雷かんなり 二六九ノ二〇
- 雷鳴の陣 一七七ノ五
- 「名おそろしきもの」
夜鳴る 二三五ノ三
- 廊らう 五七ノ五
- 同 一二九ノ七
- 同 一四〇ノ二
- 同 二七九ノ五
- 同 二七九ノ一〇

○老人	好色	包兒	兒童	椎	寢惑ひ	人になづらるるもの	無作法	髪はなちたる	老女と梅	老女と若き男	老女の妊娠	若きと老いたると	女親	○禮盤	○落躰	○羅文―蜘蛛の巣
	一九〇ノ三	一四六ノ五	五九ノ六	五八ノ三	五八ノ三	二七ノ七	二八ノ五	一四八ノ七	五八ノ三	五八ノ二	五八ノ一	七三ノ二	二二三ノ八	一四一ノ八	二二〇ノ六	一五二ノ九
	○隆圓(僧都の君)	行成の文を懸望す	笙の笛を懸望す	服裝	○律師	○立紋	○臨時祭	櫛	試樂	使	使の服裝	調樂	見るものは	八幡	横笛	
		一五七ノ九	一〇九ノ九	二五八ノ五	二二ノ七	二四ノ七		五二ノ一	一六三ノ二	二二ノ七	二二ノ四	七五ノ二	二二ノ三	一六三ノ二	二二ノ九	
	○龍膽	○旅行	海路	陸路	○禮儀作法	詞遣ひ	無作法	同	無遠慮	○冷泉院	○れいたう	○例の思ふ人	○例の君	○禮拜―忍びやかに	○戀愛	
	六九ノ二		二七六ノ八	二七六ノ九	三三ノ九	二八ノ三	二八ノ三	一一三ノ三	一一四ノ二	一七ノ二	一五三ノ二	一五一ノ六	二四六ノ五	一四二ノ五		

暁の出入	暁の別	雨の日に來る人	有明の月	ありがたきもの	恨み言	風の夜に通ひ來る人	交野少將と落窪少將	棒	後朝の消息	戀する人の例	忍びて通ふ局	せかるゝ戀	月の夜に來る人	獨住する人	冬の夜	待つ夜
四五ノ五	三三ノ二	二六五ノ七	二八八ノ七	七四ノ三	四七ノ一	二六七ノ六	三六七ノ四	五二ノ四	二八九ノ二	五二ノ三	七四ノ九	一五九ノ二	二六六ノ七	二八九ノ二	七二ノ九	三五ノ六
短夜	名聞の爲に通ふ	雪に通ひ來る人	忘れし戀	口	○綠彩	○ろうの長	○録―暗誦す	○祿	○同	○同	○同	○同	○同	○同	○同	○六月
七三ノ六	二六六ノ二	二六七ノ七	七三ノ三		二六七ノ二〇	一七三ノ六	二九〇ノ七	二六ノ八	九三ノ二	九七ノ三	九八ノ一	一三二ノ二〇	二二〇ノ二〇	二四三ノ八		
祓	杜鵑	節折	○六觀音	○六位	頭白き	宿直姿	○六位藏人―藏人を見よ	○露臺	○皇子―今上一の宮	○黃鐘調	○和歌	暗記	鶯	歌の題は		
一八三ノ六	五六ノ二	一七八ノ六	二〇八ノ二	一九二ノ三	一〇五ノ四	一六八ノ三			一〇三ノ二	二二〇ノ二	二四〇ノ四	五五ノ五	六九ノ六			

「歌は」	二六〇ノ四	いかにして(中宮)	二七二ノ二	雲のうへに(清少)	二七三ノ三
歌よむ	二三ノ九	いはで思ふぞ(古今六帖)	二六九ノ一	今日來ん人を	一九五ノ九
集は	六九ノ四	いはどいはなん(後撰)	二四七ノ一	こゝにのみ(清少)	九五ノ一
題	二六ノ八	山田(貫之)	二四八ノ七	これをだに(一條院)	一六二ノ二
返歌	一八三ノ一	いよく見まく(伊勢物語)		さかしらに(清少)	二七二ノ七
褒めらるゝ歌	七九ノ三	うすきこそ(清少)	二七八ノ二	早苗とりしか(古今)	二三四ノ七
よく詠む	一八〇ノ七	うす氷(清少)	二〇二ノ五	狭山が池のみくりこそ(古今六帖)	四九ノ二
○若きと老いたると	七二ノ二	うらやまし(常陸介)	九五ノ九	下ゆく水の	七三ノ六
○和歌俗語		おふの下草	四六ノ三	下敷こそ(中宮)	二二三ノ三
あかれさす(中宮)	二二ノ七	おもひだに(清少)	二八二ノ三	しほのみつ	一九九ノ九
秋にはあへず(貫之)	二六三ノ一	かけまくも(清少)	二四二ノ四	すこし春ある	一三四ノ一
あしびきの(實方)	二〇六ノ四	霞の間より(古今)	一三〇ノ五	その人の(清少)	二四ノ三
跡の白浪(沙彌滿誓)	二七六ノ八	かづきする(清少)	八九ノ五	そらさむみ(清少)	一三四ノ七
逢坂は(清少)	二八二ノ二〇	賀茂の社のゆふだすき(古今)	二二二ノ九	高瀬の淀(引歌)	一三七ノ二〇
雨ならぬ名(清少)	二二〇ノ八	くづれよる(清少)	八九ノ三	薪こる(小野殿の母)	二七二ノ二
有明の月の(拾遺)	二八八ノ八			七夕つめに(業平)	六七ノ三
いかにして(中宮)	二〇二ノ二				

千枝にわかれて(古今六帖)	五三ノ三	杜鵑尋れて(清少)	一三三ノ五	わたつ海に(道命阿闍梨)	二七二ノ八
千賀の鹽竈	二五九ノ五	杜鵑なく音(藤侍従)	二二〇ノ二	わたつみの(兵衛藏人)	一九六ノ九
誓へ君(清少)	二八二ノ七	ほととぎすよ(俗語)	二三四ノ一	わらはへの(童謡)	二八ノ二
つかさまされと(俗語)	一〇八ノ四	三笠山(中宮)	二二〇ノ四	我よりさきに(新拾遺)	二四八ノ三
月も日も(萬葉集)	一八ノ四	道もなし(拾遺)	一九九ノ三	男山の峰の(俗語)	九二ノ三
つめどなほ(清少)	一五二ノ七	みつ葉よつばに殿造(古今集)	五二ノ五	姥捨山(古今)	二四二ノ八
年経れば(古今)	一九ノ三	水増す雨の(古今)	二六八ノ八	をりもてぞ見る	七二ノ五
遠江の濱やなぎ	六〇ノ九	皆人は(中宮)	二二二ノ三	○若菜	二ノ四
なかだかわらばおひ(俗語)	二三四ノ三	峯に別る(古今)	二五ノ一	○和歌の浦	二〇八ノ一
中なるをとめ(宇津保)	九〇ノ九	みまくさを(清少)	二八〇ノ二〇	○わきあけ	五八ノ二
泣きて別れし(拾遺)	二四六ノ九	みもひも寒し(催馬樂)	一九二ノ一	○和琴「音楽、樂器」参照	一〇二ノ四
七曲に(蟻通明神)	三三ノ二	もとすけが(中宮)	二二三ノ二	○わすれ山	一四ノ二
れくたれ髪を(人丸)	四九ノ二	もとめても(清少)	四〇ノ四	○綿ぎぬ一夏とほしたる	二四ノ二
花の衣	一六〇ノ七	山近き(中宮)	二七三ノ九	○渡殿	一一ノ三
ふりにこそふれ(拾遺)	二四七ノ三	山とよむ(齋院)	九七ノ一	○同	一三ノ四
		夜は誰と寐ん(俗語)	九三ノ三	○同	二五ノ二

○男は張蹇	一八六ノ二	かづらしたる	二九三ノ九	装束	二八四ノ一
○小野殿の母	二七二ノ二〇	かどなからぬ	二三八ノ五	拗れたる	一一三ノ九
○小野の浮橋	六七ノ七	上達部の女、后となる	二〇四ノ三	受領の北の方	二〇四ノ二
○小野宮	一七二ノ三	賀茂の道の傍なる	二二三ノ二	僧侶	六ノ三
○姨捨山	一五ノ五	火光に文を讀む	二六九ノ五	同	二〇四ノ六
○尾張人の種	三三ノ二	教育	二〇ノ九	男女の中	一九一ノ二〇
○女郎花	六九ノ二〇	下種に褒めらるる	二七八ノ七	兒負ひたる下種女	一四六ノ六
○同	二〇五ノ八	下種の家の主	二二〇ノ二	兒の祈、赦する	二二〇ノ五
○小忌の公達	一〇五ノ三	下司の名	六四ノ八	主殿司	五九ノ二〇
○小忌の女房	一〇五ノ二	下種女	二七八ノ六	内侍	二二ノ九
○女	二七〇ノ七	下種女の髪	二七〇ノ三	掌侍 <small>なかし</small>	二二ノ九
あはくしき	二七〇ノ七	子生まれ	二二六ノ一	典侍 <small>ないしり</small>	二二ノ九
蟹	二七六ノ三	聲	二二七ノ三	長病	一七八ノ三
疑深き男に思はれたる	一七九ノ三	齒痛	二八四ノ七	情ある	二二七ノ二
上衣	二八二ノ二	嫉妬	五八ノ二	妊娠	五八ノ一
幸福	二〇四ノ三	嫉妬して家出したる	一四八ノ七	寢起	六三ノ四
風の朝	二五〇ノ二	自慢	一五四ノ二	寢たる有様	四九ノ八

單衣	二六二ノ一
獨棲む家	一九三ノ三
鄙の女	二七〇ノ三
服装	一三九ノ三
郭公を歌ふ田舎女	二三四ノ一
宮仕	三三ノ七
容貌風采	六〇ノ三
老婦	五八ノ一
男	二四ノ二〇
○女あるじ	二二〇ノ二
○「女のうはぎは」	二八二ノ二
○「女は」	二二一ノ八
○女繪	三六ノ一
○折櫃	九九ノ三

枕草紙索引終

方丈記索引

語句の配列順は總て
歴史的假名遣に據る

ア	○阿彌陀の像	三〇三ノ二	○一條	三〇四ノ一〇
○阿彌陀	○安元三年—火災	三〇九ノ八	○命	命をつぐ
○阿字	○雨—曉	二九八ノ四	○岩間	天運にまかす
○足の乗物	○あられ世	三二二ノ四	○衣服—「服裝」を見よ	餘算
○價—家	○泡	三〇八ノ六	○家、住居—「庵」参照	いはなし
○跡の白波		二九七ノ七	○岩間	○巖
○粟—金			○衣服—「服裝」を見よ	○家、住居—「庵」参照
○粟津の原			○家、住居—「庵」参照	あだなる様
			あだなる様	價
			價	庵を受す
			庵を受す	假の庵
			假の庵	

京中の家	二九ノ三	邊地	三〇七ノ八	身	三二五ノ二
権門の傍	三〇七ノ一	都	二九七ノ三	○牛車	三〇〇ノ二
心と一つの庵	三〇八ノ三	我身のために造る	三二七ノ七	○うたかた	二九七ノ一
毀たれて淀川に浮び	三〇〇ノ二	居屋 <small>みや</small>	三〇八ノ三	○うたくれの枕	三二五ノ三
毀ちて市に賣る	三〇三ノ九	○庵「家」「長明」参照		○うちおほひ	三〇九ノ三
さびしき住居	三二五ノ五	大原山の庵	三〇八ノ三	○うつせみあ世	三二〇ノ八
浄名居士の跡	三二六ノ三	假の庵の有様	三〇三ノ三	○埋火	三二二ノ六
住家を造る習	三三三ノ五	假の庵の長閑さ	三二二ノ九	○海―地震	三〇五ノ五
末葉のやどり	三〇八ノ二	外山の庵―「外山の庵」を見よ	三〇九ノ七	○恨	三二五ノ一
狭き地に居る	三〇七ノ七	方丈の庵内部の設備	三〇九ノ七	○愁	
作れる家は少なし	三〇一ノ六	方丈の庵の結構	三〇九ノ二	樂	三二二ノ五
土居	三〇九ノ三	○今の京	三〇一ノ二	民の愁	三〇一ノ二
同	三二二ノ〇	○依頼	三〇七ノ一〇	○魚―水	三二五ノ七
人	二九七ノ二	○浮雲		○疫病―養和年間	三〇三ノ三
一間の庵	三二五ノ五	おもひ	三〇一ノ七		
檜皮葺 <small>ひのかわぶき</small>	二九九ノ九				
富家の隣	三〇七ノ五				

オ

○老の寢覺	三二二ノ六	○香―死人	三〇三ノ七	○桂	三二二ノ一
○恐		○がうな(蟲)	三二二ノ二	○糧	三二四ノ二〇
白波の恐	三〇八ノ六	○垣		○乞食―「乞食」を見よ	
寶	三〇七ノ九	風	二九九ノ八	○桂	三二二ノ一
遁世	三二五ノ一	姫垣	三二〇ノ二	○糧	三二四ノ二〇
○大原山	三〇八ノ一〇	○かけがれ	三〇九ノ四	○門―「門」を見よ	
○大原山の庵	三〇八ノ三	○笠取	三二一ノ二	○悲	三〇六ノ三
○恩	三二二ノ二	○風		子のかなしみ	三〇六ノ三
○恩愛		鹽風	三〇一ノ四	歎ある時	三〇七ノ三
飢饉	三二四ノ三	地獄の業風	二九九ノ二	○川―地震	三〇五ノ四
人をばこくむ	三〇七ノ一〇	治承四年	二九九ノ五	○皮籠	三〇九ノ一〇
○親子		長明の庵	三〇八ノ五	○河原	
飢饉	三〇四ノ五	辻風	二九九ノ五	餓死者	三〇四ノ二
子のかなしみ	三〇六ノ三	常に害をなす	三〇六ノ七	死人	三〇三ノ八
		○かせぎ	三二二ノ五	○蠶	三〇八ノ二
				○閑居の氣味	三二五ノ八
				○閑寂	三二五ノ二
				○假の庵	三二〇ノ三
				○同	三二二ノ九

カ

ウ

エ

○假の庵 三三三ノ一	○假の宿 二九七ノ八	○狩人の一夜の宿 三〇八ノ二	○假屋 二九八ノ七	○家屋「家、住居」を見よ 三二五ノ四	○宮殿樓閣 三二五ノ四	○牛馬七珍 三二五ノ四	○飢饉 三〇四ノ三	○恩愛 三〇四ノ三	○親子 三〇四ノ七	○祈禱 三〇二ノ九	○乞食 三〇三ノ一	○寶物 三〇二ノ二	頼む方なき人 三〇三ノ九	長承三年 三〇五ノ二
養和年間 三三三ノ五	○祈禱—飢饉 三〇三ノ九	○金—粟 三〇三ノ二	○禁戒 三〇二ノ二	○狂 三〇七ノ二	○京極 三〇四ノ二	○京都—「都」参照 三〇三ノ四	○京の習 三〇二ノ一〇	陸—地震 三〇五ノ五	○口業 三〇二ノ一	○叢の螢 三〇二ノ三	○九條 三〇四ノ二	○車 三〇三ノ三	○車やどり 三〇八ノ五	○火災—「火」参照 三〇五ノ二
安元三年 二九八ノ四	狭き地の家 三〇七ノ七	たび／＼の炎上 三二二ノ二	○管絃 三〇九ノ一〇	○官人 三〇〇ノ八	○観念のたより 三二〇ノ六	○官位 三〇〇ノ九	結縁 三〇四ノ九	○源都督の流れ 三二二ノ二	○元暦二年—地震 三〇五ノ四	○子 三〇六ノ三	子のかなしみ 三〇六ノ三	死せる母の乳房 三〇四ノ七		

○五穀 三〇二ノ七	○心 三〇七ノ一〇	恩愛につかばる 三〇八ノ七	心を憐ます 三二四ノ三	同 三二一ノ四	心を養ふ 三二六ノ二	心を修む 三二五ノ四	玉界 三〇六ノ二	濁 三二六ノ三	濁にしむ 三二六ノ三	妾心 三二六ノ五	身 三〇七ノ一	同 三二四ノ四	もし安からば 三二五ノ四	慰藉 三二一ノ〇	○乞食 三〇三ノ一	飢饉 三〇三ノ一
都 三二五ノ五	○等 三〇九ノ二	○木丸殿 三〇一ノ四	○木の實 三二二ノ二	○同 三二四ノ一〇	○木幡山 三二一ノ〇	○駒 三〇五ノ六	○小童 三二一ノ五	○罪業 三二四ノ七	○妻子眷屬 三二二ノ六	○罪障 三二〇ノ八	○財寶馬牛 三二二ノ七	○嵯峨天皇—奠都 三〇〇ノ五	○櫻 三二二ノ二	○障 三二五ノ三		
○三界—心 三二五ノ四	○三途の關 三二五ノ一〇	○猿の聲 三二二ノ三	○猿丸太夫が墓 三二二ノ一	○死、死者 三〇五ノ二	○死、死者 三〇五ノ二	○死、死者 三〇五ノ二	○死、死者 三〇五ノ二	志深き者 三二四ノ三	焼死 二九九ノ二	取り捨つるわざ 三〇三ノ六	○秋風の樂 三二一ノ二	○周梨樂特が行 三二六ノ四	○四大種 三〇六ノ七	○絲竹花月 三二二ノ一		

○賤	三〇三ノ九	貧富	三〇七ノ九	往生要集	三〇九ノ一〇
○七珍萬寶	二九八ノ二二	世のありにくきこと	三〇六ノ三	和歌	三〇九ノ一〇
○死首	三〇四ノ九	世を知る	三二ノ四	○所領	三〇九ノ一〇
○柴の庵	三二一ノ五	世を遁る	三二五ノ一	○白河—餓死者	三〇四ノ二二
○執	三〇八ノ九	○進退	三〇七ノ四	○白波の恐	三〇八ノ六
○同	三二五ノ二	○親昵朋友	三三三ノ六	○白銀黄金の箔	三〇三ノ二一
○人生	三二五ノ二	○溥陽の江	三二一ノ一		
一期のたのしみ	三二五ノ二	○障子	三〇九ノ九		
今の世の中	三〇二ノ四	○賞罰	三二二ノ二		
假の宿	二九七ノ八	○浄名居士の跡	三二六ノ三		
心なやますこと	三〇七ノ一	○庄園	三〇一ノ一		
山林に入る	三二六ノ二	○主君	三〇〇ノ九		
生涯の望	三二五ノ三	○主君師匠	三三三ノ六		
處世の難	三〇七ノ二〇	○勝地	三二二ノ〇		
住所の煩ひ	三〇七ノ二	○諸國七道	三〇五ノ一		
濁悪の世	三〇四ノ一	○書籍	三〇九ノ一〇		
人と住家	二九七ノ二	管絃			

ヌ

○妾を恥づる悔	三二四ノ一〇
○朱雀門—火災	二九八ノ五
○朱雀	三〇四ノ二一
○雀	三〇七ノ四
○崇徳院の御代—飢饉	三〇五ノ一
○簀子	三〇九ノ七
○すびつ	三二〇ノ一
○すばき姿	三〇七ノ五
○住家—「家、住居」を見よ	

セ

○炭山	三二一ノ二
○瑞相—亂世	三〇一ノ〇
○末葉のやどり	三〇八ノ二
○末廣	二九八ノ八
○齊衡年間—地震	三〇六ノ九
○生死	二九七ノ九
○政治—今昔	三〇三ノ一
○小家	二九七ノ五
○少水の魚の譬	三〇三ノ四
○抄物	三〇九ノ二
○蟬丸の翁が跡	三二一ノ二
○芹	三二一ノ八
○俗塵	三二五ノ六

タ

○園	三二〇ノ二
○大家	二九七ノ五
○大學寮—火災	二九八ノ六
○大極殿—火災	二九八ノ五
○大地	三〇六ノ七
○内裏	三〇一ノ四
○盜	三〇八ノ六
白波の恐	三〇三ノ二
古寺の佛を盗む	三〇七ノ八
邊地の家	三〇七ノ八
○堂舎塔廟	三〇五ノ七
○寶	三〇七ノ九
○寶物	三〇二ノ二
○薪	三〇三ノ二
○竹の簀子	三〇九ノ七

テ

○立居	三〇七ノ四
○谷	三〇五ノ五
○田上川	三二一ノ一
○樂	三五ノ二
一期の樂	三五ノ二
愁なきを樂とす	三三ノ五
用なき樂	三二五ノ二
○玉ゆら	三〇七ノ二
○民の愁	三〇一ノ二
○田井	三二一ノ八
○地	三〇〇ノ二
舊都	三〇六ノ七
殊なる害	三〇一ノ六
新都	三〇一ノ六
地震	三〇五ノ九

○地獄の業風	二九ノ二	○外山の庵	三二ノ四	○つばな	三二ノ七
○地震	三五ノ四	身 <small>み</small> の爲 <small>ため</small> に庵 <small>いほ</small> を結 <small>むす</small> ぶ	三二ノ七	○茅花 <small>つばな</small>	三二ノ九
元暦三年	三〇六ノ九	六十 <small>むそぢ</small> の露	三〇八ノ二	○爪木	三二〇ノ四
齊衡年間	三〇六ノ四	○濁悪 <small>むろあく</small> の世	三〇四ノ一	○露 <small>つゆ</small> 朝顔	二九七ノ九
餘波	二九ノ五	○築地	三〇三ノ六	○條里	三〇一ノ三
○治承四年	三〇〇ノ四	○同	三〇五ノ二	○手のやつこ	三二四ノ四
風	三〇五ノ二	○同	三〇八ノ四	○天運	三二五ノ一
遷都	三〇九ノ九	○同	三〇九ノ二	○東大寺の佛の御首	三〇六ノ九
○長承三年―飢饉	三〇八ノ八	○月	三二ノ三	○科	三二五ノ二
○帳のとびら	三〇八ノ九	○つぎ琵琶	二九ノ五	○讀經	三二〇ノ九
○長明	三〇八ノ九	○辻風	三〇〇ノ一	○獨身	三〇七ノ九
五十 <small>いそぢ</small> の春	三〇八ノ一	○同	三〇五ノ五	○羽鳥	三二一ノ二〇
官祿	三二ノ六	○土	三〇一ノ二	○土木の煩	三〇一ノ八
妻子	三二ノ六	○津 <small>つ</small> の國 <small>くに</small> 今の京 <small>きやう</small>			
出家遁世	三二ノ六				
住家	三二ノ六				
つれづれの友	三二ノ六				

○富 <small>とみ</small> ―恐多 <small>おそ</small> し	三〇七ノ九	○歎 <small>なげ</small>	三〇〇ノ一	○念佛	三二〇ノ九
○遁世	三五ノ一	風	三〇七ノ三	閑居	三二六ノ六
○同	三三ノ二	權門 <small>ごんもん</small> の傍 <small>かたはら</small> に居 <small>ゐ</small> る者	三〇七ノ八	不請 <small>ふせう</small> の念佛	
○友 <small>とも</small> ―選擇	三二〇ノ五	○夏 <small>なつ</small> ―外山 <small>げさん</small> の庵	三二〇ノ七	○望 <small>のぞ</small>	三二五ノ三
○外山	三二〇ノ七	○難波 <small>なにわ</small> の京 <small>きやう</small>	三〇〇ノ八	靜 <small>しず</small> なるを望 <small>のぞ</small> とす	三二五ノ五
○外山の庵	三二〇ノ七	○西 <small>にし</small> の京 <small>きやう</small> ―餓死 <small>がし</small> 者	三〇四ノ二	生涯 <small>しやうがい</small> の望 <small>のぞ</small>	三二五ノ三
秋	三二〇ノ七	○丹 <small>に</small> つき	三〇三ノ二		
山中 <small>やまなか</small> の景色	三二〇ノ七	○仁和寺	三〇四ノ八		
その處 <small>ところ</small> のさま	三二〇ノ四	○同	三〇一ノ八		
夏	三二〇ノ七	○西 <small>にし</small> の京 <small>きやう</small> ―餓死 <small>がし</small> 者	三〇四ノ二		
春	三二〇ノ六	○丹 <small>に</small> つき	三〇三ノ二		
日々 <small>ひび</small> の行事	三二〇ノ六	○仁和寺	三〇四ノ八		
冬	三二〇ノ八	○同	三〇一ノ八		
○鳥 <small>とり</small> ―林	三二五ノ八	○同	三〇一ノ八		
○土居	三〇九ノ三	○同	三〇一ノ八		
○同	三二二ノ一〇	○同	三〇一ノ八		

○羽束師 三二一ノ一〇
 ○灰―燔 二九八ノ九
 ○春―外山の庵 三二〇ノ七

ヒ

○火 三〇六ノ七
 ○日―くし 三〇九ノ七
 ○樋口富小路 二九八ノ六
 ○ひぐらし 三二〇ノ七
 ○人 二九九ノ三
 ○人―の友たる者 三二一ノ二〇
 ○人―の奴たる者 三二一ノ二一
 ○ひとり身 三〇七ノ九
 ○鄙びたる武士 三〇一ノ九
 ○日野山の奥 三〇九ノ七

○琵琶ひば 三〇九ノ二一
 ○檜皮茸ひだぎき 二九八ノ九
 ○貧 三二〇ノ七
 家 三〇七ノ二
 歎 三〇七ノ九
 貧賤の報 三二六ノ四
 ○姫垣 三二〇ノ二

フ

○風害―治承四年 二九八ノ五
 ○服装、衣服 三〇一ノ九
 衣冠布衣 三〇一ノ九
 直垂 三〇一ノ九
 藤の衣 三二四ノ九
 ○鼻の聲 三二二ノ七
 ○普賢の像 三〇九ノ九
 ○不思議 二九八ノ三

○伏見ふしやう 三二一ノ一〇
 ○不請の念佛 三二六ノ六
 ○藤波 三二〇ノ六
 ○藤の衣 三二四ノ九
 ○文机 三二〇ノ一
 ○不動の像 三〇九ノ九
 ○船 三〇五ノ六
 ○冬―外山の庵 三二〇ノ八

ホ

○ほぐみ 三二一ノ九
 ○螢 三二二ノ三
 ○佛の教 三二五ノ二一
 ○時鳥 三二〇ノ七
 ○ほどろ 三〇九ノ二二
 ○燔―灰 二九八ノ九

マ

○妄心 三二六ノ五
 ○真木の島 三二二ノ三
 ○正木のかづら 三二〇ノ五
 ○松 三二一ノ二
 ○末期の安心 三二五ノ一〇
 ○満沙彌が風情 三二一ノ一

ミ

○身 三〇六ノ二
 あだなる様 三二五ノ二
 浮雲 三二七ノ一
 心 三二四ノ四
 同 三〇七ノ二〇
 他の奴 三二二ノ八
 身の有様 三二二ノ八

身の苦しみ 三二四ノ五
 身のため 三二二ノ五
 身の用 三二四ノ四
 身を知る 三二二ノ三
 身を捨つ 三二五ノ一
 身をつかふ 三二四ノ二
 身を奴とす 三二四ノ一
 身をやどす 三二二ノ二
 世に從はれば 三〇七ノ二一
 世に從ふ 三〇七ノ二〇
 ○眉間のひかり 三〇九ノ九
 ○みさこ 三二二ノ三
 ○操 三〇二ノ二
 ○短き運 三〇八ノ八
 ○道―遊世 三二六ノ二
 ○水 二九七ノ七

地震 三〇五ノ五
 常に害をなす 三〇六ノ七
 水の難 三〇八ノ六
 流泉の曲 三二一ノ三
 ○貢物みもの 三〇二ノ三
 ○御殿みどの 三〇二ノ二
 ○峰のかせぎ 三二二ノ五
 ○民部省―火災 二九八ノ六
 ○都 三〇一ノ二
 今の京 三〇一ノ二
 大地震 三〇五ノ六
 飢饉 三〇二ノ一〇
 京都に歸る 三〇一ノ二
 京のはじめ 三〇〇ノ四
 火災 二九八ノ五
 乞食 三二五ノ五
 故都と新都 三〇一ノ六

死首の數	三〇四ノ二	○物の心	二九八ノ三	身、他の奴となる	三〇七ノ一〇
人心	三〇〇ノ〇	○武士の子	三〇五ノ二	身を奴とす	三二四ノ一
常習	三〇二ノ〇	○紅葉	三二二ノ二	○山―地震	三〇五ノ四
住家	二九七ノ三	○門	三〇八ノ五	○山がつ	三〇三ノ九
同	二九七ノ三	長明の庵	二九八ノ八	○山鳥のほろ／＼と鳴く	三二二ノ四
生活	三〇〇ノ四	吹き放たれたる	二九八ノ八	○山守	三一ノ五
遷都	三〇〇ノ八	○養生	三二四ノ七	○雪	
難波の京	三〇一ノ〇	○養和年間	三〇三ノ三	大原山の庵	三〇八ノ五
風俗	三〇一ノ二	疫病	三〇三ノ五	外山の庵	三〇〇ノ八
風聞	三〇二ノ二	飢饉	三〇三ノ二	○行く川の流れ	二九七ノ一
田舎	三〇二ノ〇	○薬草	三二二ノ二		
○都のてぶり	三〇二ノ〇	○奴	三二二ノ二	○世―「人生」を見よ	三二五ノ二
		人の奴たる者	三二二ノ二	○用なき樂	三二五ノ一〇
ム				○餘算	三二五ノ一〇
○無言	三〇二ノ〇				
○無常	二九七ノ一				
○馬鞍	三〇〇ノ二				

○淀川	三〇〇ノ一	○往生要集	三〇九ノ二〇	○をり／＼の美景	三二五ノ三
○世に仕ふる程の人	三〇〇ノ八	○往反のわづらひ	三〇七ノ八		
○世の不思議	二九八ノ三	○和歌	三〇九ノ二〇		
○夜―庵	三二二ノ三	○和歌―月かげは(長月)	三二六ノ八		
○夜の床	三〇九ノ二	○我身―今昔	三二四ノ二		
○喜	三〇七ノ三	○庵	三二二ノ二		
		○わらびのほどる	三〇九ノ二		
リ					
○隆曉法印	三〇四ノ八	ヲ			
○流泉曲	三二一ノ三	○田舎	三〇二ノ一〇		
		○居屋	三〇八ノ三		
レ		○岡の屋	三二〇ノ二		
○蓮胤	三二六ノ七	○をり等	三〇九ノ二		
ロ					
○六條	二九九ノ五				

徒然草索引

語句の配列順は總て
歴史的假名遣に據る

<ul style="list-style-type: none"> ○愛敬<small>あいぎやう</small> ○愛樂<small>あいげつ</small> ○愛憎—生死 ○愛著の道<small>あいかざ</small> ○藜のあつもの ○岡柳棚 ○曉、曙、朝 男、女と物語る 別 ○あが佛とまもる ○秋 	<ul style="list-style-type: none"> 三二八ノ三 三九二ノ三 三七〇ノ八 三二〇ノ〇 三三〇ノ二 三三三ノ八 三七五ノ二 三七五ノ九 四二八ノ三 四〇八ノ五 	<ul style="list-style-type: none"> 月見 月 とり集めたること 野分の朝 物のあはれ ○章兼<small>あきかね</small> ○商人<small>あきびと</small>—商人<small>しやうじん</small>を見よ ○顯基中納言 ○あきらかならん人 ○悪—「善悪」を見よ ○悪鬼惡神 ○悪行 ○悪事 ○悪人のまね 	<ul style="list-style-type: none"> 四三〇ノ一 三三六ノ一 三三八ノ五 三九〇ノ五 三七〇ノ五 四四〇ノ一 三二九ノ二 四二二ノ一 四二二ノ三 三七六ノ九 三八〇ノ五 三六五ノ六 	<ul style="list-style-type: none"> ○惡念<small>あくごん</small> ○安居院<small>あぐいん</small> ○朝寢<small>あさい</small> ○朝顔 ○朝餉 ○淺茅が宿 ○麻の衣 ○あし ○あし<small>あし</small> ○阿字々々<small>あじく</small> ○足利左馬入道 ○足鼎 ○足駄 	<ul style="list-style-type: none"> 四三九ノ九 三四五ノ三 四一九ノ一〇 四〇〇ノ九 三三一ノ一 三九五ノ九 三五〇ノ二 三四五ノ一〇 四〇三ノ三 四〇四ノ一 四三八ノ八 四三八ノ二 四六六ノ一〇 三三三ノ一
--	--	--	--	--	---

○葦の御簾	三三三ノ二	○扇	法顯三藏	三六四ノ九	○安樂	四四五ノ八
○阿字本不生	四〇四ノ三	連歌の賭物	三六八ノ四	○雨	三九五ノ二	
○飛鳥川の淵瀨	三二一ノ二	○櫻	三四〇ノ一	登蓮法師	四二六ノ二	
○汗	三九〇ノ一	○葵	かけわたす	三九七ノ二	○怪	四三四ノ五
○藥	三九〇ノ一	枯れたる葵	三九八ノ三	○綾小路の宮	三三三ノ一	
○恥	三九〇ノ一	祭の後	三九八ノ二〇	○菖蒲	三八八ノ一	
○あそび法師	三三八ノ一	○押領使	三五六ノ二〇	○鮎の素干	四三三ノ四	
○仇討	三八二ノ四	○尼	噓々	○荒夷	四〇二ノ五	
○あだし野の露	三三〇ノ六	比丘尼	三三三ノ四	○あらがひ	三九三ノ二	
○味	四五六ノ二	松下禪尼	三七六ノ七	○嵐	三三五ノ三	
○吾妻人	四〇一ノ七	男に別れし女	四三三ノ九	○争	三九〇ノ二〇	
○東人	四二一ノ二	○餘りに興あらんとする事	四二八ノ六	争を好む失	四二九ノ二	
都の人との比較	四二一ノ二	○安喜門院	三七八ノ二〇	己が境界にあらざる	四二九ノ二	
都の人に交る	四五五ノ一	○諸證の禪師	三七七ノ六	もの	四二九ノ二	
女	四四一ノ二		四二九ノ二〇	虚無僧	三八三ノ二	
○穴(横笛)	四三八ノ九			死後の財産争	四〇一ノ三	

資季と具氏と	三九三ノ六	イ	○優越	三九〇ノ二〇	栲器	四三三ノ六
月と露	三二九ノ三	○同	○遊戯	四二二ノ九	唐櫃	三七三ノ三
ともがらに争はず	三九〇ノ二	石を弾く	貝合	四二四ノ九	乾砂子	四二〇ノ一〇
人鬼見る人	三四五ノ六	興	雙六「雙六」を見よ	三九〇ノ四	火爐の炭	四三七ノ三
物に争はず	三九〇ノ四	謎々	まゝ子立	三七四ノ五	内裏の建築	四三六ノ八
○改めて益なき事	三八八ノ六	○幽玄の道	○有職、故實	三六六ノ六	鳥柴	三五五ノ二
○有明の月	三七六ノ一	ありたきこと	ありたきこと	三八八ノ八	箱の栗形に緒つくる	三七七ノ七
○在兼卿	四五二ノ五	大臣大變	大臣大變	四〇九ノ二	紐	四三五ノ一
○有栖川	三八一ノ九	ありたきこと	ありたきこと	三二八ノ八	ふるまひ	三四三ノ二
○ありたきこと	三二八ノ七	○有職、故實	ありたきこと	三二八ノ八	やない筈	四五〇ノ七
○有仁(花園左大臣)	三三〇ノ二	○幽玄の道	ありたきこと	三二八ノ八	○怒	四三三ノ二
○有房(六條の内府)	三九四ノ九	○有職、故實	ありたきこと	三二八ノ八	鳥獸蟲	三八九ノ三
○有宗入道	四四四ノ二	ありたきこと	ありたきこと	三二八ノ八	○勢	四三九ノ二
○あるじなき所	四四九ノ二	ありたきこと	ありたきこと	三二八ノ八	深く物を憑む	四三六ノ二
○あるじまうけ	四三八ノ九	ありたきこと	ありたきこと	三二八ノ八		三七七ノ八
○荒れたる宿	三七四ノ八	ありたきこと	ありたきこと	三二八ノ八		
○香葉	三七七ノ九	ありたきこと	ありたきこと	三二八ノ八		

○勢	四六ノ三	○異説	三八ノ八	○一律(音)	四一ノ六
○池		○伊勢物語	三五ノ二	○一切經	四二ノ三
龜山殿の池	三四五ノ九	○磯の禪師	四四ノ六	○一切の有情	三六九ノ五
神泉苑の池	四二ノ九	○板敷	三七四ノ二	○一生の懈怠	四二六ノ六
法成就の池	四二ノ九	あやしき板敷	三七四ノ二	○五緒	三五四ノ六
○石	三五八ノ九	倚廬の御所	三三三ノ二	○偽	
○醫師、醫術		小板敷	三三三ノ二	語り傳ふる事	三五八ノ二
足鼎被きたる僧	五四七ノ三	○いたづらなる人	三八六ノ四	智惠	三三八ノ九
あつしげ	三九四ノ七	○一言芳談	三七二ノ二	人の心	三六五ノ一
忠守	三七四ノ五	○一時の懈怠	四二六ノ六	○泉	三九六ノ六
必要	三六六ノ一	○一大事の因縁	四二七ノ四	○出雲	四四九ノ八
善き友	三八三ノ二	○一條室町	三四五ノ三	○絲	
○意趣	三五八ノ一	○一日の起居	三七八ノ二	白き絲	三三三ノ二
○醫書	四二五ノ四	○一年の相	三五四ノ四	みなむすび	四一〇ノ二
○衣食住の三大事	三六六ノ二	○一念の念佛	四四五ノ九	○絲竹	三八六ノ六
○伊勢	三二二ノ二	○一の上 <small>かみ</small>	三六四ノ六	○因幡 <small>いなば</small>	三三九ノ八
○伊勢(大神宮)	四三三ノ二	○一の人	三七七ノ四	○犬	

生きたる犬の足	三六八ノ九	人を待たす	三五二ノ二〇	于孫の多き家	三五八ノ九
大鷹	四一六ノ八	不思議	三九八ノ三	後世の願	三五〇ノ三
飼主に飛びつく	三六八ノ六	雪の如き	四二二ノ二	造作	三四九ノ一
小鷹	四一六ノ八	○祈 <small>いはらふ</small>	三四八ノ五	死者の家	三四四ノ一〇
人くふ犬	四三三ノ七	○石清水	三四六ノ三	葎 <small>しとみ</small> 「葎」を見よ	三九一ノ九
人に優る	三八五ノ五	○衣服「服装」を見よ	三九八ノ七	寢殿	三三二ノ二
人をとがむ	三七四ノ九	○庵	三九八ノ七	寢殿に繩を張る	三三二ノ二
むく犬	四〇六ノ一〇	○家、住居、建築	三九八ノ二	主人の心	三三二ノ二
○命		ありたき木	三九八ノ二	總門	三四二ノ二
雨のはれまを待たす	四二七ノ一	あるじなき所	四四九ノ二	内裏の建築	三六四ノ三
一日の命	三七〇ノ六	板敷「板敷」を見よ	四四九ノ二	竹のあみ戸	三四二ノ二〇
命を終ふる大事	三九三ノ四	倚廬の御所	三三三ノ二	中陰	三三四ノ七
刹那	三七八ノ七	格子 <small>かし</small>	三四一ノ六	中門	四三三ノ二
存命のよろこび	三七〇ノ八	閑院殿	三三六ノ九	妻戸「妻戸」を見よ	三四九ノ一
鳥獸蟲	三八九ノ三	京極殿	三三三ノ二	天井	三四九ノ一
長ければ恥多し	三二〇ノ一〇	櫛形の穴	三三六ノ九	長押 <small>ながし</small>	三三六ノ二
人と蟲	三三〇ノ七	構造	三四八ノ二	夏	三四八ノ二

人間三大事の一 主ある家 鼠 長閑に住みなしたる 人 屏風、障子、調度 冬 磨き立てたる家 御曹子 棟に繩を引く 母屋 遣戸―「遣戸」を見よ 廊 ○家柄 拙き人 忘るべし ○家長が日記	三六ノ二 四九ノ二 三七ノ二 三三ノ四 三三ノ一 三六ノ四 三三ノ八 四五ノ六 三三ノ二 三九ノ二 三七ノ一 三三ノ三 四二ノ一〇 三三ノ七	○家平(岡本關白殿) ○今さらの人 ○今出川 ○今出川のおほい殿 ○今出川の院の近衛 ○今の一念 ○同 ○今様 ○異名 ○因縁 ○飲食、食物 鮎の素干 芋頭 えび かいらちひ 鱧 からざけ	三五ノ一〇 三六ノ一 三四ノ四 三八ノ九 三六ノ六 三七ノ一 三七ノ八 三三ノ六 四四ノ二 四二ノ四 四三ノ四 三三ノ一 四三八ノ九 四四ノ九 三八ノ八 四三ノ二	饗膳 食物 樂欲する所 鯉の羹 鮭の素干 食は人の天也 大食 ときひじ 人間三大事の一 光親卿の有職の振舞 餅 ○印結ぶ ○芋頭 ○賤しげなるもの ○入り立たぬ様したる ○醫療 ○入物―穢	三五ノ二 四四ノ五 四五六ノ二 三八ノ一 四二ノ四 三六ノ四 三五ノ二 三五ノ四 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二 三五ノ一 三五ノ一 三五ノ一 三五ノ一 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二
--	---	--	--	--	---

○倚廬の御所 ○いろをし坊 ウ ○馬 ○牛 章兼が牛 牛を賣る者 陰陽師 たま〜出仕の轂牛 必要 人つく牛 分別 ○羅の表紙 ○歌―「和歌」を見よ ○歌の道―「和歌」を見よ ○訟―まけたる	三三ノ二 三八ノ五 四一五ノ六 四二四ノ一 三三ノ二 四三ノ二 四三ノ四 四三ノ四 三八ノ四 四三ノ六 四三ノ三 三六ノ二〇 四三ノ六 四三ノ六	○歌枕 ○歌物語 ○内住 ○宇治左大臣(頼長) ○宇治の里人―水車 ○うつ ○うつばもの ○器物―「器物、道具」を見よ ○太秦殿 ○太秦の善觀房 ○疎き事 ○優婆夷 ○優婆塞 ○馬―「馬」を見よ ○運 ○梅 薄紅梅	三五ノ八 三四ノ二 四三ノ二 四〇八ノ二 三四五ノ九 四一〇ノ四 三五〇ノ六 三八ノ一 四四五ノ九 三六ノ八 三七ノ八 三七ノ七 三六ノ二 四〇〇ノ二	好色 重りたる紅梅 紅梅 櫻 十月 白き 作り枝に雉をつく 句 一重 ○梅宮 ○裏書 ○恨 興宴より起る 深く物を憑む 恥 ○憂―酒 ○植木	四五ノ八 四〇〇ノ三 三五ノ一〇 四〇〇ノ三 四〇八ノ六 四〇〇ノ二 三五ノ一〇 三七ノ一〇 四〇〇ノ二 三三ノ二 四三ノ二 四三ノ二 三九ノ九 四三六ノ二 四三九ノ二 四一八ノ一〇 四〇七ノ八
---	---	---	--	--	---

○家平(岡本關白殿) ○今さらの人 ○今出川 ○今出川のおほい殿 ○今出川の院の近衛 ○今の一念 ○同 ○今様 ○異名 ○因縁 ○飲食、食物 鮎の素干 芋頭 えび かいらちひ 鱧 からざけ	三五ノ一〇 三六ノ一 三四ノ四 三八ノ九 三六ノ六 三七ノ一 三七ノ八 三三ノ六 四四ノ二 四二ノ四 四三ノ四 三三ノ一 四三八ノ九 四四ノ九 三八ノ八 四三ノ二	饗膳 食物 樂欲する所 鯉の羹 鮭の素干 食は人の天也 大食 ときひじ 人間三大事の一 光親卿の有職の振舞 餅 ○印結ぶ ○芋頭 ○賤しげなるもの ○入り立たぬ様したる ○醫療 ○入物―穢	三五ノ二 四四ノ五 四五六ノ二 三八ノ一 四二ノ四 三六ノ四 三五ノ二 三五ノ四 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二 三五ノ一 三五ノ一 三五ノ一 三五ノ一 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二 三六ノ二
--	--	--	---

○魚	鮎	えび	鯉	心樂ぶ	鯉 <small>こひ</small> 「鯉」を見よ	鮭
四三三ノ四	四三六ノ九	三八四ノ八	三三〇ノ四	四三三ノ三		
○工	○衣胞 <small>えな</small> 滞る時の呪	○江の侍従	○えび	○夷 <small>えい</small> 「武、武士」参照	荒夷	管絃
	三五三ノ八	三九九ノ九	四三八ノ九	四〇二ノ五	三六二ノ九	佛法
					四〇二ノ五	物のあはれ
弓ひくすべ	連歌	○夷 <small>えい</small> 「廻鶺鴒國」	○えふ	○縁	結縁	諸
三六二ノ八	三六二ノ九	四三七ノ九	三六六ノ二〇	四〇四ノ三	四〇四ノ三	三六二ノ三
						放下すべき時
						離る
						○延喜式
						○延政門院
						○衣紋
						○應對
						三三三ノ二
○應對	○行愚なりと知らば	○騷 <small>せう</small> 「騷者」を見よ	○落葉	○乙牛 <small>おつ牛</small> (女房)	○乙鶴丸	○大臣の大饗
四二四ノ二	三九二ノ二	四〇八ノ六	四〇八ノ六	三八三ノ二	三八八ノ七	宇治左大臣
						よそへ行幸
						○鬼
						○鬼の虚言
						○己を知る
						○御佛名
						○大江匡房(江帥)
						○大雁
						○大口
						○多くて見苦しからぬもの
						三五八ノ二〇

オ

○多 <small>おほ</small> 久資	○大原野	○大原の里の飯 <small>こしき</small>	○大社 <small>おほやしろ</small>	○大井川	○同	○大井の土民 <small>しづ</small> —水車	○恩愛の道	○御衣胞	○音樂、舞樂、樂器—「管絃」参照	神樂	寒暑	國の樂	廻 <small>めぐ</small> 忽	廻 <small>めぐ</small> 鶺鴒	玄上	聲 <small>こゑ</small> をかくして
四四四ノ六	三三二ノ二	三五三ノ九	四四九ノ八	三四五ノ九	四三四ノ二	三四五ノ九	四〇二ノ八	三五三ノ八	三三六ノ五	四四二ノ六	四三七ノ九	四三七ノ九	四三七ノ九	三五七ノ二〇	三二八ノ九	
想夫戀	相府蓮	絲竹に妙なる	笙	調子	音 <small>ね</small> をたてんと思ふ	篳篥	人の咎	琵琶—「琵琶」を見よ	笛—「笛」を見よ	牧馬	天王寺の舞樂	横笛—「笛」を見よ	夜	和琴	○御菓物 <small>おんくだもの</small>	
四三七ノ七	四三七ノ七	三八六ノ六	四四二ノ四	四四二ノ三	四〇九ノ三	三三六ノ五	四四二ノ一	四四二ノ一	三五七ノ二〇	四四二ノ三	四二九ノ一	四二九ノ一	三六六ノ六	四一九ノ四		
○飲食 <small>おんじき</small> —「飲食」を見よ	○御鷹飼	○陰陽師、陰陽道	有宗入道	牛	赤舌日 <small>しやくぜつにち</small>	○陰陽のともがら	○面影—名	○思ひたつ日	○親子	親の志	子孫の多き	子無くてありなん	子を愛する女	生活	鳥獸蟲	無常の來る時
三五四ノ二	四四四ノ二	四四四ノ二	四四四ノ二	三六八ノ二	四二二ノ五	三五八ノ二	三五二ノ八	四〇二ノ九	四〇二ノ九	三五八ノ九	三三〇ノ一	四二八ノ五	四〇二ノ二	三八九ノ二	三五二ノ二	

物のあはれ 四〇二ノ六
 ○愚「愚人」参照
 高位高官を望む 三三八ノ五
 假にも學ぶべからず 三六五ノ五
 身後の名 三三八ノ八
 車馬金玉の飾 三七七ノ二
 生死の到来 三四〇ノ五
 政治と幽玄の道 三八六ノ七
 人の心 三二二ノ三
 無益に生を送る 三七九ノ二
 唐の物 三八五ノ一
 ○愚にして怠る人 三七八ノ五
 ○愚に拙き人 三三八ノ三
 ○戒 四二八ノ二
 ○善悪 三七二ノ二

○播燈 三二一ノ三
 ○かいもちひ 四四九ノ九
 ○拷器 四三三ノ六
 ○高貴の人 三八二ノ九
 ○交際 三九〇ノ九
 恨 三六〇ノ二
 言語 四二一ノ二
 見ぐるしき 四二一ノ三
 無益の談話 四二一ノ八
 ○格子 三四一ノ六
 ○柑子 三三三ノ二
 ○交情 三三七ノ八
 躑ぎ人の打解くる 三三七ノ三
 音づれぬと變らぬと 三三三ノ二
 中絶 三四九ノ四
 程經て逢ひたる人 三三三ノ二

色好まざらんにかかじ 四五五ノ九
 色好まざらん男 三二九ノ四
 四十に餘れる人 三八一ノ四
 男の親切 三三二ノ九
 ○行成 四五二ノ二
 ○江帥(大江匡房) 四二一ノ五
 ○強盜法印 三四三ノ二
 ○高名の木のぼり 三七九ノ六
 ○高野大師の御作の目錄 四二六ノ六
 ○高良 三四六ノ四
 ○亢龍の悔 三六四ノ七
 ○かうる 三三〇ノ二
 ○家屋「家、住居」を見よ 三三〇ノ二
 ○鏡 三九二ノ八
 醜貌の僧 三九二ノ一
 よろづの影うつる 四四九ノ四

カ

○杜若 四〇〇ノ八
 ○瓊瑾 四〇五ノ二
 ○類
 喜書 四五三ノ一
 法成寺 三三三ノ八
 門に類かくる 四二〇ノ四
 龍華院 四五三ノ二
 ○學匠 三五二ノ二
 ○同 三八七ノ五
 ○下愚の性 三五五ノ五
 ○下愚の人 四〇六ノ五
 ○學問、知識 三二八ノ七
 學問藝能 三九〇ノ二
 學問の力 三六一ノ三
 學問をやめよ 三八六ノ一
 手跡 四二四ノ七
 處世の方便 四二四ノ七

智 三三八ノ二
 人に勝つゝの道 三九〇ノ二
 文(經書)の道 三二八ノ七
 目の前の事 四二五ノ二
 ○神樂 三三六ノ五
 ○景茂(樂人) 四四一ノ九
 ○賭物 三六八ノ四
 ○かげろふ 三三〇ノ九
 ○かしこげなる人 三九三ノ一
 ○春日 三三一ノ二
 ○風 三三〇ノ一
 ○形 三五〇ノ二
 ○かたはもの 四〇七ノ四
 ○帷子 三四七ノ三
 ○加持香水 四五三ノ七
 ○家畜 三八五ノ四
 ○桂 三七五ノ一〇

○桂 四〇〇ノ七
 ○かつた 三八四ノ八
 ○勘解由小路二品禪門 四二〇ノ四
 ○勘解由小路家能書の人々 四五二ノ九
 ○看督長の負ひたる靴 四三三ノ四
 ○金澤(武藏國) 三三六ノ二
 ○鐘 三三六ノ二
 鐘の聲 四四二ノ八
 西園寺 四四二ノ九
 常在光院 四五二ノ五
 法金剛院 四四二ノ二
 銘の韻の相違 四五二ノ七
 六時堂の前の鐘 四四二ノ六
 ○兼明親王(前の中書王) 三三〇ノ二
 ○兼季(菊亭の大臣) 三五七ノ一〇
 ○同(今出川のおほい殿) 三八二ノ九
 ○兼行 三三三ノ八

○河竹	四三ノ六	○鎌倉の中書王	四二ノ五	○紙 <small>かみひねり</small> 捻	四五ノ八
○蛙	三三ノ三	○神 <small>しん</small> 「神社」参照	四三ノ二	○漢 <small>かん</small> —廻鶻國	四三ノ九
○蒲 <small>か</small> の冠者	四五ノ四	鬼神	四三ノ二	○閑暇	三八ノ一〇
○土器 <small>か</small>	四七ノ三	五條の天神	四三ノ三	あまりの暇	三六ノ一〇
○甲 <small>か</small> 香 <small>か</small> (貝)	三六ノ二	参詣	四二ノ六	名利	三三ノ九
○かひどり姿のうしろ手	四九ノ二	錢	四九ノ二	老人	四〇ノ四
○貝をおほふ人	四四ノ九	太神宮	四三ノ二〇	○閑居—山里	三三ノ六
○不可は一條	三八ノ二	蛇	四四ノ八	○顔回	
○かぶしかたち	三七ノ三	靴 <small>ゆび</small> かけられたる	四三ノ四	不幸	四三ノ五
○樂府の御論義	四四ノ二	夜詣づ	四九ノ六	勞を施さず	三八ノ七
○冠物		○髮		○漢詩	
今昔	三五ノ八	鯉の羹	三八ノ一	沅湘日夜 <small>(三體詩)</small>	三三ノ二
烏帽子	四四ノ七	女の髮	三二ノ七	去者日已疎 <small>(古詩)</small>	三四ノ二
男	三七ノ九	女の髮筋をよれる綱	三三ノ一	人非木石 <small>(鮑照)</small>	三四ノ八
○冠桶 <small>かぶりをけ</small>	三五ノ八	○上 <small>かみ</small> さま	三二ノ一〇	○漢字 <small>(虚無僧)</small>	三八ノ一
○楓	四〇ノ七	○かみなづき	四三ノ九	○甘心 <small>かんじん</small>	三六ノ六
○鎌倉—鏝	三八ノ八	○紙の衾	三五ノ二	○上達部	三六ノ三〇

○千の穴 <small>(横笛)</small>	四一ノ三	○唐のもの	三八ノ二	落葉	四〇ノ六
○感涙	四五ノ六	○唐橋中將	三〇ノ一〇	庭に多き	三五ノ九
○閑院殿	三三ノ九	○唐櫃 <small>か</small>	三七ノ二	○氣	四〇ノ七
○龜菊 <small>(白拍子)</small>	四四ノ一〇	○唐瓶子 <small>か</small>	三七ノ七	○灸	四〇ノ二
○龜山殿		○雁		穢	四〇ノ二
池に水を引く	三四ノ九	秋	三八ノ四	四十以後の人	四〇ノ四
蛇	四四ノ七	大雁	四二ノ二	○宮中	
○賀茂		くろみ棚	三八ノ四	朝餉	三三ノ一
岩本	三五ノ一	○狩衣	四二ノ二	門	三三ノ一
競馬	三九ノ二	○同	四二ノ五	神さびたる有様	三三ノ三
神社	三三ノ二〇	○假のやどり	三三ノ四	黒戸 <small>「黒戸」を見よ</small>	
橋本	三五ノ一	○苜蓿 <small>か</small>	四〇ノ九	小板敷	三三ノ二
○鴨長明	三九ノ四	○乾砂子 <small>か</small>	四二ノ八	小蔀	三三ノ二
○蚊遣火	三八ノ三	○木		諸司の下人	三三ノ四
○からざけ	四三ノ二	家 <small>か</small> にありたき木	三九ノ二	仁壽殿 <small>にじうてん</small>	四三ノ六
○鳥	三五ノ五			眞有院	四三ノ八
○唐の狗	三七ノ九			神泉苑	四三ノ八

大極殿	三九一ノ六	したり顔に言ふ	四三ノ八	花の盛	四一〇ノ九
内裏の建築	三三六ノ八	名と面影	三五八ノ二	○北	三九一ノ九
高遣戸	三三二ノ二	○菊		○北山太政入道	四四六ノ九
陣「陣」を見よ		秋の草は	四〇〇ノ九	○北山入道殿(實氏)	三八四ノ四
殿	三三二ノ一	黄菊	四〇〇ノ九	○桔梗	四〇〇ノ八
主殿寮	三三〇ノ九	薬玉	三九九ノ六	○吉日	三六九ノ二
内侍所の鈴の音	三三二ノ五	○菊亭の大臣	三五七ノ一〇	○吉凶	三六九ノ六
布の帽類	三三三ノ三	○機嫌	四〇七ノ二	○木造の地藏	四三二ノ四
御簾	三三三ノ二	○雉		○狐	
御調度「調度」を見よ		梅の作り枝につく	三五五ノ二	あるじなき所	四四九ノ三
夜の御殿「夜の御殿」を見よ		雙なき鳥	三八四ノ三	ばげ損じたる	四四六ノ二
露臺	三三一ノ一	○鬼神	四三四ノ二	人に食ひつく	四四〇ノ九
居睡	三三二ノ四	○起請文	四三三ノ八	未練の狐	四四六ノ三
○弓馬のわざ		○季節		○喜怒哀樂	三八九ノ二
○記憶の感	三五八ノ五	移り變る	三七七ノ五	○奇特	三五九ノ二
○聞く		氣の變化	四〇八ノ四	○衣 被の女房	三五八ノ一
音に聞くと見る時と	三五九ノ三	四季の序	四〇八ノ九	○同	三七三ノ一〇

○技能	三六一ノ三	○君の寵	四三六ノ五	○行	三三九ノ三
○木の端	三七七ノ二	○金一鐵	三八六ノ八	○響應	四二八ノ九
○希望「明日の命	三七八ノ九	○公明(侍従大納言)	三七四ノ六	○同	四四七ノ一
○牙あるもの	四二二ノ八	○金玉のかざり	三七七ノ二	○境界	四一九ノ二
○器物、道具		○近火	三五二ノ九	○行雅僧都	三四〇ノ一〇
具足	三四四ノ三	○禁獄	四二一ノ四	○京極殿	三三三ノ二
古代の姿	三三〇ノ七	○公實(堀川院)	三三三ノ三	○京極入道中納言	四〇〇ノ五
選擇	三六三ノ五	○禽獸に近き振舞	三六三ノ二	○狂人	四一七ノ三
調度「調度」を見よ		○金錢「財寶、金錢」を見よ	三六七ノ五	○狂人のまれ	三六五ノ六
手なれし具足	三三四ノ六	○公任(四條大納言)	四三三ノ二	○行成大納言	三三三ノ八
○貴船	三三二ノ二	○公孝(徳大寺右大臣)	四三三ノ二	○行宣法印	四三三ノ四
○規模	三七三ノ四	○公經(北山太政入道)	四四六ノ九	○饗膳	三五三ノ二
○君		○公衡(竹林院入道左大臣)	三六四ノ五	○行歩	三七八ノ二
恩	三五二ノ二	○經		○行法	四一〇ノ六
後世願ふ人	三五〇ノ五	一切經	四二二ノ三	○經文の紐	四三五ノ一
錢	四三九ノ一〇	首楞嚴經	四二二ノ四	○格「灸治の様	四〇五ノ二
帝位	三二七ノ三	善業	四〇九ノ八	○毀譽	

己が境界に非ざるもの	四二九ノ二	○綺羅	三七五ノ二	秋の草は	四〇〇ノ八
死人を譽むる	四〇三ノ九	○記録―占文の裏に書ける	四二一ノ六	草は	四〇〇ノ八
外の譏を知らず	三九二ノ八	○驥を譽ぶ	三六五ノ七	十月	四〇八ノ六
譽を愛する人	三三八ノ六	○祇園精舎の無常院の鐘聲	四二二ノ九	庭に多き	三五八ノ九
○許由	三二六ノ一〇			墓所	三三三ノ六
○興				めなもみ	三七二ノ一〇
餘りに興あらんとする	三四八ノ一〇			○草の庵	三九八ノ七
遊戯	三九〇ノ四			○嘘―呪	四四三ノ四
幼兒を言ひ辱む	三八九ノ八			○公事	三二八ノ八
酒	四一九ノ三			ありたきこと	三二八ノ八
智	三九〇ノ八			年の暮	三九一ノ一
ふるまひ	四四六ノ二			又五郎をのこ	三七四ノ二
○凶事	四三四ノ五			○柳形の穴	三五六ノ九
○凝當	四〇九ノ二			○愚人―「愚」参照	四一六ノ二
○虚言―「言語」を見よ	四〇九ノ二			犬の心	四〇六ノ五
○魚道	四〇九ノ二			下愚の人	四〇六ノ五
○清行	四一六ノ六			光陰	三六六ノ九

賢者を憎む	三六五ノ二	唐のものは	三六四ノ二	驕奢	三二八ノ二
疾	四一五ノ五	土大根	三五六ノ一〇	賊	三七一ノ一
存命の樂	三七〇ノ九	庭	四四四ノ五	○公人	四三三ノ二
樂	三三二ノ二	人間四大事の一	三八七ノ二	○功能	三九四ノ八
たはぶれ	四三〇ノ二	めなもみ(草)	三七二ノ一〇	○水鷄	三三八ノ二
智者は愚者	三七二ノ八	○曲者	三五三ノ一	○九品の念佛	三八二ノ四
人の終焉	四〇三ノ八	○具足	三四四ノ三	○君子	三七二ノ一
人の智	四二九ノ七	○菓子	四一九ノ四	仁義	三七二ノ一
物を憑む	四三六ノ二	○愚癡	三八九ノ四	多能	三八六ノ六
老死を悲む	三六〇ノ七	○蛇―「蛇」を見よ	三七二ノ一〇	○久米の仙人	三三二ノ五
利	三三八ノ一	○蝮―めなもみ	三七二ノ一〇	○公物	三七三ノ四
○葛	四〇〇ノ九	○九條相國(伊通)	四五三ノ三	○九郎判官	四四五ノ四
○醫師―「醫師」を見よ	三九九ノ六	○九條太政大臣(伊通)	三三〇ノ二	○くらき人	四二九ノ七
○藥玉	三九九ノ六	○九條殿―遺誠	三三九ノ二	○苦樂	四五六ノ一〇
○藥―「疾病」参照		○口傳	四四一ノ二	○競馬	三三九ノ二
汗	三九〇ノ一	○國―「政治」参照	三六〇ノ三	○鞍馬	四三三ノ三
芋頭	三三二ノ四	國を保つ道	三六〇ノ三	○栗	三三九ノ九